
この背中に、白い翼は無いとしても。 2 《第一章～どうか忘れないで、君が交わした約束を～》

煌はじめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この背中に、白い翼は無いとしても。 2《第一章》どうか忘れな
いで、君が交わした約束を《

【Nコード】

N7475M

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。
一緒に幸せになる魔法なんだ』

それは今から四十年以上昔。暴力に晒され、雨
の中ボールを蹴っていた少年はそう言って笑った。己を不運を呪う
事なく。やがて少年 - 影山零治の世界が朽ち果て、歪んだ大人に

なる日まで。

四十年後。新たな悲劇

が幕を開ける。エイリア事変。宇宙人襲来と雷門イレブン。影山がかつて育てた子供 - 鬼道有人が策謀の中命を落とした時、封じられた過去は呼び覚まされる。まだ本当の惨劇は始まってすらいらない。仲間の死に立ち竦む円堂達。兄の死に嘆く春奈と、愛する者の死を前にそれでも尚立ち上がる塔子。

憎しみに壊れた佐久間と源田。愛を請うて歪んだ不動。そして“絶望の魔術師”こと影山零治。真帝国に魔女が降臨する時、新たな終わりが始まる。

後に

語られるエイリア事変、そのもう一つの物語。これはその、第一章。

はじめに。

この作品は、イナズマイレブンの二次創作になります。公式とは一切関係がありません。また、以下の点が含まれます。

イナズマイレブン二期（驚異の侵略者編）をベースにしたパラル。

原作沿いと見せかけたサッカーバトルファンタジー。最終的には原作とまったく違った展開と結末が待っています。

闇墜ち要素、死ネタ要素強し。残酷な生体実験描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15指定。

エイリア学園はマスターランク以外洗脳されている設定。

全てのキャラクターにおいて過去捏造だらけ。

塔子と鬼道が幼なじみ設定。若干この二人で恋愛描写あり（プラトニック）

鬼道やエイリアっ子をはじめとして、悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。

うみねこパロ要素あり。全ての悪事の黒幕として魔女が登場。

ディシディアファイナルファンタジー、キングダムハーツ、すばらしきこのせかい、からゲストキャラ出演。ただし上記キャラを知らずとも支障なし（また第一章で彼らの出番はありません）。

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表現があるかもしれません。

基本友情重視ですが、塔子×鬼道以外にも公式の恋愛描写は若干あります。リカ×一之瀬は強めかも。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。

序章を読まれた方ならご存知の通り、序章終盤にイナズマイレブンのキャラから死人が出ています。また今後もある予定ですし、生き返り…なんて非常識展開もあったりします。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。長い長い物語になりますがお付き合いただければ幸いです。

オリジナルキャラクター紹介

この作品にはオリジナルキャラクターが登場します。ただし、以下出張るのは二名のみ。またあくまでメインは版權キャラクターになります（個人的にオリジナルがたくさん出る＆メインに来る版權小説は苦手なため）。

サクラミサトヤ 桜美聖也

雷門中三年の男子生徒。最近転校してきて、サッカー部に入部した。ポジションはMF。

青みがかった黒髪とキャップが特徴。群青色の瞳の中性的な容姿。黙ってれば相当な美形。が、とんでもない方向音痴。運動神経は良いのにドジ。さらに、可愛いコを男女問わずお持ち帰りしようとする問題児。雷門中の数少ないギャグ要員である。

体力馬鹿で怪力馬鹿だが、コントロール音痴すぎて試合ではあまり戦力にならない。必殺技は一応、彗星シュート。

FFで帝国地区予選の際、鉄骨の下敷きになりかけたにも関わらず足の骨折だけで済むほど丈夫。また、どこかの国の軍に関わる仕事をしていると専ら噂であり、謎の多い人物である。

外見は中三だが、見た目通りの年齢ではない。天涯孤独となった吹雪の面倒を見ており、今でも仕送りは欠かしていない。

その正体は、S級犯罪者・災禍の魔女アルルネシアを追って、異世界からやって来た創造の魔女キーシクス。性別年齢外見を自在に変える事ができる為、普段は少年の姿をしている。が、性格と喋り方は完全に素のまま。

ニノミヤランコ
二ノ宮蘭子

吉良星二郎直属の警護頭にして秘書官。エイリア石に関わる研究と実験を推し進める科学者達のリーダーでもある。

後ろでくくった茶髪のおかっぱが特徴。紅い眼をした、二十七歳くらいの妖艶な美女。ある日突然吉良の元に現れ側近になった為、エイリア学園メンバーからは多かれ少なかれ疑念を抱かれている。

冷酷で身勝手なサディストであり、ガゼルを始めとした多くの子供達に嫌われている。実は、全ての事件の鍵を握る存在である。

その正体は、自分の喜悦の為にあらゆる世界を混乱に陥れてきた災禍の魔女・アルルネシア。死者を自在に生き返らせ、駒として操ったり、人々の心の負の要素を増幅させ洗脳する事が出来る。

人間をゴミとしか思っておらず、良識などひとかけらも持ち合わせていない。聖也いわく、“最低最悪の愉快犯”。

【1・0・Message from Satoya Sakurami】

この世界にやってきた俺の、一番古い記憶は――大体四十何年前のものになる。

その時まだ俺は、桜美聖也の姿をしていなかった。キーシクス、という名の魔女にしてソルジャー。二十歳前くらいの女の姿で、世界を調査して回っていた頃だ。

そのガキに出逢った場所は、公園。しかも酷い雨が降っていた夕暮れ。もう子供はとうに帰る時間だ。なのにそいつは傘もささないで、雨の中で泣いていた。

サッカーボールを抱きしめて。

『ボウズ』

俺はその日の仕事はもう済ませてあつたし（部下に押し付けたとも言つ）、特に急ぐ用も無かつた。何よりさすがに見過ごすのもやるせなくて、ガキに声をかけたわけだ。

『んなところで、何やってんだ。風邪ひくぞ』

突然見知らぬ女が現れて、傘を差し出されて。ガキは相当驚いたようだ。寧ろ怯えさせてしまったかもしれない。

そりゃそうだ。見知らぬ大人にほいほい着いてつちやいけませんよ、なんて小学生並の注意事項。今の御時世なら即行で防犯ブザー鳴らされてもおかしくない。

いや、確かに女の姿ではあつたけどもさ。目つきが悪いのは自覚してるわけですよ。

変な誤解を招かずに済んだのは時代のせいか、子供が憔悴していたせいかな。

『だって…地面がびしょびしょじゃ、練習できない』

少年は嗚咽しながら言った。

『練習できなきゃ、サッカー上手にならない。サッカー上手になん
なきゃ…父さん笑ってくれない…』

気付いたよ。涙を流すガキの、シャツから覗く首や手足に。明らかに普通じゃない傷がたくさんついていることに。

サッカーの練習じゃこんな怪我はしない。明らかに殴られて紫色に変色した箇所や、鬱血や引つかき傷。トドメが煙草を押し付けられた跡とくりや決定的だ。

『お父さん、叩くのか？』

尋ねると子供は微かに、本当に微かに頷いた。

『…僕が、悪い子だからいけないの。でもね。サッカーが上手になったら、父さんも喜んでくれるから』

だから、練習したいのに、雨が降ってきちゃったの、と。子供はまずまず、胸が痛くなる声で泣き出してしまふ。

そのガキは、父親から虐待を受けていた。それでも、サッカーをやっている時だけは、父も笑ってくれるし痛い事もしない。だからもっと上手になりたいと切実に願っていた。

全ては大好きな父に、愛される為に。

『…雨の中で練習したら、風邪ひくよ。風邪ひいたら、もっと練習できなくなっちゃうよ』

俺は涙を流す子供の頭を撫でて、言った。自分に出来る限り優しい声で。

『でも元気でいたら、明日も明後日もいっぱい練習できるから。今日はもう、お家に帰りな』

その日はそのまま彼を家に送っただけで終わった。それが、自分と彼の出逢いであり、全ての始まりとなった。

数日後。今度は晴れていた日。

ガキはまた公園にいた。そしてたった一人でリフティングをしていた。

『よお』

また声をかける。子供は目をまんまるくして俺を見た。

今日は泣いていなかったが、子供の怪我は明らかに増えてやがる。額には大きいガーゼが貼ってあったし、首筋からは火傷の跡が除いてた。

またお父さんに叱られたのか。痛くないのか。そう尋ねると、平気だよ、と笑う子供。

『平気。僕強いもん！』

そうか、と。頷くに留める。

確かに、彼は強い子なのだろう。どんなに残酷な目に遭っても立ってようとす。どんなに痛くても耐えようとす。

昔の俺より――母親に殴られても世界を呪うしかできなかった自分より――何百倍も、強い。

だから心配なのだ。そういう子は受け流す事ができず、いつかポ

ツキリ折れてしまいそうで。誰かを、何かを憎む事でストレスを発散する事ができないまま、いつか大きく爆発させてしまう気がして

『父さんは怒ると怖いけど、サッカー上手になったらいっぱい誉めてくれるんだ!』

だから練習しなきゃ、とまた笑う。愛らしい笑顔の筈なのに、どうしてこんなにも胸が痛くなるのだろう。

『サッカー、好きか?』

子供はますます笑顔を輝かせて、頷く。

『うん!僕、サッカー大好き!』

俺はその子の頭を撫でる。それだけしか出来る事が無かったから。

『じゃあさ...俺にもサッカーを教えてくれよ。君の名前はなんていうんだ?』

ガキは木の枝を捜してきて、地面に文字を書いた。この年の子供が書けるだけで凄い、難しい漢字だったが、彼は書き順すら間違えなかった。きっと根がまじめで頭もいいのだろう。

『れいじ!...影山零治だよ!』

その名前は――俺にとって一生忘れられないものになる。

『そうか。俺は、キーシクス。：よろしくな、零治』

それから暫く続いた、俺と零治とのささやかな日々。

零治にとってサッカーは、父と自らを繋ぐ絆であり。幸せになる為の白き魔法でもあった。サッカーをする事で彼は誰かを呪う事なく、魔法に溶かす事ができたのだ。

零治は本当にサッカーが上手で。ついでに指導もうまかったから驚いた。素人だった俺がみるみる上達していったのだから。

『キーシクスは、パワーはあるのにノーコンだなあ』

『うつせーや！』

俺は幸せな気持ちを、零治からたくさん貰った。零治も俺とサッカーをしている瞬間は幸せであったと――そう信じてもいいのだろうか。

だが、零治の傷は日増しに増えるばかり。酷い時はガーゼや包帯から血が滲んでいた。近所では有名な子供だったそうだ。なんせ虐待は明らかで、父親は世間に名の知れた人物だったから。

どうにかして少年を救えないものか。そう考えた俺は零治の身边を調べ始める。

影山東吾。零治の父はプロサッカー選手だった。全盛期ではMFとしてチームの指揮をとり、幾度となく勝利に導いたという。だが――円堂大介率いる新人勢に日本代表の座を奪われて以来、スランプから抜け出せなくなってしまったそうだ。

絶不調の影山東吾を、ファンもメディアも責め立てた。ついたあだ名は『疫病神』。酷い話ではないか。調子のいい時は散々持ち上

げていた癖に、不調になった途端コレである。

生真面目で有名だった東吾がどれだけ追い詰められていたかは、本人にしか分かるまい。ただアルコールに溺れて、どんどん墮落していったというのは事実のようだ。

鬱屈したストレスは全て、自分より弱い存在に向けられた。つまり、幼い零治に。

妻が病弱で入院がちだったせいもあるだろう。暗い家には父と息子の二人だけ。中でどんな惨たらしい仕打ちが行われていようとも――誰も止める事はできなかったのである。

しかし、このままではいずれ零治は死んでしまう。周りの人間や警察は見て見ぬフリなのか。いくら本人が父と共にいたいと望んでいても、これでは――。

『キーシクスにも、教えてあげるね』

記憶の中で、幼い彼は笑っていた。必死で、必死で、自分の無力さ以外の何者も呪わずに生きていた。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

彼の言う大好きな人というのが、父親である事は明白で。

『だから僕はサッカーが大好き！』

虐げられても傷つけられても、彼は父を愛していた。父に愛される事を望んでいた。

その愛が歪んでいる事を誰にも教えて貰えないまま。その愛が普通だと信じたまま――大人になってしまったのだ。

結局俺は、零治を救う事が出来なかった。

ある日パッタリと公園に来なくなった零治。俺が彼を救う手だてを見つけれないままに。

零治は父と一緒に失踪。空っぽの家はめちゃくちゃに荒れていて、壊れた食器や倒れた棚が散乱し、ゴミが散らばっていたという。

やがて父親だけが、山の中遺体で見つかった。まるでその後を追うように母親も病死した。零治は――行方不明のままだった。

彼がその後どんな人生を歩んだかは分からない。だが俺は四十年後、救えなかったその結果を目の前に叩きつけられる事になるのである。

サッカーを愛し、幸せの魔法を信じていた少年は、もはや何処にもいなくなっていた。

愛していた筈のサッカーを憎む事で、どうにか生き長らえてきた零治。そうしなければ生きてこれなかった彼。

そうさせたのは、一体誰だ。何のせいだ。何故こうなったのだ。

――多分俺は、少しでも罪を償う方法を搜してた。

吹雪を引き取って、我が子のように育てようと決めた裏には。かつて救えなかった幼子への罪滅ぼしの意識が少なからずあって――それを思い出すたび罪悪感な襲われた。

吹雪は零治の代わりではないし、自分のエゴに利用される道具でもない。

――それでも俺は誓ったんだ。零治を護れなかった分も……吹雪を護

つてみせるつて。もう二度と、あんな悲しい子を出すものかつて。

悲劇は繰り返される。歪んだまま大人になってしまった零治は、サッカーへも教え子達へも歪んだ愛し方しかできなくなっていた。気付く。彼は歪んで尚誰かを愛そうともがいているのだと。

父親として、鬼道と照美に愛情を注いではいたのだと。ただそのやり方が間違っていただけ。自分が父にされてきた事と同じ事を二人にってしまっただけで。

過ぎた時間は戻らないとしても。もう遅すぎる事がたくさんあるのだとしても。

出来る事がまだあるなら、試したい。

- 四十年で。俺には護りたい物がたくさん増えたけど。お前の事、忘れた事なんて無かったんだぜ。

零治との再会。別離。そしてまた俺は彼と再会しようとしている。多分、彼の一番根っこの部分を引き上げられるのは俺じゃない。傷ついて絶望して尚、彼を助けようと走る子供達だ。

照美と鬼道の二人。彼らは今でも尚、あんたを父親だと信じてる。血など繋がっていないくとも、心は繋がっている筈だと。

あんたが出した真帝国学園の招待状は。雷門を誘った本当の意味は。あんた自身が、心の何処かで終わりを望んでいるからじゃないのか？

きつと零治は俺の事なんざ覚えてねえし。桜美聖也の姿の俺を見ても何も分かりやしないだろうが。

それでも構わないと思った。二人が零治に手を差し伸べる、その手伝いさえ出来たのなら。

なのに。

教えてくれよ。どうしてこんな事になった。あんたとエイリアは繋がってるんじゃないのか？あんたはエイリアに帝国を破壊しない

ように頼んだんじゃないのか？

もう一度鬼道に逢いたって、誰より願ったのは零治、お前だろっ？

- 四十年前、俺はお前を護れなかった。そして今また、俺はあの子を護れなかった。

あの子もあんたと対決する事を望んでいた。なのに。

どうして鬼道は殺されたんだ。何であんな酷い死に方をしなきゃならなかったんだ。

- とつくに知ってたけどよ。神様なんかいねって。だけど。

今はその居もしない神様が憎くて仕方ない。

もしかしてお前もまた、こんな感情を、四十年間も抱え続けていたのだろうか。

【1・1・哀しみ、ブルー】

そのまま自分はどうかやら、気を失って病院に担ぎ込まれたらしかった。

円堂が目覚めた時は翌日の昼になっていて――惨劇から一夜明けたと知ったのは、病院のベッドの上だった。

何だろう。起きたばかりだが――思考が何一つ正常に働いてくれない。感情が麻痺して、自分の体でないかのようだ。

「おはよう、円堂」

パイプイスに座って円堂を覗き込んでいたのは、一之瀬。もしかして随分前から側にいてくれたのかもしれない。

落ち着いているように見える彼だが、目の下にはうつすら隈ができている。本当は憔悴しきっているのだろう。それでも笑顔を作れるあたり流石だと思う。

そういえば、鬼道もいつもそうだった。この二人はとてもよく似ている。本当は激情家なのにそれを押し殺して冷静な判断を下す。滅多に感情的に怒ったりしない。いつも余裕を漂わせる。

それが自分達の役目だと言うように。

「……一之瀬」

いつもなら、彼を気遣う言葉の一つや二つ出た筈だ。しかし今は何も言う事が出来ない。

疲れきった色を隠して笑う一之瀬の顔を見て、悟ってしまったから。

「鬼道は……本当に……」

昨晚見たものは、嘘じゃない。幻でもなければ質の悪い悪夢でもない。

紛れもない現実なのだと。

「円堂と一緒に、病院に搬送された。でも」

一之瀬も分かっている。だから沈黙する事も隠し立てする事もなく、ハッキリと告げた。

優しいだけの嘘に、意味など無いと知っていたから。

「病院でハッキリと死亡が確認された。遺体は司法解剖に回されたよ。…他殺なのは、間違いないらしいから」

他殺。つまり、殺された、ということ。

あの状況で事故や自殺であろう筈がない。それは現場を間近で見た円堂が一番よく分かっている。

でもその事実が、改めて重くのしかかる。

殺人事件だなんて、サスペンスドラマや映画の中だけの出来事だと思っていた。確かに世界では毎日人が人を殺しているわけだが、それが身近で起きるなんて考えもしなかった事だ。

ましてやその被害者が、自分の大事な友達だなんて。

「…詳しい話、聞くか？」

「……うん」

「円堂も塔子も倒れちゃったし、帝国メンバーも錯乱状態で殆ど話にならなくて。だから事情聴取は聖也さんと瞳子監督が受けたんだ。まあ、どっちみち後で円堂のところにも来るかもだけど」

一之瀬が得た情報の大半は、聖也から聞いたものようだ。その聖也は警察からある程度詳しい状況を聞かせて貰ったらしい。

鬼道有人の死因は、失血死。刃渡り数十センチ程度の刃物による、

全身何十力所の切り傷や刺し傷、最終的には心臓と肺に届く胸の傷が致命傷。

また、左上腕、左足首、肋骨四本、左鎖骨が複雑骨折。右足は腱を切断されていた。骨折は素手による暴力が原因と思われる。

傷のほぼ全てに生活反応があり、被害者は長時間に渡っていたと考えられる。また、性的暴行も受けた形跡あり。体内からは犯人のものと思われる体液が数種類見つかった。犯人は複数名と見て間違いない。

以上の事から、犯人は少なくとも男性が三人以上。犯行動機は私怨である可能性が高い――とのこと。

「鬼道は佐久間から呼び出しを受けたけど……電話はかかってこない。メールだけだ。だから本当に呼び出したのが佐久間本人か分からない」

メールアドレスは佐久間の携帯からだったが、アドレスを偽装する方法も実はある。

それに佐久間が失踪中である事を考えれば、その携帯を奪った別人がメールを送った可能性もある。さらに仮に本当に佐久間が呼び出したのだとしても――本人が直接犯行にかかわっているとは限らない。

いずれにせよ佐久間も源田も行方不明のままでは、事情を聞く事もままならない。そして佐久間が鬼道を殺す筈ない、と円堂も思う。彼も犯人に捕らえられているかもしれない。

下手をすれば、もう生きてはいないかもしれない。

「……俺もさ、そう信じたいんだけどさ、円堂」

一之瀬はうなだれるように言った。

「鬼道：犯人の名前、残してないんだ。事切れる前に、音無にメールして、お前へのメッセージを打つだけの余力があつたのに」

彼が何を言いたいか、分かる気がした。こういう時に限って冴えている自分の頭が恨めしい。

つまり。鬼道がダイイングメッセージを残さなかったのは犯人が全く見知らぬ他人だったか。あんな目に遭わされて尚底いたい相手だったか――そのどちらかである可能性が高いということだ。

目隠しをされた形跡もない。犯行時は電気はつけられていたと推測される。なら、鬼道が犯人の顔を見ていないというのは考えにくい。

「あいつらが…やるわけない」

円堂は絞り出すように言った。

「するわけないだろ。あんな酷い、真似」

自分は確かに、佐久間や源田について深くは知らない。帝国にいた頃、鬼道と殊更仲が良かったという事くらいしか。だけど。

「だってそうだろ。もしそうなら…そうなら！鬼道が…可哀想すぎる…っ！！あいつは今まで何の為に…誰の為にあんな…」

こらえていた涙が、一気に溢れ出した。押し込めていた悔恨と悲哀と共に。一度決壊した涙はどれだけ拭っても止まってくれない。知っているのだ。自分は春奈から聞いている。鬼道が影山からの虐待を受けていたことを。それは鬼道が鬼道家から逃げる術を持たなかったせいもあるだろうが――誰にも打ち明けず耐えていたのは

やはり仲間の為だ。

追い詰められて追い詰められて。それでも仲間を護ろうと尽力し、仲間の仇を討つ為恨まれるのを承知で雷門に転校し。全てに決着をつけるべく再び影山と対決しようとしていた鬼道。

その結果がこれなら。なんて浮かばれないのだろう。

「…俺も、そう思う。仮に佐久間達が関わってたとしても…それはあいつらの本意である筈がないって」

聞いてくれ円堂、と。一之瀬は改まって顔を上げる。

「俺は…愛媛に行くよ。真帝国学園に行く。そして…真実を確かめる」

「え？」

ああそつだ。自分達は本当ならもう愛媛に行っている筈だったのだ。鬼道が惨死したせいで、予定は遅れたが。

「…これは俺の…推理にもならない推測なんだけど。鬼道の死に方からして、恨みによる犯行じゃないかって刑事さんは言ってた。確かに鬼道が昔帝国で影山に従ってた時の事を考えると、いくらでも逆恨みは考えられる。でも…俺はその上でこう考える。結論から言おう」

大きな目と愛らしい顔に、静かな憤怒を載せて。一之瀬は言う。

「鬼道を殺したのは影山ではなく、エイリアの一派。ガゼルが言っていた、“魔女”の派閥。目的は口封じと…俺達への見せしめではないか…」と

彼の考えはこうだった。

鬼道はエイリアについて相当調べをつけていた。真実に近付きつ

つあった事だろう。先日もイプシロン相手に情報を引き出そうと奮闘していた。

だから“口封じ”である可能性は決して低くない。

さらにガゼルの鬼道への忠告。残酷な魔女がお前を殺しに来る・
・という言葉からして。ガゼルは“魔女”に对しいい印象を持つて
ない様子が窺え、また“魔女”ならばやりかねないと考えているの
も見てとれる。

エイリアは一枚岩ではないのではないか。あの子供達は皆“エイ
リア皇帝陛下”の為だけに動いているつもりのようなのだが、上層部
には派閥があるのかもしれない。

エイリアと繋がっている筈の影山は、鬼道を真帝国に呼びたがっ
ている。ならば少なくとも真帝国と戦う前に鬼道を殺すとは考えに
くい。だがエイリア内に派閥があるなら、エイリア内の影山とは別
の一派が独断で犯行に及ぶ事も考えられる。

とにかく・・タイミングがおかしいのだ。ガゼルから忠告を受け
てそう何日も経ってない。影山から呼び出しを受けたのもつい先日。
どうも偶然とは考えられない。

「そして…佐久間と源田は今、影山に捕まっている可能性が高い」

影山の事を調べていて愛媛で行方知れずになったのだ。無関係と
は到底思えない。

携帯はその時奪われたのかもしれない。洗脳されたのかもしれない。
い。いずれにせよ事件に関わっている可能性のある影山、佐久間、
源田の三人に・・愛媛に行けばおそらく逢える。

そうすれば事件の真相も掴めるかもしれない。

「俺にとっても鬼道は大事な仲間だ。鬼道をあんな目に遭わせた犯
人を絶対赦せない。俺は…真実が知りたい」

強い意志の光が、一之瀬の眼にはあった。彼とて泣きたい筈だ。怒り狂いたい筈だ。それなのに――自分を律して、現実を見据えている。

自分なんかより、余程強い。円堂は、布団を握りしめる。

「鬼道さ。言っただんだ……死ぬ前の晩に」

『どんなに離れても。サッカーが俺達の絆になる。ずっと繋がって
いられる』

あの夜は、こんな事になるなんて誰一人想像していなくて。いつものようにサッカーをして、笑いあっていた。こんな日がずっと続く、信じていた。

「エイリアとの戦いが終わったら、帝国に戻るつもりだからって。……だから別れて……そういう意味だと思って。まだ……先だった筈で」

別れても、望めばまた逢える別れの筈だった。二度と逢えない別

れになるなんて考えもしなかったこと。

「……でも…サッカーが俺達の絆だって鬼道は言った。俺もそう、信じたい。サッカーしてる限り…あいつが完全に死ぬ事はないんだって。俺達の中で生きてる筈なんだって」

再び頬を伝う滴を、ごしごしと袖で拭った。悲しい。苦しい。辛い。感情は幾多にも混ざり合って、爆発しそうで。
でも、ここで立ち止まる事を、きっと彼は望まないから。

「だから俺！答えはサッカーで出したい…！鬼道の代わりに、あいつが望んだ決着をつけにいきたい…！！」

護れなかった友へ、それが唯一の償いになるのなら。

円堂の叩きつけるような叫びに、一之瀬はうん、と頷いた。泣くのを我慢しているような、儚い笑みを浮かべて。

「…じゃあ、俺。そろそろ行くから」

「うん」

「……あのさ、円堂」

病室を出て行く間際。一之瀬はドアに手をかけて、言った。

「昨日土門と話してた事があるんだ。俺達みんな…お前と鬼道と豪

炎寺に頼りすぎてゐるって。お前達にばかり…背負わせてるんじゃないかって」

そんな事ないよ、と円堂は即答する。一ノ瀬は背中を向けたまま首を振った。そんな事あるんだよ、と。

「だから…これから先、もうお前達にばかり荷物は背負わせない。お前が俺達を護ってくれる分、俺達も全力でお前を護る。…忘れないでくれ」

何も言う事ができなくなかった。一之瀬の細い背中が、泣いていたから。

閉まる扉を見送るとまた涙が出て来た。円堂はベッドの上でうずくまる。目覚めて一番最初に逢ったのが、彼で良かった。

「くっ…う…ッ!!」

声を押し殺して、一人で泣き続けた。決意はすれど、もう二度と帰らない。失ってしまった、大事な人は。

【1 - 2・彼方の、レクイエム】

一之瀬は早足で病院の廊下を歩いていった。少しでも円堂達の病院から遠くへ行く為に。正直――これ以上は、限界だったから。

円堂が無理をしているのは明白。自分の言葉でさらに無理をさせてしまったのも明白。それでも一之瀬は、半ば無理矢理でも円堂を立ち上がらせた。――そうしなければならないと、感じたからだ。

鬼道が死んだ。

豪炎寺はまだ帰って来ない。

雷門というチームは、良くも悪くも一部のカリスマが引つ張る形で成り立っている。本人達にその自覚は無いだろうが、少し遠いアングルで見ればすぐ分かる。当面雷門の――円堂依存傾向がさらに強まるであろう事も。

それは決して良い事ではない。だから自分は、土門と誓った。これから孤独な戦いを強いられるだろう円堂を、自分達で支えていこうと。彼がどうしても弱った瞬間、吐き出して貰えるくらいの存在になろうと。

だがその為にはまず、チーム全体がこの悲劇から立ち直らなくてはならず、やはり第一歩は円堂に踏み出して貰う他ないのである。彼が無理にでも立ち上がってくれなければ、雷門は空中分解必至だ。しかしその後は。それ以降は、自分達も最初に立ち上がる人間になる。円堂の荷物から脱却し、支える側の人間になる。そうでなければ――意味が無いのだ。鬼道の死に、報いる事もできない。

「一之瀬」

人気の階段まで来た時、自分の名を呼ぶ声が。誰だ、と尋ねる必要も無かった。当の本人は目の前にいたから。

「頑張ったな。お前」

一之瀬よりだいぶ背の高い聖也は、身を屈めてこちらを見る。その眼は、優しい。

「円堂の前でよく、泣かなかったな。偉いよ」

「……立ち聞きしてたのか、聖也？」

「俺も見舞いに来たんだってば。そしたら先客がいて、深刻な話してたんで退散したのー」

まるで小さな子にするように頭を撫でられて。気恥ずかしさよりも先に、涙腺が緩みそうになる。

本当はずっと、我慢していた。最初に、訃報を聞いた時からずっと。悲しくて悔しくて泣き喚きたかったのだ。

それをしなかったのは、円堂が倒れていたから。後輩達の前だったから。

知っているのだ。どんな状況でもチームで必ず一人は、最後まで冷静に判断できる人間が必要な事を。今までその役目は鬼道であり、豪炎寺だった。だが二人ともいないなら、自分こそが役目を買ってでなければと思ったのだ。

それに先輩の自分まで取り乱したら、後輩達はどうなる。ただでさえ不安がっている彼らを、動揺している彼らを誰が安心させてやるというのだ。

だから感情を全力で殺した。上辺だけでも冷静で強い人間を演じようと頑張った。愛する仲間達の為に。

「……人が死ぬって。大事な誰かがいなくなるってこういう事なんだな」

胸の内から緩やかに込み上げる想いを。一之瀬は吐き出すように、放つ。

「もう二度会えない。もう二度笑ってくれない。俺達はまだ二度と、鬼道とサッカー、出来ないんだ」

自分で言うのもアレだが。一之瀬は自らの非凡さがある程度自覚していた。自分は一瞬天才であり、サッカーの才能に恵まれている事も理解していた。

伊達にフィールドの魔術師と呼ばれていないのだ。

体格の無さはテクニクと観察力でカバーしてきた。それで切り抜けられないピンチなんて、日本に来るまで無かった事だ。日本に来て初めて実力という意味でも壁にぶつかり。それを寧ろ嬉しく感じていた。

その壁の一つだったのが、鬼道の存在。個人技で自分と互角。観察力では自分の方が劣るだろう。その分フィジカルでは自分が勝つだろうが、彼と対決して有利な勝負をさせて貰えた試しがない。

いつか鬼道に読み勝つこと。その策を読み切る事。それは一之瀬にとって一つの目標でもあった。

けれど。もうその目標を達成する事はできない。お互い最も望まない形で、鬼道に勝ち逃げされてしまったのだ。 - 永遠に。

「悲しくて悔しくて…それだけで死んじゃいそうなんだ…っ!! 何で鬼道があんな風に死ななくちゃいけなかった!? 鬼道が一体何をしたっていうんだっ!? まだたった十四歳じゃないか…っ!!」

叩きつけるように、叫んでいた。

痛い。心臓が痛くて痛くて仕方ない。どうすればこの痛みが収まるのかも分からない。

「しかも…俺、最低なんだ。鬼道が死んで初めて理解したんだから。身近な誰かが死ぬってこんなに…こんなに辛いんだって…!!」

この痛みは、悲しみだけじゃない。どうしようもない、取り返しのつかない過去の――後悔にも、起因するもの。

「俺、本当に身勝手だ。自分勝手だ！こんな想いをずっと……土門や秋にさせてたんだから……」

あの日の事は、実は一之瀬自身もあまりよく覚えていない。生きていたのが奇跡と言われたほどの大怪我をして病院に担ぎ込まれ、長く生死をさ迷ったのだから当然かもしれないが。

ただ。もうサッカーどころか満足に歩けるようになるかも分からない――そう宣告されて。絶望して。大好きな二人の親友と顔を合わす勇気さえ持てなくなつて。

一之瀬一哉は死んだ事にして下さい、と家族に頼んだのは事実。友人達にもそう伝えて欲しいと。

サッカーが無い人生なんて考えられなかったのだ。サッカーが出来なくなったら自分なんか死んだも同然。いや、あながち比喻でもない。松葉杖で屋上に上がっては、何度死を考えたかも分からない。あの時自分は、自分の事を考えるので精一杯だった。それはどうしようもない事かもしれない。今同じ状況に置かれても冷静な判断を下せるか分からない。

だけど結果として、誤った選択をしたのは間違いないのだ。一之瀬が死んだと聞かされた時。事故を目の前で見ていた二人はどれだけショックを受けたか。傷ついたか。

優しい彼らのこと。きつと長い間己を責め続けていただろう。そうさせたのは他でもない一之瀬で――だけどその罪の重さに、自分はまだで気付いて無かったのだから笑える話だ。

あれだけ秋と土門を傷つけておいて、のうのうと日本に現れた自分を――彼らはまるで咎めなかった。赦す赦さない、という概念すら頭に無かったのかもしれない。

その心のどれだけ貴い事か。ゆえに自分はどんな大きな過ちを犯

した事か。今になってやっと理解させられたのだ。大事なチームメイトを喪って、同じ痛みを味わって、やっと。

「…それが分かって、良かったな。それだけで多分…意味はあったさ」

頭を撫でる聖也の手は温かい。見つめる眼は、優しい。彼だって傷ついてない筈はない。鬼道の死に悲しみと憤りを感じない筈がない。

だけどそれを押し隠して、自分の前に立ってくれている。一之瀬の傷を少しでも癒やそうと慰めてくれる。

ああ、そうだ。彼は自分より年上なのだった。そして吹雪の保護者なんだっけ。きつと…親として人を愛する事を、知ってるんだ。

「…泣けよ。今なら俺以外誰も見ちゃいねーから、泣け。抱えてるもん全部ブチ撒けちまえ。…偶には先輩面させるや、後輩」

「…すみません」

スツと抱き寄せられる。背中に回される腕。スッポリ収まってしまつ、身も心もまだまだ小さな自分。

ぎゅつとその胸にしがみついて、叫ぶ。

「悔しい…悔しい悔しい悔しい悔しいっ！」

溢れ出す。溢れかえる。涙と言葉と一緒に、感情が。

「何でだ！何で鬼道がっ！何であんなにボロボロにされてっ…まるでゴミみたいに捨てられてっ…！！ふざけるなよ…ふざけんじゃねえよおおっ！！」

ただ殺すだけじゃ飽きたらず。犯人達はよってたかって鬼道を痛めつけたのだ。私怨？口封じ？見せしめ？そんなもの知るか。奴ら

の理由なんか関係ない。

十四歳の男の子を輪姦して、リンチして、ボロ雑巾のような姿にして命を奪った奴らの事なんて理解できない。したくもない。

鬼道は自分達の大事な仲間だったのだ。奴らはそれを最低なやり方で奪い去った、それだけが全てだ。

何処の誰かも分からぬ変態どもが、今憎くて憎くて仕方ない。もしそれが佐久間達だったら？ - 寧ろこの憎しみはさらに濃くなるだろう。裏切り者。大好きなチームメイトに殺された鬼道がどれだけ無念だった事か。

考えるだけで - 腸が煮えくり返りそうだ。

「犯人を赦さない…絶対に赦さないっ！殺してやる殺してやる殺してやる殺して八つ裂きにしてやる - っ！」

呪いの言葉を泣き叫ぶ一之瀬を、聖也はただ抱きしめて頭を撫でてくれた。一之瀬が泣き止むまで、ずっと。

この知らせを、本当に伝えていいものなのか。デザームの自室の前で、ゼルは一人思い悩んでいた。

ここ最近で、いろんな事が起こりすぎている。先の京都での戦いから、イプシロンメンバーにも動揺が広がっている。原因は二つ。

『それでも戦うのか？たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…？その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなく

ても…か!？」

あの雷門の鬼道、というMF。彼が言った言葉。そして。

『この勝負、預からせて貰おう』

まるで鬼道の言葉を遮るように現れ、勝っていた試合を中止させたガゼル。

自分達の知らない“何か”が、上で起きているのではないか。自分達は皇帝陛下の為に戦ってきたつもりだが、果たして今までの命令は本当に全て陛下のご意志だったのか――。

疑惑を呼ぶ理由の一端が、自分達イプシロンが所詮ファーストランクのチームに過ぎないという事。陛下に謁見し、直接御命令いただく立場にないのだ。

だからもし、その“繋ぎ”に位置する上層部が――マスターランクの三人か二ノ宮が研崎が――命令を捏造していても分からないのである。

不安がる部下達に向けてデザームは言った。自分達はエイリアの戦士。陛下のご意志を疑うことは赦されない。さかし陛下以外を疑う事は可能である、と。

特に、二ノ宮蘭子――あの魔女への疑いは日増し濃くなるばかりである。デザームは、上層部の事や彼女について独自に調べてみるつもりのようなのだ。

――貴方は優しく強い方だ。でも…だからこそ私は、貴方が心配で仕方がないのです。

確かに、ゼルとて不安な気持ちが無いと言えは嘘になる。でもそれ以上に、デザームの身を案じる気持ちの方が強いのだ。

知りすぎてはならない。疑念を抱きすぎてはならない。その結果

どのような末路を辿るのか……その実例を、ゼルは知ってしまったから。

- 私達に情報を与えた……鬼道有人が死にました。

明らかに口封じと見せしめ目的だった。あれは雷門のみならず、自分達イプシロンへの見せしめでもあるとゼルは考える。

あの残酷極まりない殺し方。あの魔女が黒幕である事は明白だった。

- …知りすぎれば……貴方も奴と同じ目に……。

そんな未来は、想像するだけで恐ろしい。自分達は確かに皇帝陛下に尽くしてきた。しかし自分達を率いるのはデザーム以外には考えられない。彼以外の下で働くなんて考えたくもない。

ゼルは意を決して、ドアを叩いた。

【1・3・花葬されし、追憶】

空は、晴れている。昨日の雨が嘘のように、真っ青な色が頭上に広がっている。

残酷過ぎるほど、綺麗だ。世間はまるで何事も無かったかのように動く。当たり前のように夜が来てまた朝が来る。

それすらも、塔子にとっては恨めしい事だった。鬼道はもういないのに。彼の時間は永遠に止まってしまったというのに。

――昨日の晩じゃないか。鬼道が死ぬ前の晩だぞ。あたし達、いつもみたいに会話して…それで…。

月が綺麗で。ゴーグルを外してこちらを見つめてくれる鬼道の姿も、それ以上に綺麗で。

『好きだ、鬼道。愛してるって意味で…あたしはあんたが好きだ』

自分は想いを、伝えた。何年越しになるかも分からない、恋を。叶わなくてもいいと思った。ただ伝えておきたかったから、伝えた。だけ。

『これがその、答えだ』

鬼道は最高の答えを返してくれた。塔子にとっても――多分鬼道にとっても生まれ初めてのカス。優しい味だった。愛しくて愛しくて、抱きしめて離したくないと、心からそう思ってた。

自分は改めて誓ったのだ。鬼道を護ると。もう二度と傷つけさせない。なのに。

その翌日が彼の命日になるなんて――一体誰が想像しただろう？

- - 護れなかったんだ、あたし。

あんな暗くて狭い場所で。ボロボロにされて棄てられていた鬼道。SPとしての知識と経験は、否が応でも事実を塔子に見せつけた。彼がどんな形でなぶり殺しにされたのかも。

- - 護れなかった。

SPフイクサーズのリーダー失格だ。

本当なら、現場でもっと冷静な判断を下すべきだった。少なくともあの光景を、帝国メンバーに見せるべきでなかったのは明白である。

なのに、自分はそうしなかった。自分の感情で手一杯で、取り乱して。彼らをより傷つける結果を招いた。瞳子監督にもさぞかし迷惑かけた事だろう。

- - でもさ。仕方がないじゃん。大好きな人が、あんな死に方して。落ち着けての、酷い話だろ。

寝転ぶ河川敷。塔子は割とすぐ病院から解放された。取り乱した事は取り乱したが、日頃の訓練の成果か落ち着きを取り戻すのも早かった。特に外傷があつたわけでもない。

だがそもいかなないメンバーが数人。完全に気を失ってしまった円堂に春奈。酷く錯乱した帝国メンバー。暴れた彼らを取り押さえ、ひっかき傷をつけられた瞳子。

あとは吹雪も。思いの外取り乱し、パニック状態に陥つたので少しの間病院の世話になる事になった。また、公に入院させられないが、レーゼがまた体調を崩して倒れたので休ませる必要ができた。

事件の内容が内容だ。警察としても自分達にすぐ東京を離れられ

ては困るだろう。自分達が遺体の第一発見者なのも間違いないし、結果。どうやらあと何日かは東京に留まるしかないと判断され、今に至る。

- 赦さない。赦すもんか…っ！犯人見つけたらブツ殺すだけじゃおさまんねえよ…っ！！

怒り。悲しみ。現実への絶望。自らへの失望。

それらがグルグル胸の内に渦巻き、今にも破裂しそうで。それが怖かった。技術的には- 自分はいくらでも他人を殺せる。それが複数の大人だとしても、関係あるまい。

今の自分は- 感情に任せてそれをしてしまいそうで、恐ろしいのだ。力を持つゆえの恐怖。自分で自分が分からない。だがどうすればこの闇を打ち払えるかも、見当がつかない。

）
）

「！」

場の空気の重さとあまりに不似合いな、ケータイの着信メロディ。この音はある人専用だった。慌ててポッケから携帯電話を取り出して通話ボタンを押す。

『…塔子』

聞こえてきたのは大好きな父の声。

『悪いな、急にかけて。…鬼道君の事、聞いたよ』

「……うん」

どうして。総理大臣なのだ、忙しくない筈がない。今日は確か大事な首脳会談があったとかなんとか- -

もしかして無理矢理時間を空けてくれたのだろうか。大事な人を失ってハンパなく落ち込んでるであろう、自分を励ます為に。

「……何でこんな事になったのか、本当によく分かんないんだ」

考えて喋るのは最初からやめた。元より性分ではない。ただ思い浮かぶまま語る事にしようと決める。

「あいつの事、本当に好きだった。どうしようもなく、好きだった」
零れるように、零すように。

「だからどうしようとか、そこまで欲があったわけじゃないんだ。あたしがあいつを好きなら良かった。そしたらあいつも応えてくれて、もっと幸せになった。だから……一緒にいられたら、それで良かった筈なんだ」

紡がれるように、紡ぐように。

「ただ鬼道と並んで。円堂達と一緒に。サッカーしてられれば、それ以上に何も要らなかつたんだ……！」

だから。それを阻む物は全て排除しよう。その為に、彼を傷つけるすべてから護ろうと決めたのだ。

分かっている。鬼道の為じゃない。結局全ては彼と一緒にいたい自分の為。自分勝手なエゴに違いないという事は。

それでも。彼が笑ってくれる場所になれるなら、それで良かったのに。

「……人が死ぬってというのは、そういう事だ。いなくなるっていうの

は、そういう気持ちなんだよ』

黙って聞いていた財前は、やがて静かに口を開く。

『塔子はまだ小さかったから殆ど覚えてないだろうけど。：母さんが死んだ時も、そうだった。今の塔子みたいに泣いたし、悔しくて仕方なかったよ』

塔子は目を見開く。それは初めて聞く、父の本音。

父の言うとおり、自分は母親の事など殆ど覚えていない。小さい時、海外でボランティアに行った先で - - 熱病にかかり、死んだという話は聞いているが。

『塔子の母さんは、誰かに殺されたわけじゃなかった。だけど私は恨まずにはいられなかったよ…世界を。とにかく何でもいいからこのやるせない気持ちをぶつける先が欲しかった』

分かる気がする。

悲しみを消す為に。怒りを紛らわす為に。何でもいいからその矛先となる何か欲しい - - そんな気持ちは、今まさに塔子の中にくすぶっているものだ。

『復讐しても愛した人は帰らない。それは本当は誰だって分かっている。それでもぶつけて、壊さずにはいられないのが人間。赤の他人に綺麗事を並べる権利なんかない』

復讐。まさにそれも考えていた事。

犯人が憎い。赦せない。法に触れると分かっているでも殺してやりたい - - それで何か解決になるわけでもなくとも、そう思った。

自分は人間で、それ以上でもそれ以下でもないから。

『私が正気を保てたのは塔子、お前がいたからだ。私が一時の激情に身を任せればお前はどうなってしまつか。…お前の存在が私の理性を留めてくれた』

「愛する、存在…」

『愛とは誰かを慈しむ気持ち。貴ぶ気持ち全てを言う。お前を愛する人、愛してくれる人はたくさん要る筈だ。お前はみんなに愛される子なんだから』

愛。それは友愛や家族愛にも言える事。塔子は目を閉じる。たくさん顔が浮かんで消えていく。

父や鬼道だけではない。雷門のみんな。SPフィクサーズのみんな。いつも自分を影ながら助けてくれる大人達。自分はたくさんの人に愛されて、此処にいる。

『その上で教えて欲しい、塔子』

父がちゃんと背筋を伸ばす気配。

『お前が一番やりたい事が、何なのかを』

そつと芝生から上半身を起こし、考える塔子。やりたい事。すべき事。一体、何だろう。

『私は…塔子に、イナズマキャラバンを降りて欲しいのが本音だ』

「！」

『エイリアと関わり、エイリアの秘密に触れたせいで鬼道君は消された可能性が高い。そして彼をあんな惨たらしく殺害した最大の目的は、お前達への見せしめであり、警句だろう。我々に関わる者は皆こうなる…とな』

ぎゅつ、と携帯を握る手に力がこもる。鬼道は一人、真実に近付いていた。イプシロンとの会話だけでも分かる…多分彼はエイリア学園の正体をハッキリ掴んでいたのだと。

だから消された。理屈は分からないわけじゃない。が、納得しきれない。

ジェミニストームもイプシロンも、数多く破壊活動を行った。それで怪我をした者も少なくない。

けれど実際に試合してみても、また、記憶を失ったレーゼを見て感じたのは。サッカーをする彼らは内面的に見れば普通の子供とやら違いがないという事だった。

そんな彼らが、口封じと見せしめの為とはいえ鬼道を殺す？

いや――彼らは何も知らないのかもしれない。彼らの上にいる“エイリア皇帝陛下”てやらが独断で、別の駒に命じた事ならば。

『塔子が強いのは分かっている。それでももし…塔子まで同じ目に遭ったら。そう考えると…私はそれだけで死んでしまいそうなんだ』

でもね、と財前は続ける。

『それはあくまで、塔子に無事でいて欲しい私の願い。塔子の願いじゃ、ない。だから…最終的な決断は、お前が自分で決めなさい』

いつも落ち着いている父の声が、微かに震えていた。本気で心配されているのだ。

当然かもしれない。チームメイトが、おそらくエイリアの秘密を知ったせいで殺された。塔子は雷門の一員としてエイリアと戦い続けている。親として不安にならない筈もない。

そしてその“愛”が当然である事の、なんと幸せな事か。鬼道と春奈のように両親を早々に失ってしまった子供達がいて。木暮のように信じていた親に裏切られた子供もいる中で。

『私は、塔子が心で選んだ道なら…どんな道でも応援する。たとえそれが復讐だったとしても』

スッ、と眼を閉じて。一つ息をついて、塔子は自らの心に問う。
一番やりたい事は一体何なのか。一番望む事は何なのか。

死んだ大好きな人。

護れなかった約束。

心配してくれる父。

愛すべきたくさんの仲間達。

再び眼を開いた時、塔子の心は決まっていた。

「あたし…鬼道を殺した奴が、赦せない。今日の前に現れたら、殺しちゃうかもしれない」

せめて仇を討ちたい。それもまた紛れもない願いである。そのドス黒い感情を、憎悪を、憤怒を、忘れる事なんてできるわけもない。だけど気付いたのだ。それは多分――一番やりたい事ではない、と。

「だけど…それ以上にあたし、真実を明らかにしたい。もうこんな事が起きないように…エイリアを止めたい」

大好きな人達と、笑ってサッカーできる世界。その願いは鬼道を失って尚変わってはいない。

彼はもういないけど。もう抱きしめる事も、キスをする事も叶わないけれど。

彼の愛した世界は、此処にある。

愛する仲間達ね中で、生きている。

「あたしはみんなの世界を、あたし達のサッカーを護りたい。その為に、戦う。立ち向かう!!」

『そうか』

父に申し訳ない気持ちがないわけじゃない。だが決めた。自分は

父を、愛する人達を裏切らない。

生きて生きて、生き抜いてやる。

「パパ、ありがとう」

塔子はジャージについた草をはらって、立ち上がった。やるべき事はたくさんある。だから。

「あたしは、行くよ」

【1 - 4・墜落する、走馬燈】

一体何をしているのだろう。

多分、端から見ればおかしい光景だ。佐久間は自嘲しようとして失敗する。嘲りの笑みすら、この顔には浮かんでくれない。

源田と二人。サッカーのフィールドのど真ん中で、背中合わせに座っている。しかも懐かしの体操座り。何してるんだろっとなあ、と思う。それでも、誰かの体温を感じていないとおかしくなりそうだった。

この虚しさを、共有できる存在がいなければ。源田がいなければとつくに気が触れていた。

本当はもうとつくに正気でないのだとしても、最後に一本だけ残っている理性の糸は、佐久間にとって人間としての誇りだ。一人きりならとうに断ち切られていた事だろう。

「…人間はさ。死ぬ前に走馬燈が巡るって言うだろ」

沈黙を破り、先に口を開いたのは源田だった。

「鬼道も。…少しでも…ほんの一瞬でも……死ぬ前に思い出してくれたかな。俺達の、こと」

ほんの少し前の自分なら。くだらない、と一蹴するか、情けない事を言うなど激昂しただろう。

今はそのどちらでもできなかった。源田の言う通り、せめて鬼道が思い出してくれたならとすら思った。僅かでもみすばらしくとも、救いと呼べるものが欲しい。喉から手が出るほど欲しいのだ。

それだけ――佐久間の心に重く重くのしかかる、鬼道有人の死。彼が赦せなかった。憎いと思った。だがそれは――かつて彼を尊

敬し、誰より敬愛してきたからこそ。

自分達を置き去りにして、ポロポロで打ちひしがれる自分達を捨てて雷門に行った男。勝利さえ得られれば、彼は仲間の存在なんてどうでも良かったのだ。

気付いた時の絶望は言葉にもならない。全ての愛情が憎悪へとひっくり返る。裏切り者。赦せる筈がない。彼を断罪せずしてこの怒りが収まる筈もない。

だから自分達はこの真帝国学園に来たのだ。力を得て、鬼道と鬼道の愛する雷門をぐちゃぐちゃに踏み潰す為に。ひれ伏させる為に。一度は決別した影山に従う事も厭わず、今に至るのである。

彼を倒し、勝利を得る為なら何でもしよう。禁断の技を学ぶ事もそれにより身体が悲鳴を上げようと構わない。そう思った――それなのに。

何故彼は死んだのだ。自分達との再戦も果たさず。自分達の目的を叶える事も自分達の裁きを受ける事もなく。

どうして？何で？どうして？

「どうすりゃいいんだよ…源田」

どうしよう。視界が滲む。憎い敵が、ポロ雑巾のような有り様で殺されたのだ。恐らく苦しみ抜いて死んでいったのだ。むしろ喜ぶべきだろう？なのに。

「俺達…俺達、鬼道と戦う為に此处に居るのに……！鬼道がいないなら何の為に…何の為にいいっ……！」

ポロポロと大粒の雨がフィールドに落ちる。きつと今、自分はいやくしゃの、とんでもなく情けない顔で泣いている。醜い姿だ。何が醜いかもよく分からないけれど、でも。

頭がガンガンと痛む。胸の奥がズキズキと悲鳴を上げる。身体中

にドス黒く渦巻く感情の汚物。吐きそうだ。汚らしい言葉を神聖なフィールドで吐き散らしてしまいそうだ。

怒りも虚しさも悲しみも、感情の行き場が何処にもない。鬼道を憎む事でやっと保てていた心が。定まっていた未来の方向性が一気に崩れた。

再戦して、彼を敗北に跪かせて。いつも背中しか見えなかった彼を、裏切り者と罵りながら追い越して、屈辱を味あわせてやること。それが目標だったし、生きる目的でもあったというのに。

鬼道のいない雷門と戦ったって何になる。意味なんかない。あの人の泣き顔も笑顔も拝んでやれない。

自分は何の為に。これから誰が為に戦えばいい？生きればいい？

「憎めばいいのさ」

ふと思考に割って入った声。ハツとして顔を上げる佐久間。

入り口の方。モヒカン頭の我らがキャプテン――不動明王が、手をひらひら振りながら歩いてきた。

「憎め。怨め。憤れ。お前達の怒りは、鬼道が死んだら萎んじまう程ヤワなもんだったのか？」

不動は自分達のすぐ側に立ち。ニイ、てどこか狂気じみた笑みを浮かべた。

「お前達が一番恨むべき奴らがいるじゃねえか。お前達は憎めばいいのさ…雷門ってチーム、そのものをな――！」

「な…に…？」

最も恨むべきは、雷門。行き当たらなかったその発想に、思わず源田と顔を見合わせる。

「おいおい、何意外ですって顔してんだ。当然だろ。よくよく考え

てみるよ」

呆れたように溜め息をつく不動。

「雷門と試合しなけりや…アイツラと出逢わなけりや。鬼道はそもそも総帥に逆らわなかった筈だぜえ？」

「…！」

「あいつらに鬼道は感化された。あいつらが鬼道を騙して、誑し込んだ。その結果お前らも“仕方なく”総帥と決別させられて、帝国は弱体化しちまった」

「……！」

「で、フットボールフロンティア。…どうなった？結局勝ったのは総帥のチームだったろあ？で、お前ら負けて病院送り。あー無様無様」

「………！」

「で、落ち込むあんたらの元キャプテンの心の隙について雷門の奴が誘いやがった。甘い誘いだ。世宇子に勝ちたいだろ？勝利の酒を味わいたいだろ？ってな」

「………！」

「そして後は知つての通り。鬼道ちゃんは雷門の奴にフラフラついてつまった。負けた原因は自分のくせに、お前らに咎をまるっと押し付けて捨ててった」

「………！！！」

「で、最期どうなったよ？雷門に騙されて、雷門を信じて、雷門の為にうかうかエイリアと戦った鬼道ちゃんは？」

嫌だ、聴きたくない。

だが佐久間は耳を塞ぐ事が出来なかった。まるで金縛りにあったかのように、動けない。

そんな佐久間と源田に、不動は容赦なく告げる。

「あーんなみつともない姿で、ボ口雑巾にされて、殺されちまったお前らに謝罪の言葉も無いまま、雷門に騙されたまま……雷門の奴らは鬼道を護らなかつた。鬼道を騙して引き込んだくせに、奴一人に危険を押し付けて見殺しにした」

耳元で囁かれる。

絶対的な言葉を。

「鬼道は、雷門の奴らに殺された」

耳なりが煩い。頭に激痛が走る感覚。佐久間は頭を抱えて呻いた。見開かれた眼からは涙が止まらない。がちがち。がちがち。歯の根も合わず、震える身体。

がたがた。がちがち。

がたがた。がちがち。

心の中の冷えた部分が伝える。不動の言う事は、正論。けして間違つてなどいない。寧ろそうだとしたら自分はずっと、憎むべき真の敵を見誤つていた事になる。

鬼道は騙された。むしろ被害者なのではあるまいか。騙したのは誰だ。その挙げ句、使い捨ての駒にして、見殺しにした悪魔は何だ。

雷門だ。

「う……あああああ——ッ！」

結論が出た途端、佐久間は絶叫していた。頭をかきむしり、喉が

潰れるのではという程の声を絞り出していた。

佐久間だけではない。源田も同じように叫んでいる。恐ろしい。

自分の中にこれほどの激情が、憎悪が眠っていた事が。

[illegible][illegible]

「そうだ、憎めっ！ 怨めっ！ 憤れっ！ それを全て力に変えろおっ！
」

二人の呪詛の声と、一人の狂喜の声。弾ける紫色の光は、二人の眼に映らない。

目の前の男は、紛れもない魔術師だった。力ある言葉を操り、他者を抉り、他社を囚える魔法使い。自分達は多分その魔法に嵌った。だが、それを分かって尚抜け出そうという気が起こらない。

何もかも、壊してしまえ。

くたばれ、世界。

「潰してやるっ……全力で!!」

皮肉にも、雷門への憎しみに支配されてやつと、佐久間は気付いたのである。もう二度と叶いようのない願いに。

自分はただ。また鬼道と一緒にサッカーがしたかった。

自分も源田も彼が大好きだったからこそ憎んでしまったのだと。もはや全ては遅いのかもしれないけれど。最後の正気が、一滴の涙と共に流れた。

まったく、呆気ないものだ。

不動はやや拍子抜けしつつも、上機嫌に影山の部屋をノックした。

「お前は“魔術師”としてはなかなか才能があるな」

影山は椅子に深く腰掛け、振り向く事なく言う。さっきの一部始終は勿論チェックされていた事だろう。

「本来魔法使いとは、どこぞの空想妄想の話ではない。箒で空を飛ぶ事でも、宙から茶菓子を降らせる事でもない。力ある言葉を武器に、民衆を操り扇動する者を言うのだ」

「そりやどうも」

だったら、影山こそ悪魔も畏れぬ大魔術師ではないか。彼の力リスマは魔術的な力を発揮する。人々を畏れさせつつ魅了する力だ。自分はある目的の為に彼に近付いたわけだが。側にいると分かる彼の言葉の“魔術”を知らなければ、きっと魅せられ、本心から平伏させられていた事だろう。

「なんか…今日は元気ありませんねえ、総帥？ひよつとして悲しんでたりします？」

あの鬼道有人が。影山が天塩にかけて育てた最高傑作だったという事は知っている。

だからこそそいつを完膚なきまでに潰してやれば、自分の力を示す絶好の機会になると思った。だから雷門と試合できる日を、心待ちにしていたというのに。

どこぞの変態が鬼道を殺してくれたおかげで、計画が大きく狂ってしまった。おまけに佐久間達の洗脳は解けかけるし、雷門はしばらく東京で足止めされるっぱいし。

いやそもそも――鬼道がいなくなっても、雷門は愛媛まで来てくれるかどうか。

いざとなったら手はある、と総帥は言ったが。その内容までは知らせて貰ってないわけで。

「悲しむだと、この私がか？」

くだらない、と鼻で笑う影山の声。それはいつもと何も変わりないように聞こえる。

「いつも言ってる筈だな。とうに捨てた駒に興味はない。終わった過去は過去でしかない」

そうは言うけれど。何でこっちを見ないんだか、と思う。彼が泣くときまでは思っていないが。彼が自分を見ないなど、今更と言えば今更だが。

「へいへい。すみませんね、野暮な詮索で」

不動は、納得したフリをした。それ以上考えたら思い出してしまいそうだったから。

愛に飢えて、愛されたくて愛されたくて伸ばすのに振り払われる手と。

こちらを見て、耳を傾けて欲しいのに。遠い昔赤に消えた幻と、幻によく似たあの子供ばかり可愛がるあの人を。

何も考えるな。

自分はただ前だけ見つめていればいい。計画は狂った。だがジェ

ミニストームを倒して一躍有名になった雷門と、試合さえできれば後は問題ない。

自分がスカウトしてきたチームで雷門を倒せば。きっとあの人がって認めてくれる。自分を見てくれる。

「失礼しますよっと」

去り際。不動はチラリと影山を振り返る。

- - 愛なんてくだんないんですよ、影山センセイ？

くだらない。そう思いながら愛を求める自分を、人は矛盾と呼ぶのだろうけど。

【1・5・砂時計、さらさら】

幸せとは、零れ落つ砂のようなものだ。僅かな時間であつという間に掌をすり抜けてしまふ。なくなつてしまふ。

そしてどれだけ強く握りしめようと、掴みきる事は出来ないのだ

- 春奈は今まさにそれを実感しつつあつた。

キャラバンの中に今いるのは、春奈と木暮の二人だけ。別にキャラバンの中でもなくとも良かったのだが、とにかく今は一人になりたくて此処に来た。

そしたらなんと先客がいて。そのままなんとなく二人で此処にいる。氣を使うでもなく、語り合うでもなく。

口を開けば、虚しい傷の舐めあいになると感じたのかもしれない。言葉を発する為の氣力すら、億劫だったのかもしれない。それでも二人は並んで、その場所にいた。なんとなく握った手も離さないまま。

- 私、まだ夢なんじゃないかって思つてる。だからうまく、涙も出ない。

ずっと離れ離れになっていた兄。兄というより、親のようにすら頼っていた唯一無二の存在。

かつてはそんな鬼道の心を疑っていた。連絡を貰えない虚しさと悲しさを、卑屈に解釈して誤解した。帝国で傲慢にすら振る舞う彼を見て失望すらした。

そして酷い言葉を投げつけて、深く深く傷つけた。

- やつと、一緒にいられるようになったのに。笑えるようになったのに…何で？

出来の悪い映画でも見ているかのよう。ああ、映画だとしたらとんだB級だ。やっと和解できた兄妹が夢半ばで永遠の別れを――なんて。くだらなすぎて誰も感動できやしないだろうに。

これが現実？そんな馬鹿な。

きつと自分はまだ悪い夢を見ているのだ。パソコンに向かいすぎたのか雑用しすぎたのか――きつと疲れたのだ。だから爆睡しすぎてまだ目が覚めていないのだ。

そうだ、そうに決まってる。早く起きなきゃ。こんな馬鹿げた悪夢など見ている場合じゃない。マネージャーが寝坊したらみんな困るし、先輩達にも迷惑かける。

兄はきつと怒らないだろう。でもきつと、ちよつと苦い顔で笑って春奈を叱る。昔からそう。自分が悪い事をした時はそうやって道を正してくれた。大好きなお兄ちゃん。これからはずっと一緒にいられる。これからは――。

「おまえ」

木暮の、声。春奈は我に返り、声の主を見た。

彼は青ざめて、だけどとても胸の痛くなるような顔で――自分を見つめていた。どうしてそんな悲しそうな顔をするの。春奈が尋ねるより先に、木暮が言った。

「やめろよ。…現実から、眼を背けるの」

一瞬。

世界が、停止した。

まさか今の考えが全て口に出ていたのか。なんてこっぱずかしい
ーいや、それよりも。

「何、言ってるの。木暮君」

何だろう。喉が、カラカラに乾く。

「これは夢でしょ。夢だと言って何が悪いの。いいじゃない別に。
意地悪しないでよ。ーああ、今の木暮君も夢の中の住人だもんね。
だから木暮君にとっては現実みたいなもので…」

「いい加減にしろよっ！！」

ビクリ、と肩を震わせる春奈。絶叫に近い、怒声。木暮が本気で
怒っているのが分かる。大きな瞳には、凄まじいまでの怒りが煮え
たぎっている。

「鬼道有人は！あんたの兄貴は死んだんだっ！！悲しいからってそ
の事実を無かった事にすんなっ！！」

どくん、と心臓が一つ大きな音を立てた。木暮の言葉が頭の中を
ぐるぐる回る。

死んだ。死んだ。誰が？

アンタノ

兄貴ハ

死ンダンダ。

「…どうして」

自分は今どんな顔をしてるだろう。きっと醜い顔に違いない。

「どうして、そんな事言うの」

じり、と一歩木暮に近付く。まるで気圧されたように木暮は後退する。

「やっと、お兄ちゃんと仲直りできたの。やっと一緒にいられるようになったの。やっと笑って貰えるようになったの。やっと私、ごめんなさいが言えたの。やっと、やっと、やっと…なのに…」

ぐにやぐにやと目の前の景色が歪む。恐ろしい。恐ろしいのに思い出してしまふ現実。思い出させたのは目の前の、コイツ。

「何でっ！何で思い出させるのっ！！何で忘れさせてくれないのっ！？お兄ちゃんが死ぬ訳ないっ…死んだなんて嘘っ！！嘘嘘嘘っよ嘘に決まってるわっ！！」

ガシリ、と掌が華奢な肩の感覚を知った。気付けば木暮の小さな両肩を掴んで、窓際に勢いよく押し付けていた。木暮が痛みに呻く。しかし怒りと、絶望と、気が狂い出しそうな悲しみに支配された春奈は、自らが何をしているのかも分かっていなかった。

「これは悪い夢なのっ…私が目覚めれば全部消えてる夢なの！お兄ちゃんがきつと私を起こしてくれる…そしたらまた楽しい現実が待ってる！お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、お兄ちゃんがっ」

「…ふざけ…んなよ」

ギリギリと凄まじい力で肩を掴まれる痛みに脂汗を流しながらも、木暮は鋭く春奈を睨みつける。

「誰だつて逃げたいさ…。それ自体は悪い事じゃないさつ…。ただどな、あんたの兄貴は言つたぞ、待っていても都合のいいハッピーエンドなんか来ないって…！」

『チャンスが無いなら作つてみせる。都合のいいハッピーエンドなんて、待っていても訪れない。自分で創らない限りはな』

蘇る言葉。それは漫遊寺で、鬼道が木暮に言ったものだ。

あの夜、彼は確かに生きていた。そこにいた。そんな何日も前の話じゃない、なのに。

「最後に立ち上がる為の逃げなら…アリかもしれない。だけど今のお前、ほんとにただ逃げてるだけじゃん！いいのかよそれで？それで現実が何か変わるのかよ…お前の兄貴、生き返るのかよ！？」

黙れ、と叫んだ筈の喉は枯れて音にならない。木暮の肩を掴む手がブルブル震える。ごき、と嫌な音がして悲鳴が上がった。漸く自分のしている事の重大さに気付く、青ざめる春奈。

その春奈に、木暮は容赦なくたたみかける。

「悲劇のヒロイン面すんなつ！悲しいのがお前だけだと思ふなよつ！…！どんなに否定したつてなあ…いなくなった大事な人は帰つて来ないんだつ…！」

大きな目にいっぱい涙をためて木暮が叫ぶ。その言葉が春奈を抉った。

帰って、来ない。

「う…ああ…」

ずるり、と滑り落ちる手。木暮が左肩を押さえてうずくまった。本気で痛いそうだ。やったのは、他でもない春奈。

だが我ながら酷い事に、今は別の事を考える余裕がまるで無かった。理解してしまったから。ハッキリ実感してしまったから。

これは悪夢などではない。今こそが現実。紛れもない現実。鬼道は、本当に。

「あああああつ…!!」

本当に、死んでしまったのか。何故だ。どうしてだ。どうしてこんな事になったのだ。

受け入れてしまった事実はいあまりに重く、真実は残酷で。

「お兄ちゃっ…お兄ちゃあんっ…うわあああつ…!!」

泣き叫ぶ春奈は、キャラバンに乗ってきた第三者の足音にすぐには気付かなかった。足音は通路を抜け、春奈と木暮のいる座席の前でピタリと止まる。

そして、言った。

「顔を上げろ、春奈」

強い口調での命令。春奈はぐしゃぐしゃの泣き顔で、その人物を見上げる。

塔子が仁王立ちで、自分を睨みつけているのが目に映った。

裏切られた、だの。失望した、だの。

そう感じるのはお門違いと分かっている。鬼道とて何も望んであんな末路を辿ったわけではないのだから。

それでも吹雪は思ってしまった。

- - 噓つき。

そう思った自分を、心底恥じた。

- - でも君は、言ったじゃない。自分はいなくなったりしない…って。

雷門中のグラウンドは、ほぼ葬式モードだった。一応練習時間にはなっているが- -身の入っている者は誰もいない。何人かは私用や入院でいなくなってるし、残ったメンバーも落ち込みが激しくて練習どころではなくなっている。

吹雪もその一人に違いなかった。ベンチに座り、頭を垂れる。

- - ほら、見てよ鬼道君。

思い出してか。栗松が鼻を吸る。それが壁山や目金にも伝染した。そのままあちこちで嗚咽が漏れ始める。

- - みんな、泣いてるよ。君は雷門にとって…本当の本当に、必要な人間だったんだよ。

元々帝国にいた鬼道。エイリアとの戦いが終われば帝国に戻るとも言っていたわけで。

それでも今や彼は雷門の司令塔であり、副将と言っても過言でない存在だった。彼なしでは作戦は成り立たず、冷静に敵を分析し活路を見いだす事も出来ない。そんな存在だったのだ。

能力のみならず。彼にはカリスマ性があり、人徳もあつた。氣遣い上手な人柄も、鬼道が皆に慕われる要因だっただろう。

それがこんな形で失う事になって。これからどうすればいいのか。戦っていけるのか、彼なしで。そんな不安がありありと伝わってくる。

- - どうして、僕を置いてみんな死んじゃうんだろう。アツヤも鬼道君も…僕なんかよりずっと必要とされていたのに。

これは罪なのだろうか。弱いくせに生き残った自分への、あまりにも重たい罰。

- - やっぱり、そうなんだ。僕が完璧じゃないから…護れないんだ。

「…吹雪」

緩慢な動作で顔を上げる。染岡だった。彼は視線を泳がせて、吹雪を見る。なんて一言を選ぶべきか分からないで困っている…そんな表情だ。

「…ごめんね、染岡君」

「…！」

「鬼道君とは…君の方が付き合い長いのに。辛いのに。…氣遣わせ

ちゃって、ごめん」

「…馬鹿野郎」

染岡は吹雪の隣に座って、一言そう漏らした。

「どっちが辛いとか…んなの、ねーだろが。俺にとってもお前にとっても…大事な仲間だった事に、代わりないんだからよ」

彼なりにできる、唯一の慰めなのか。ぐしゃり、と頭を撫でられた。まるで子供扱いだが、不快じゃない。

その大きな手が思い出す。今まで自分の頭を撫でてくれた人達のことを。父に母。そして聖也。頭を撫でてくれるような存在でなくとも、大切な人はたくさんいる。白恋のみんな。雷門のみんな。だけど。大切なものが増えれば増えるほど、いつか失うその時が怖くなる。

「…人って、簡単に死んじゃうんだね」

いなくなる。消える。

全ては砂のようにすり抜ける。

『完璧じゃなくなたって…護れる物はあるさ。円堂を見る。あいつは完璧じゃないから負ける。だけど何回だって立ち上がる』

鬼道はあの晩、そう言った。でも。

『…その強さは、完璧な存在よりもずっと貴い物だと思う。…安心しろ。俺達はお前の前からいなくなったりしない。…大事な仲間を置いていたりはいないさ』

結局、いなくなってしまうた。完璧じゃない自分に護れるものな

んて何も無かった。

「みんな、いなくなっていく」

「んな悲しい事言っなよ！」

染岡は叫び、うなだれる。

「言っんじゃねえよ…っ畜生！」

ああ、彼も悲しいんだ。みんな悲しいんだ。
誰も、悲しみから抜け出せないのか。

「…お前ら、いつまでそうしてる気だ」

はっとして顔を上げる二人。チームのみんなが同じ方向を見てる。
土門と照美が、厳しい顔で立っていた。

【1・6・正解、不正解】

本当は、自分は春奈に嫉妬していたのかもしれない。塔子は目の前の少女を見つめて、湧き上がりそうになる黒い感情を押さえ込む。彼女は鬼道の妹。たとえ長く離れ離れになっても、当たり前のようにそこに血の絆がある。彼と同じ場所から生まれてきたという、絶対無二の証が遺伝子の中に刻まれている。

だから無条件で愛される。妹として、大事にして貰える。

本当はそんな彼女が、羨ましくて仕方が無かった。自分と鬼道の間には確かなものなど何一つ無いのに、彼女にはある。それが妬ましいとすら思えて――そう思ったび、自己嫌悪に陥った。

春奈は自分にとっても可愛い妹のような存在で、愛すべき後輩だというのに。彼女を愛しく思う気持ちに、嘘は無いというのに。

何より――彼女を否定する事は、鬼道を否定する事になる。絶対にしてはならない事。不可侵の領域。その場所にだけはどうあっても他人の自分は踏み入れないし、踏み入ってもならないのだ。

――春奈。気付いてる？あんと鬼道の間だけに存在できる、サンクチュアリって奴に。

あるいはホーリーランド。あるいはエデン。その場所が、鬼道と離れている時間ですら、長く長く春奈を護り続けていた。つまりは、鬼道が春奈を愛し、春奈が鬼道を愛しているという血と心の絆そのものが。

だが、春奈が今していることは。自らを護ってくれていた聖域を汚し、歪ませる事に他ならない。塔子はどんなに願ってもその場所に入れないというのに。彼女は現実の兄すら追い出して、妄想に閉じこもろうとしている。

「…そんな事、あたしが赦さない。」

「顔を上げろつつつたんだよ。聞こえなかったのか」

春奈は涙を浮かべたまま、視線をさまよわせる。そしてまた、俯こうとする。だから一喝した。

「俯くな春奈！真正面からあたしの顔見やがれっ！！」

「……っ！！」

びくりと身体を震わせ、また顔を歪める春奈。お門違いだと分かっているが、やはり自分は彼女が羨ましくて仕方ない。

実の妹だから。それだけで彼女は無条件に赦されるのだ。鬼道の傍にある事も。彼の死を遠慮なく泣き喚く事も。その死を否定して逃げる事も。

赦されてはならない場所まで、赦されて。それでは何も解決できやしないのに、周りの人間が現状維持する事で目を逸らしたらどうなる。

彼女はますます病んでいくだけ。壊れていくだけ。生温い赤の他人の優しさは、破滅を誘う麻薬にしかない。

「…鬼道が一番に何を望むか、とか。あんたに何がして欲しいか、なんて。あたしには分からない。死人に口は無いからよ」

ならば自分が。無理矢理にでも引つ張り上げてやる。

鬼道を愛する自分が。春奈を愛する自分が。愛するからこそ、彼女を殴りとばしてボコってでも連れ戻す。

現実残酷かもしれない。しかし、その先にきつと、光があるから。

「だけどこれだけは分かるんだ」

君に届け。この想い。

「あんたがそのまま不幸になっても…鬼道は絶対喜ばない」

天国に届け。この願い。

「俺達がこのまま立ち止まっても、あいつは絶対喜ばない」

土門は皆にそう、ハッキリ告げた。

「きっと滅茶苦茶キレるな。俺がいなくらいでサボるなって」

ぐるり、と。どこか閑散としてさえいるグラウンドを見回す。

風丸。宮坂。栗松。壁山。目金。吹雪。染岡。彼らは皆重たい空気を引きずったままだとか下を向いている。それは別に恥ずべき事じゃない。むしろチームメイトが死んだのを悲しめないようならば、そっちの方が恥ずべき事だ。

本当は土門とて、年甲斐もなく泣き喚きたくて仕方ない。一ノ瀬が死んだと聞かされた時もそうだった。悲しくて悲しくて、気が変になってしまいそうで。

延々と後悔し続けた。あの時、飛び出そうとする一ノ瀬を自分が止めていたら。そもそもあの日、サッカーをしようと彼と秋を誘わなければ。

だけど、自分を責め続けても、現実は何も変わらなくて。

「昔な。……一ノ瀬が死んだって聞いた時。俺はサッカー、やめようとしたんだ」

その話に、初期メンバーがハツとしたように顔を上げる。彼らは一ノ瀬がかつて事故にあつて瀕死になり、土門と秋がその現場を見ていた事を知っていた。一ノ瀬が死を偽装していたのも聞かされていた。

だから気付いたのだろう。土門が――大事な仲間の死に直面するのが、これで二度目だという事を。

「……だけど。結局サッカーをやめなかったのはさ……。俺のサッカーの中に、一ノ瀬の存在が生きてるって事に、気付いたからなんだ」

サッカーさえなければ。そう思ってボールを捨てようと思った時も、あつた。

それが結局、できなかったのは。してはならないと気付いたからで。

「サッカーをやめたら。俺は一ノ瀬をもう一回殺す事になる。それだけは絶対……嫌だった」

風丸の唇が、何かを言いたげに動きかけ、また閉じられた。鬼道と付き合いの浅い宮坂を除く他のメンバーも、似たり寄つたりの顔をしている。

皆それぞれが考えているのだろう。死者は二度死ぬ。されど死者は生きる事ができるかもしれない。

人は想い一つで時に魔法使いになれる。世界を変える事も、死者と歩む事も出来る。

幸せこそ、最大の魔法だと気付く事さえできたなら。

「俺は今度も、同じように考える」

『土門。雷門に入った今の俺は…帝国のキャプテンでもなければお前達の統治者でもない』

「俺は、鬼道をもう二度と死なせたくない。…鬼道だけじゃない。もう大事なチームメイトを誰一人死なせたくない」

『だから、頼みがあるんだ』

「だから…サッカーをやめない。サッカーから逃げない」

『これからは俺を…お前と対等の存在と思ってくれないか』

鬼道が雷門に来たその日。千羽山との試合の後鬼道が自分に言った言葉を思い出す。それまで自分は鬼道に対し、尊敬と畏怖からある程度壁を作っていたふしがあった。鬼道のその言葉は意外だったが、実は結構嬉しくて。

その日から土門は鬼道を“さん”付けで呼ばなくなった。彼に敬語を使うのも、やめた。

彼に近付けた事が、彼の隣に立つ事を許されたのを、本当に幸せに思ったものだ。

「サッカーが、俺達の絆だから。そのサッカーを護る為に…鬼道の誇りを繋ぐ為に考えたい。俺達に、何ができるのかって」

「サッカーをする事で、それがあたし達の中の鬼道を生かし続ける。その為にあたし達が、あんたがすべき事はなんなんだ。あんたが一番したい事はなんだ」

「私が…すべき事…」

ぎゅっと胸の前で手を握りしめる春奈。その様子を塔子も、いつもは騒がしい木暮も真剣な眼差しで見守る。

「私……お兄ちゃんをもう、殺したくない」

握りしめた春奈の両手。その手の上を走るように零れる滴。

「あんなに…苦しい想いして、死んだんだもん。もうお兄ちゃんを…死なせたくない、よ」

でもどうすればいいの、と。涙をポロポロこぼしながら問う春奈に、塔子は静かに首を振る。

「それは、あたしが決めていい事じゃない。あんたが自分で考えなきゃいけない」

父が言いたかった事が分かった。

他人が、どうこうして欲しいと意見を押し付けるのは簡単だ。だが本当に心で道を選ぶべき時、それで満足のいく答えなど得られる筈もない。

今がその時。春奈が自らの力で未来を切り開くべき時なのだ。残酷な現実すら、乗り越えて。

「鬼道はサッカーを愛していた。だから帝国に戻るのを遅らせてでも、エイリアと戦う事を選んだんじゃないのか」

自分達は何の為に集った？何の為に戦う？
忘れるなかられ。自分達は史上最強のサッカーチームになる為に
此処にいるという事を。

「諦めるな。此処であたし達が諦めたら、鬼道の愛したサッカーも
殺されちまうんだ！」

「諦めるな。此処で俺達が諦めたら、俺達の大事な絆も死んじまう
んだ！」

「何の為にあたし達は此処にいるんだ！？」

「何の為に俺達は集まった！？」

「あんたの兄貴の愛した、あんたの大好きな世界を護る為に」

「俺達を結んでくれた、サッカーを護るその為に」

「それに…このままあたし達が、真実から逃げ出したらどうなる？」

「このまま俺達が俯いて真実を知らないまま終わったら」

「鬼道はまさしく犬死にだろうが！」

「それで一体誰が救われる？幸せになれる？」

「「そんなのあいつが望む筈ないっ！！」」

「だからあたしが言いたいのの一つ」

「だから俺が言いたいのの一つ」

「諦めるな！死んでから諦める！！」

だって。自分達はまだ、生きてるのだから。

さつきより大きな泣き声が。壁山がいつにも増して大きな声で泣いている。他の皆も。宮坂ですら、風丸と一緒に嗚咽を押し殺している。

その涙の流し方が、さつきまでとは違々と土門は気付いていた。土門隣に立っていた照美が一步前に進み出る。

「私達は前に進まなくちゃいけない。鬼道君だけじゃない。いなくなつた全ての人の想いを繋ぐ為に、私達は此処にいるんだから」

でもね、と彼は泣きそうな笑みを浮かべる。

「その悲しみを、優しさを。忘れちゃいけないよ。絶対に」

照美もまた、愛するものを失う辛さを誰より理解している。彼は強さと引き換えに、チームメイト達を永遠に失い、自らの未来すら失つてそこに立っている。

それでも尚乗り越えて、立ち続けている。
だから、強いのだ。

「…僕、逃げません」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で。それでも一番最初に口を開いたのは目金だった。

「最後まで戦います！僕だって雷門の一員なんだ！」

そういえば。目金が一番最初の帝国の試合の時、真っ先に逃げ出してしまったのだっけ。本来けして勇敢な性格ではないのだろう。それでも逃げ出さずに、今この場にいる彼。それはきつと。

「…俺も」

目元を拭いながら、風丸が続ける。

「逃げる。逃げるわけにはいかない。だって鬼道が言ったんだ。知らない事は罪じゃないけど…知らないからで赦される事は何も無いって」

『知らない事は罪じゃない。…だが、知らないからで赦される事は何もない』

神のアクアを隠し持つてるんじゃないかと、照美に詰め寄った風丸。その時鬼道が彼に平手を食らわせて言った言葉を、土門は思い出していた。

本来、とても正義感の強い人だった。だから帝国イレブンは皆その意志の強さに惹かれて集ったのだ。帝国だけではない。雷門のメンバーもきつと、その強さに支えられてきた。

今度は、自分達の番だ。

彼が暴ききれなかった真実を。彼を殺めた者達の思惑を。自分達が明らかにする。その為に、戦う。

「…行こう、真帝学園とやらへ」

染岡が立ち上がった。他の皆も泣き顔ながらも次々に立ち上がる。

「このまま引き下がってたまるか!」

魂は、引き継がれる。

【1・7・魔法の、言葉】

瞳子は、考える。

自分が今すべき事を、何をすべきかという事を。

- 私は、取り返しのつかない事をしてしまった。

自分の監督責任だ。自分が鬼道を止めていれば。彼が真実に近づくのを防いでいれば。

いや、それ以前に、だ。

自分が彼らを巻き込まなければ。父の凶行を止めてさえいれば。

- 私には、あの子達を護る力さえ無いというの…？

無力感に、キリキリと心臓が痛む。鬼道有人。その主だったデーターは瞳子の手元にもあった。実力も頭脳も人徳も。優秀すぎるほど優秀な子だった。大人になればきっと、日本、いや世界のサッカー界をも背負って立つ人材になっただろう。

それを自分が潰してしまった。自分に力が無かったから、気付かなかったから。それが悔しくて仕方ない。

- 私は…本当にあの子達の監督でいていいの…？

そんな資格はない。あるわけない。そう思っていた…でも。

自分の前に現れた雷門夏未は言った。瞳子に、これから雷門を引っ張って欲しいのだと。

『私も木野さんも…お見舞いに行った先で、円堂君の強さに教えられました』

夏未の眼は真っ赤だった。相当泣いたのだろう。それでも彼女は真っ直ぐ瞳子を見据えて、告げたのだ。

『私達は…鬼道君が命を落としたからこそ。立ち止まる事は赦されないんだって』

あとは監督が決めて下さい。

彼女はそう言い残し、瞳子の前から去っていった。

- - 立ち止まる事は、赦されない…か。

それは紛れもなく正論。そもそも自分はあらゆる逃げ道を塞いで此処にいる筈なのに。まだ心の何処かで退路を捜しているのだとすればとんだお笑い草だ。

鬼道の死は自分達全員の足を止めさせたが、同時に振り返る道を奪い去ったのだ。彼女達は瞳子よりも早くそれに気付いたのだろう。たとえこの道の先に待つのが絶望だとしても。自分達は進むしか無いのだと。

- - 私は…。

瞳子は、考える。

吹雪は、考える。

土門達が告げた言葉の意味を。これ以上喪わない為の百の方法を。

- サッカーは、絆。サッカーが、いなくなってしまうた人をも、生かしてくれる。

ベンチに座り、ボールを抱きしめる。慣れ親しんだ優しい感触。丸いかたち。それは湿った土の匂いがした。まるで雷門というチームが歩んできた長い道を示すかのように。

自分は、弱い人間だ。

あの雪崩の日。愛する家族をいつぺんに失って、吹雪の世界は壊れてしまつて。彼らの死に狂う吹雪は孤独に耐えきれなかった。たとえ愚かな幻でも、一人きりでないという夢を求めてしまった。

大事な人を - 土門もまた、一時的にとはいえ失った事があつたのだ。けれど彼は自分のように、悲しい幻に頼る事はしなかった。一人でも立ち上がる手段を見つけて、乗り越えたのだ。

それは照美も同じ。吹雪以上に過酷な境遇でありながら、前を向く天使。彼も土門と同じくとうに気付いていたからこそ、フィールドに舞い戻ったのかもしれない。

愛した人は。彼らの愛したものの中で生き続ける。彼らの愛したサッカーの中に彼らは存在し続ける。

- だとしたら…僕のサッカーの中にもいるのかな。鬼道君の心も…アツヤの魂も。

頭の上に、温かな重み。

「聖也さん…？」

「よお」

いつの間にか病院から戻ってきたようだ。円堂君に逢つたの、と尋ねると、今日は遠慮しといた、と返事が返ってきた。

「土門の奴も強くなったよな。ま、あいつもいろいろあつたしな」

ベンチメンバーとはいえ、聖也もフットボールフロンティアの頃から雷門にいる。きっと吹雪がまだ知らないメンバー達の秘密もたくさん知っているのだろう。

今度聞いてみようかな、と思う。特に染岡の話が聞きたい。初対面の時はあれだけ険悪だったのが、最近はやっと笑って話ができるくらいになったのだ。

コンビネーションもうまくいくようになってきた。同じFWとして話も合うし、個人的には彼のように真っ直ぐなタイプは嫌いじゃない。一緒にいると楽しいし安心するのだ。

「……昔な。俺に教えてくれた奴がいたんだ」

小さな頃と同じように。まるで幼子のように吹雪の頭を撫でられる聖也の手。気恥ずかしいと思う年になってなお、彼に頭を撫でて貰うとほっとする。

自分の外見年齢も殆ど聖也に追いついてしまった。何年経っても子供の姿のままの彼の年を、近い未来自分は追い越して大人になつてしまうだろう。

それでも彼は。自分にとって二人目の、大好きなお父さんで。自分を救ってくれた恩人なのだ。

「人間はよ。望めば誰でも魔法使いになれるんだ。…奴は言ったよ。自分にとってサッカーは、幸せを叶えてくれる魔法なんだって」

サッカーが、魔法。それは吹雪が考えもしなかった、新鮮な捉え方。でも。

「素敵だね。その魔法」

サッカーをする事で、自分は幸せになれる。
サッカーをする事で、誰かを幸せにできる。
だとしたら。

「そうとも。俺達はいくらでも魔法が使えるのさ。そこに愛さえあったなら」

のぞき込むように、吹雪の顔を見る聖也。その眼は、慈しみに満ちている。

「その魔法で、お前はとうしたい？吹雪」

吹雪は、考える。

風丸は、考える。

もう戻らない時への償い方を。これから待っている未来への歩きだし方を。

- やつと… 本当の意味で理解できたかもしれない。あの時、鬼道が俺を叱ってくれた意味。

グラウンドを吹く風は清々しい。ひんやりと頬を撫でるその冷た

さが、自らの頬を伝う涙を教える。

何もかも吹っ切るのは難しい。それに、神のアクアさえあればと願う気持ちが消えたわけでもない。でも。

もう少しだけ。もう少しだけ頑張ってみてもいいのではないか。自分自身の力でどこまでできるのか。何かを救う事が出来るのかを諦めるのはいつでもできる。

しかし諦めない事は、きっと今しかできない。

- 知らないきや、俺達は選択肢すら得られないんだ。

知らないからでは赦されない事もある。それは即ち、どんな事でも知る努力を怠るなかれという彼からのメッセージ。

無論。足掻いたからといってたどり着けないものはたくさんあるだろう。願った真実にあと一步のところまで手が届かない事もある。

やっと手にした真実が望んだ答えであるとも限らない。

だけど人はは、知ろうとする事ができる。

知る為に歩むか、眼を背けて立ち止まるかは、選ぶ事ができる筈だ。

「…僕… やつと理解できたかもしれせん」

風丸の隣で。宮坂が小さく笑む。

「どうして風丸さんが、このチームに入ったか」

「…？勘違いだったら悪いんだが…宮坂はフットボールフロンティアの時納得してくれたんじゃないのか？俺がサッカーする事」

「ええ。納得しました」

でもそれ、違うんです。宮坂は少し恥ずかしそうに俯いて言う。

「それはあくまで…風丸さんがサッカーをする事であって。“雷門サッカー部でやっていく事”は、僕の中でまた別問題だったんです。

サッカーをやる風丸さんはかつこよくて応援したいと思いました。でもその一方で僕は、サッカー部の方々の事は恨んでもいました。…どんな理由であれ、風丸さんを僕達から奪っていったのは変わりないから」

それは意外な告白だった。まさかそんな風に思われていたなんて申し訳なさで罪悪感に襲われる風丸。

よくよく考えれば自然な事だったかもしれない。まるで陸上部を捨てるかのようにサッカー部に来てしまったのだから当然だ。

むしろ今まで恨み言一つなく送り出してくれた宮坂や速水には、本当に感謝しなくてはならないだろう。

「僕が此処に来たのは…風丸さんを助けたかっただけじゃなくて。風丸さんが選んだ人達を、間近で見えたかったからなんです」

眼を閉じ、穏やかな顔で、ほっと息をつく宮坂。

「来て、良かった。…あんな風に叱ってくれて、支えてくれる仲間がいて。やっと安心できましたよ。土門さん達になら、風丸さんをお任せできます」

「宮坂…」

「って…すみません！こんな偉そうなことっ…」

あわわっ、と真っ赤になって慌てる宮坂があまりに可愛らしいので、風丸はつい吹き出してしまった。

自分は、間違った事をたくさんしたかもしれない。これから間違えるかもしれない。だけど。

「ありがとう宮坂。俺…幸せ者だ」

ふと、気がついた。鬼道がああやって風丸を気にかけてくれた理

由。それは自分と彼がどこかしら似ていたからではないかと。

風丸は陸上部からサッカー部へ。鬼道は帝国から雷門へ。過去に後ろ髪を引かれて、過去を護りながらも、新しい道を歩んでいた自分達。

自分は彼ほど強くは生きれないけど。

「…頑張るよ。頑張ってみるから」

風丸は、考える。

そして、春奈は考える。

愛する人に恥じない生き方とは何か。大切なモノを護る千の方法を。

- 私：お兄ちゃんのいない世界で、幸せになる自信なんか、無いよ。

ずっと離れ離れたった時も。本当は大丈夫なんかじゃなかったのに、大丈夫なフリをした。いつも兄の姿を捜してしまう自分の依存症に気付いて、失望して、絶望して、それでも無理矢理歩いてきたのだ。

生きてさえいれば。いつかまた大好きな兄に再会できる日が来る筈。それが春奈にとって最大の希望だった。

加えて音無家の両親は本当に優しくて。ごく普通の一般家庭に小

さな家だったが、血の繋がらない自分の事も本当に愛してくれた。二人の存在なくしては、兄がいない場所で頑張る事など出来なかっただろう。

- - これは罰なのかもしれない。…お兄ちゃんが傷ついてる時も、のうのうと幸せに生きてきた…私への。

そして、春奈の為に奔走してくれていた兄の愛情に気付かず、酷い言葉を投げつけた自分への。

鬼道は許してくれると言った。だけど神様は、許してくれなかったのかもしれない。

だとしたら兄がその罰の巻き添えを食うのは、あまりにも割が合わないのだけでも。

- - お兄ちゃんは、もういない。どんなに願っても、もう二度と逢えない。

その事実を胸の内で呟く。それだけでじわじわと滲んで来る涙。

- - これが夢ならどんなにいいだろう。でも優しい夢に逃げて私が狂ったら…お兄ちゃんを悲しませちゃうのかな。

分からない。でも兄はきっと自分を愛してくれていたから。少なくとも、喜びは、しない。

まだ、幸せになる方法は分からない。兄が喜んでくれる方法も分からない。

だけど。これ以上不幸にならない方法と。兄を少なくとも悲しませない方法なら、分かるかもしれない。

- - それはきっと…お兄ちゃんを…もう二度と死なせない方法。

涙を袖口で拭い、春奈は立ち上がった。

「私にも、出来るかな」

いや。出来るか、ではない。きっとやらなくてはならないのだ。
自分こそが。

「出来るかな。諦めないで、戦う事が」

春奈は、考える。

【1・8・聖者の、行進】

そして決断の朝が来る。

円堂とレーゼも療養から戻って来、雷門のグラウンドにはマネージャーも含めた現メンバーが全員揃っていた。

春奈はさりげなく全員の顔を見回す。

まだ眼の赤い顔が何人か。きっとそれは自分も同じ。それでも皆、逃げ出す事なくこの場所にいる。

未来を選ぶ為に。

「…私の力不足で鬼道君を死なせてしまった。それは否定しようのない事実だけど」

集まった面々を前にして、瞳子が口を開いた。

「それでも私は…この戦い、降りるわけにはいかないの。冷たいと思われても結構。私は、何があってもエイリアを倒さなきゃいけない。その為に雷門の監督になったのだから」

鉄面皮。赤の他人から見れば、吉良瞳子という女性はそんな風に見えるのかもしれない。美人だけど、いつも感情の窺えない顔をしている。目的の為に子供達をいとも簡単に切り捨てる非常な女だと。

春奈も。豪炎寺離脱の際など、彼女を疑わなかったといえば嘘になる。他に方法は無かったのか、とか。せめて配慮する気持ちくらいあってもいいではないか、とか。

だけど。春奈は得意の高い洞察力で、それが彼女の本質でない事を見抜いていた。

レーゼをキャラバンで保護したこと。話は聞いている、鬼道の遺

体を見つけた時――塔子や帝国メンバーの眼に触れさせないようにしたこと。

きつと本当はとても優しい人なのに、不器用なだけなのだろう。だからうまく言葉にできなくて、行動で語るしかなくて――本人が一番苦労しているのではないだろうか。

今だって。自分が悪者になる事で、みんなの罪悪感を取り払おうとしているように見える。少なくとも春奈には。

鬼道もまた、そうだったから。

「俺は、知りたいです」

円堂が口を開く。

「今この国で、本当は何が起きてるのか。エイリアの正体は一体何なのか。鬼道は何であんな死に方をしなくちゃいけなかったのか」

その大きな眼に宿るは、決意の焰。

彼は、強い。その強さに甘えすぎてはいけなけれど――その強さに支えられて、自分達は此処まで来る事ができた。この場所に集った。出逢う事が、できた。

こんな時でも。いや、こんな時だからこそ自分達は実感するのである。

円堂守という男に着いて来て、本当に良かったと。

「知って……止めたい。これ以上悲しい事が起きないように……終わらせたい。鬼道が、俺達が、みんなが愛したサッカーをこれ以上汚されたくないんだ……！」

我らがキャプテンは叫ぶ。力強く、声高く。宣誓するように。

「答えはサッカーで出す。大事なのは諦めない事だ。犠牲を、歴史を、無駄にしない事なんだ！俺達が諦めない限り…俺達のサッカーの中で、絆は生きる。俺はそう、信じてます！！」

それは、皆の心の代弁でもある。

答えはサッカーで、出す。愛する人が愛した方法で、自分達が愛する方法で。

それが故人の、生きた証。

「あたし達は愛媛に行きます、監督」

塔子が円堂の言葉を引き継ぐ。

「影山と接触すれば、何か分かるかもしれない。何より…鬼道が遺してくれた想いを、あたし達が代わりにぶつきたい。過去に、決着をつけて、そして…鬼道が大切に想うチームメイトを助きたい」

そうだ。愛媛に行ったまま未だ戻ってきていない佐久間と源田。

この悪夢は、彼らが行方不明になった事から始まっている。

鬼道は二人が失踪したのを知らなかったから罠にかかってしまった。けれどもし知っていたとしても、呼び出しには応じたような気がする。

大事なチームメイトだから。彼らの存在そのものが兄にとって、いつか帰る場所だったから。

彼らを助けに行くと、鬼道ならそう言う。それは確信。自分達はその願いを叶える義務と権利がある。

何より。これ以上悪夢の犠牲者が出るのは御免だ。

「あたし達は逃げません。誰一人。そう決めたんです」

そうハッキリ宣言する塔子を、瞳子は眩しそうに見つめる。もしかして監督も薄々気付いていたのだろうか。塔子と鬼道がどんな関係にあったのかを。

- 私。まだ塔子さんに嫉妬してる。だって貴女は最期の最期まで、お兄ちゃんの心を持ってっただんだもの。

兄が死に際に打ったメール。自分の携帯には届いて、円堂へのメッセージは未送信で残されていて。その後に塔子へのメッセージが打たれたであろう事は、想像に難くない。

何故そうなったのか。春奈は考えた。自分が何故塔子や円堂よりも最優先されたのか。

簡単だ。春奈が一番兄にとって心配な存在だったから。塔子や円堂の事も大事だけど、彼らの強さは鬼道もよく知っていたに違いない。

彼らなら。間に思いが届かなくても、未来を立てて歩けると考えたのではないか。けれど春奈は、自分がギリギリまで背中を押さなければならなかったのではないか。

兄の性格なら、きっとそう。ギリギリの状態ならば、恋人よりも我が子を優先するのだ。春奈の存在は鬼道にとって妹というより娘のようなものだったと、知っているから。

自分はまだ、兄にそういった意味で信頼されるほどの強さを得られていなかった。実際自分は弱い人間だ。兄の死という現実から逃げて、甘い夢に浸ろうとしたくらいに。

『春奈は優しい子だな。その優しさを、忘れないようにしなさい』

- 私、優しい子なんかじゃない。でもお兄ちゃんはそのようになってくれた。私を認めてくれた。

だからこそ。優しいだけじゃない。

兄にも両親にも天国で安心して貰えるくらい、強い子になりたい。その為に決めた。この道を選ぶことを。

「瞳子監督。… お願いがあります。ううん、監督だけじゃない… 雷門のみなさん、全員に」

一歩前に進み出て、春奈は告げる。
自らの決意を。

「私を… 選手として、チームに迎えて欲しいんです」

誰にも話していなかったこと。自分一人で決めた事だ。案の定、

壁山や目金あたりなどは本気でビックリした様子である。

公式戦でない以上、女子がチームに加わるのは問題がない。既に塔子もいる。だが春奈の、サッカーの腕を知る者はそう多くはない。監督ですら僅かに驚いた顔をしている。

「俺からもお願いします、監督」

微妙な沈黙を破るように。円堂が頭を下げてくれた。

「音無の力は本物です。そして選手としてやる気を出してくれた」

！俺、音無とも一緒にサッカーやりたいです！！」

「キャプテン…！」

壁山の頭に乗っかっている木暮が、その後ろで小さくニツと笑うのが見えた。春奈は笑い返す。彼にも本当に感謝しなくてはなるま

い。

「私には、お兄ちゃんみたいなスゴいプレーはできないけど。お兄ちゃんが見た景色を、私も見たいんです」

春奈も頭を下げて頼み込む。

「戦わせて下さい、監督！私もみんなを、お兄ちゃんやみんなの愛するサッカーを護りたいんです！！」

その様子を、瞳子はじっと見て――やがて溜め息をついた。仕方ないわね、というように。

「…好きにしなさい」

仲間達の間から歓声が上がる。春奈はもう一度、勢い良く頭を下げた。

「ありがとうございます、監督！」

これからまた迷う事があっても。一番大切な事だけは、迷いはしない。

自分は戦う。知る為に、護る為に、救う為に。

落ち着け。動揺するな。デザームは自らに暗示をかける。それでも握りしめた手は震えて、どこかにこの怒りを叩きつけたくなる。鬼道有人が殺された。明らかな他殺。しかもこのタイミング。どう見ても口封じではないか。

- - それはつまり…奴が言った事が正しかったという証明ではないか？

『お前達は…本当に宇宙人なのか？』

『それでも戦うのか？たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…？その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなくても…か！？』

『かの人物が妙な研究を始めたのは…五年前からだろう？身元不明の妙な女が男に仕えだしたのも同じくらいの時期じゃないか？』

『下手な興味で…我らの領域に踏み込まない事だ。さもなくば命の保証はない。…あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らいに来るぞ』

『ガゼルにも忠告されたんだろが。…やめとけ。正直二ノ宮の事は俺も嫌いだし疑ってるが…あの女の力は今はまだ必要だ』

『それに…奴は得体が知れない。下手に嗅ぎ回ってるのがバレてみる、いくらお前でも…』

思考をフル回転させる。鬼道の言葉。ガゼルの言葉。バーンの言葉。記憶を辿り、それらを繋ぎ合わせ、答えを導く…デザームの得意分野だ。

自分は遠き星エイリアの戦士。皇帝陛下にお仕えする星の使徒。

ずっとそう信じてきたし、その事実を何もかも疑う事は出来ないが

- 少なくとも鬼道は、自分達が宇宙人であるかどうかから疑っていた。

それが真実であれそうでなかれ。そう考える根拠が多分あったのだ。もしかしたら、自分達のDNAを調べた可能性もある。

言われてみればおかしい点が無いわけじゃない。自分達は物心ついた時から当たり前のように日本語を話していた。地球の、小さな島国の言葉をだ。自分達が元々は人間で日本人だったと仮定すれば、辻褄が合ってしまうのである。

- 加えて、二ノ宮様の存在だ。

鬼道が言った“妙な女”。ガゼルとバーンの忠告にあった“魔女”。どちらも二ノ宮蘭子の事であるのは間違いない。

鬼道は全ての黒幕が二ノ宮である事を疑っていた。ガゼルとバーンも、その二ノ宮が口封じに来る事を畏れていた。

彼女についてデザームが知っている事はさほど多くない。

ただ、自分も何度も彼女の手で生体実験を受けているので、研究者としては優秀であろう事も、特に脳科学とスポーツ科学に秀でている事も分かっている。

彼女ならば。陛下を含めた - エイリア学園メンバー全員の脳をいじくり、洗脳する事も可能なのではないか。

実際、ジェミニストームのメンバーは皆、彼女の手で記憶を消されて捨てられたという話ではないか。記憶を消せるなら、書き換える事もできる気がする。

- 考えれば考えるほど...二ノ宮様が怪しいと言わざるおえない。

仮に - 全てが彼女の思惑でないのだとしても。鬼道を惨死させ

たのが彼女であるならば――自分も黙っているわけにはいかない。彼らとは正々堂々戦いたかった。熱く燃えるようなサッカーをして、真正面から打ち勝ちたかった。鬼道に対しても例外ではない。それを――あんな形で汚すだなんて。とても赦せる話ではない。そんな女のやり方に賛同できる筈もなく、大人しく従うわけにもいかない。

――暴き出してやる……真実を。

我が名はイプシロンのキャプテン、デザーム。それが誇り。それが存在証明。

愛する陛下と部下達を護る為なら、命すらも懸けよう。今までも、そしてこれから。

そして身を挺して自分達に真実を知らせてくれようとした、鬼道の為にも。

【1・9・淀んだ空の、淀んだ大地に】

自分は負けない。負ける筈がない。

この日の為に、雷門の選手のデータは、プライベートな事に至るまで徹底的に叩き込んできた。その心理的弱点、プレイスタイルの癖、それぞれに生まれる一瞬の死角と隙。

身体的にも精神的にも揺さぶって、凌駕してやる。徹底的に追い詰めて、叩きのめしてやる。

求めるは甘美なる勝利。捧げるは完璧なる勝利。

「見てろよ…グラン」

フィールドの向こう。その場所に一人佇む赤髪の少年に、不動はニヤリと笑ってみせる。

「俺達は…俺は絶対勝つ。勝ってみせる。お前がご執心の雷門もここまでつてわけだ。…そこでじっくり見てろよ。俺の実力ってヤツをよお…！」

グランは一瞬だけ、切なげに眼を細めて…またいつもの無表情に戻った。相変わらず忌々しいポーカーフェイスめ、吐き気がする。だがいい気になっていられるのもそこまでだ。試合を見て、自分達の勝利の瞬間を間近で感じて焦ればいい。そして後悔すればいい

…自分をチームに組み込まなかった事を！

想像するだけで笑いが止まらない。不動は断続的に唇の端から嘲笑の声を漏らす。

…そうとも…本当は俺が、俺があの方のお役に立てる筈だったんだ…！！

グランよりもガゼルよりもバーンよりもデザイナーよりもレーゼよりも！あの方を誰より愛しているのは自分なのだ。あの方の為ならば何だってしてきた。キツイ実験も真つ先に名乗り出たし、訓練だって怠らなかつた。なのに！

自分は計画から外された。セカンドランクのジェミニストームにすら加えて貰え無かつた。何故。一体どうして。自分だってエイリア学園の一員だというのに！！

実力的には劣る事など何も無い筈だ。努力だって。あの方が望んでくれさえするのなら今以上の努力を約束しよう、あの方さえ、あの方さえ、あの方さえ！

気が狂いそうだ。

あの方の為に働く同胞達の姿を見るたび。あの方に誰より寵愛されるグランの姿に気付くたび！

グラン。忌々しいグラン。出来る事ならその生つ白い肌を切り裂いて、芸術的な赤に染め上げてやりたい。その不良品の心臓を抉りだして、生きたまま食らいつくしてやりたい。

憎い。憎い。殺してやりたい。苦しめてやりたい。その場所にいるべきは自分だ。あの方に愛されるべきは自分なのだ！なのに何故彼などが。当たり前のようにその席に座っているというのか。

でも仮にグランを殺しても、ガゼルがいる。バーンがいる。他にもあの方の愛を希うガキどもは大勢いる。キリがない。…だったら。

今まで自分は全てを、自分の実力で叶えてきた。自分の実力でねじ伏せてきた。それはこれからも変わらない。ノールールこそマイスタイル。自分は自分のやりたいようにやるだけだ。

認めてくれないのならば、認めさせてやる。

愛してくれないのならば、愛させてやる。

不動は決意した。その後の行動は早い。

エイリア石の欠片をありったけ持ち出し、その資料を読み漁って性質を熟知し。自分の為のチームを作るべくその力を振るう事を思いついた。

影山は不動を“天性の魔術師”と言った。それは概ね正しい。不動は力ある言葉を巧みに操り、戦いに用いる事ができる。その力は、エイリア石と非常に相性がいいのである。

さらに目を付けたのが、影山。不動は黒いサッカーボールを使い、北ヶ峰で影山の護送車が通るかかるのを待ち伏せた。そして雪崩を起こし、彼を脱走させ、取引を持ちかけたのである。

共に雷門を潰さないか――と。影山がサッカーを憎んでいる事も、雷門に固執している事も、陛下に恩があるらしい事も知っている。陛下がいずれ影山を利用するつもりでいた事も。

ならば自分が一足先にその仕事をこなしてやるうではないか。影山と共に、この真帝国学園の一員として雷門を倒す。徹底的に打ち負かす。

そうすればきっと――あの方も自分の力を認めてくれる筈だ。

あの方は強い者が好きだから。不動が真に強い存在と分かればきっと考え直してくれる。愛してくれる。あのグランなんかよりも。

自分の独断で始めた計画だったが、どうやらあの方も認めてくれたようだ。影山脱走も自分の学園脱走も、あの方の“眼”ならばすぐに気付いたろうに。

潰すどころか、情報規制までして間接的に手助けをしてくれた。

きっとあの方も期待してくれているのだ。不動は胸を踊らせた。期待を裏切つてなるものか。この計画は、絶対に成功させてみせる。

試合に必ず、勝つ。どんな手を使ってでも。

「不動」

黙りこんでいたグランが、口を開く。腹立たしいほどよく通る声で。

「君は本当に……俺が父さんに愛されると思ってんの？」

そうだろうが、と言いかけて――不動はギリリと唇を噛み締めた。たとえ本当の事でも、グランがあの方の寵愛を受けている事実を、自分の口で言いたくはなかったのだ。

言えばきつと、耐えきれなくなる。きつと歯止めがきかなくなつてグランを殺してしまう――嫉妬のあまりに。

「…違うよ。父さんが本当に愛してるのは俺じゃない。…父さんは遠い日に消えた幻を、俺の姿に重ねて見てるだけ」

俺は“グラン”なのに、と忌々しい男は呟く。

「それでも俺は構わない。父さんはあくまで幻の愛情を追ってるだけだとしても…俺がその身代わり人形だとしても。不動…君が…得られる筈だった本物の愛の代わりを、父さんに求めているだけだとしても…」

「黙れえええーッ！！」

反射的だった。すぐ足元にあったボールを、力任せに蹴り飛ばす。しかしグランはそれを、軽く身を翻す事でかわしてしまった。

嫌い。大嫌いだ。また耳鳴りが煩くなってしまうたではないか。

[illegible]

「俺の父さんはっ…あの方だけだああっ！」

あんな。裏切られて惨めな末路を辿った男と女なんかじゃない。散々自分を振り回すだけ振り回して無様に醜く死んで、死ぬ間際まで自分を巻き込んだ奴らなんか親じゃない。

どれだけ痛かったと思ってる。あの時の傷が今でも苛々と疼いて仕方ないのだ。

そしてどれだけ嬉しかったと思っている？あのお方に必要とされた時。あのお方が迎えに来てくれた時！

「決めたぜグラン…この試合に勝ったらお前を殺す！八つ裂きにしてお前を食ってやるよおおっ！！ハッハッハッハッハッ！！」

ビシリ、とグランを指差し、宣言する。そうとも。あの方の愛さえて得られれば何も我慢する必要がなくなるのだ。思う存分殺してやる。何回だってぐちゃぐちゃに踏み潰してやる。ざまあみろ。

自分にはあの方さえいればいい。
あの方には自分さえいればいい。

キャラバンは愛媛に向かう。

それぞれの決意と、絶望と、希望と、悲しみと、覚悟を載せて。それぞれの願う未来へを目指して。

一之瀬の隣では土門が寝息を立てている。本当は疲れきっていた

ところを、ずっと無理していたのだろう。

そうさせた一端は自分にある。罪悪感がないと言えば嘘だ。しかしそれが必要不可欠であったのも分かっている。

- - 豪炎寺…。

一之瀬は窓の外を見て、心の中で呟いた。

- - あいつ今… どうしてるんだろうな。

鬼瓦刑事から聞いた話で、円堂には伝えていない事がいくつかある。正確には、伝える事が出来なかったのだ - - 円堂の人柄は信頼しているが、彼はあまりに嘘が下手すぎる。

事件が事件だけに、鬼道の携帯は事件現場の遺留品として警察に回収された。ゆえにその中身を鬼瓦刑事も確認したわけだが - -。

『鬼道君だが。豪炎寺君がキャラバンを降りた後も、定期的に連絡を取り合っていたみたいだな』

なんと、鬼道は豪炎寺の居所を知っていたし、メールのやり取りもしていたのである。

どうして自分達にそれを教えてくれなかったのだろう。不思議がる一之瀬に、鬼瓦は、他言無用だぞ、と前置きして話してくれた。

『…豪炎寺君の妹さんが誘拐され、エイリアの人質になっている。我々警察が全力で捜査に乗り出しているが…妹さんを保護しなければ豪炎寺君は戦う事ができない。むしろ奴らの言いなりになるしかない』

だから自身とチームを護る為、行方をくまますしかなかったのだ、

と。

なるほど。一之瀬もようやく合点がいった。豪炎寺と最後に戦ったジェミニストーム戦が何故あんなに不調だったのか。監督に指示されたからといって何故あんなにあっさりキャラバンを降り、行方をくらましたのか。

多分、妹を拉致されて身動きのとれない状況を、仲間達に話すことすら口止めされていたのだろう。

『メールの内容から察するに、鬼道君は自力でその豪炎寺君の状況を調べ上げて、連絡してきたみたいだな。まるで名探偵だよ』

結局、豪炎寺の居場所を聞くことは出来なかったが（さすがにそれを今一ノ瀬が知るのはまずいだろう）、彼の無事がわかっただけでも収穫だ。

鬼道の死を、まだ豪炎寺には知らせていないという。自分から伝えておくよ、と鬼瓦が言ったので任せることにした。

我ながら無責任で酷いとは思っけれど。豪炎寺に自分から話すだけの気力が、今の一ノ瀬には無かったのである。

- - 豪炎寺も…鬼道と同じようなタイプだからな。

きつと、人前ではそんな素振りは見せなくて。だけど一人になった時、声を殺して涙を流すのだろう。

多分今までも彼はそうやって、全ての悲しみと苦しみを無理やり押し流してきたに違いない。自分の為に。誰かの為に。

- - それだけ俺達もあいつらに、寄りかかりすぎてたって事なんだろうな。

エイリアと…異星からの侵略者と戦う。この世界を護る。そう

決意した時点で、この事態を予測し、せめて覚悟を決めておくべきだったのかもしれない。

そもそも連中が次々日本中の中学校破壊を始めた段階で、今まで死人が出なかったのは奇跡的なのだ。

まったく何が“我々は野蛮な行為は望まない”だ。充分野蛮な真似を繰り返しているではないか。と、そんな文句を今のレーゼにぶつけたところで、彼にも答えようの無い事だろうが。

去る仲間。消える仲間。終わりの見えぬ悪夢。自分達に覚悟が足りていなかった事は、否定しようがない。

もうこれ以上悲劇は繰り返さないと決めた。だが、いくらそう願って努力しても、不確定な未来はまた自分達を裏切るかもしれない。同じ事がまた起きてしまいかもしれない。

- - それでも俺は：俺達は立っていなくちゃいけないんだ。

もう散々涙は流した。吹っ切れたとは言えないが、後はもう無理やりにでも進む他ない。

窓の外を流れていく車の並。やや雲の多い淀んだ空を見上げて、一之瀬はひそかに誓いを立てる。

また倒れる事があっても、何度でも立ち上がろう。

諦めない事こそ、自分達の最大の必殺技なのだから。

【1 - 10・樂園、追放】

薄ぼんやりとした記憶の海に、埋没した欠片。微かながら、忌々しいほど鮮明に残っている景色。

けして思い出したい事ではない筈だ。しかし影山は今、それをあえて思い出そうとした。ズキリ、と脳の片隅に鋭い痛みが走ったが、無理矢理にでもそれを無視しようとした。

『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』

いつも、振り上げられる手が合図だった。それは素手であつたり、ビール瓶やお盆やらが握られていたり様々であつたが。

『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』

謝る声。泣き叫ぶ声。許しを請う声。

それでも抵抗しなかった。する事が出来なかったと言ってもいい。逆らえば、痛みを伴う時間を長引かせるだけ。今よりもっと酷い目に遭うだけ。

だからじつと身体を丸めて、あらゆる苦痛に耐える。じつと我慢すればいい。そうすればいつかはこの時間も終わる。どんなに辛くても、終わると知っている。

喚きながら叫び、暴力を振るう男が明かりを消す。それが二つ目の合図。暗闇の中で伸びる手に悲鳴を上げて、耐える耐えろと自らにまた言い聞かせる。

- 僕が悪い子だから、いけないの。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

幼い影山零治は、光の中でも闇の中でもひたすら謝罪を繰り返す。大好きな父が、いつも優しくかった父がこんな真似する筈がない。目の前にいるのはきつと、悪い魔法使いに取り憑かれてしまっているだけなのだ。そう思った。そう思おうとした。

本当に傷ついているのは自分ではない。誰より傷を負って、苦しんでいるのは父なのだ。母が病院からほとんど戻って来ない今、父には自分だけしかない。息子の自分だけは、父の味方にならなければ。

自分が良い子にさえなればきつと、父が悪い魔法使いに取り憑かれる事もなくなる筈なのだ。

父も自分も大好きな、父がかつて上手だと誉めてくれたサッカー。サッカーがもつともつと上手くなればきつと父は自分を見てくれる。きつと自分を愛してくれる。

きつとまた――二人で一緒に、笑ってボールを追いかける事ができる。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

練習がまともに出来なかった雨の日。偶然出逢った一人の女性に教えた、影山の“白き魔法”。

あの頃緩やかに朽ちつつあった世界で、それでも自分は無邪気な魔法を信じていた。信じれば、願い続ければ、努力を怠らなければ。どんな夢も叶えられると信じていた。

『だから僕はサッカーが大好き！』

サッカーが、好きだった。サッカーは自分と父を繋ぐ唯一の絆だから。サッカーをする父を見るのが、好きだったから。

だけど。今はもう、全ては過去形でしかない。

父は自殺し、母も後を追うようにして病死。結局、影山の願いは何一つ叶わなかった。やがて遺ったのは、大好きなサッカーが自分の全てを奪ったという事実だけ。

信じていた物全てが自分を裏切った。影山は絶望した。次には恨んだ。自分を裏切った全てを憎んだ。

ひび割れていく白き魔法。

真逆の色に染まる光の魔法。

激情は行き場を無くして決壊し、溢れかえる。まるで血のよう。

その真つ赤な海に溺れて、息ができなくなってしまうその前に――手を打たなければ、溺死は免れない。

憎まなければ。怨まなければ。きっと自分は生きて来れなかっただろう。まるで消去法のように選んだ未来。愚かな事だ。惨めな事だ。それでも一体、それ以外にどうすれば良かったというのか。

『すまない零治…すまない、すまない、すまない…っ！』

散々自分を痛めつけた後、決まって涙を流しながら息子を抱きしめた父。耳について離れない、惨めで哀れなその声。

暴力によってしか他人を愛せない。父をそんな風に追い込んだのもサッカー。そしてメディア。観客。あらゆる世界。

自分は決して父のようににはならない。なりたくない。少年は冷えた眼で世界を見つめたまま大人になった。

理不尽な目に遭いたくないなら、力を得ろ。強くあれ。弱者に価値はない、それがこの世界なのだ。父は弱者となったから世界に弾かれた。母は弱者であったから生きていく事が出来なかった。

非情？無情？それが何だ。弱い事が罪なのだ。変えたいなら全ての試合に勝てばいい、それだけの事ではないか。

――その為なら、何だってする。とうにこの魂は汚れきっているのだ…今更畏れる事など何も無い。

まるでファンタジーのような表現だと我ながら思うが。

岐路に立つ影山の前に、ある時一人の魔女が現れて言う。あたしの災禍の力を貴方にも分けてあげるわ、と。

その魔女が、愉しみだけを望む存在だと、薄々ながら気付いていたが。全てを変える力の欲しかった影山は彼女の誘いに乗った。そして彼女のくれた“黒き魔法”で、自分は力ある魂と迷いなき心を手に入れたのだ。

さらに彼女が二度目に現れた時には、今度は“あの方”を紹介してくれた。自分と同じ黒い焰をたぎらせ、世界を憎悪する魔王たる人。

エイリア皇帝陛下。

その目的が達せられた暁には、自分の望みもきつと叶えられる事だろう。だから影山は裏でかの人に協力し、時には逆に力を借りた。神のアクアもまた――その協力の為に用いられた、一つの試作品に他ならない。

――終わらせてやろうではないか。サッカーを愛する全ての者達の、御伽噺を。

真帝国学園。掲げられた旗の下で、影山は空を見上げる。青空は未だ見えない。否、仮に晴れたのだとしても――恐らく自分はもう二度と、その青を目に映す事は無いのだろう。

あの雨の日からずっと。ずっと自分の頭上からは降り止む気配がない。

本当の意味で失う時は、いつも雨なのだ。

『総帥！』

記憶の中で響き渡る、よく通る少年の声。

どれだけ傷を負っても、歪んだ情を浴びせられても倒れなかった彼の、決別の一声。

『これが貴方のやり方ですか！』

本当は。誰より鬼道に見て欲しかった。今の自分を。本物の力というものを。彼の縋る甘い幻が、いつか確実に彼を裏切るという事を。

そして自分にとっての真の最高傑作が誰かということ。

だが鬼道は――死んでしまった。エイリアに近付きすぎたゆえに、危険分子と見なされて消されてしまった。自分に力を与えた、あの魔女の手によって。

元々真帝国学園そのものが影山と不動の独断専行なのだ。文句の言える立場でない事は承知している。それでも。

――きつとお前は最期まで……いや、死して尚私を恨み続けるのだらうな。

埠頭に近付いて来る、イナズマキャラバン。その姿を視界におさめ、影山は潜水艦を浮上させるべく立ち上がる。

――構わないさ。……理解など……最初から求めてはいないのだから。

期待すれば裏切られる。信じれば必ず喪う。ならば最初からそうしなければいい。

それが自らの保身行動と気付きながら。影山は自らの弱さを振り切るように歩き続ける。

殻を捨ててにはあまりに、影山零治は闇の深さを知りすぎていた。

愛媛に着いたはいいが。真帝国学園を探し当てるのは骨が折れた。どうか精神状態の落ち着いた咲山達の話によれば、愛媛で起きている事件について分かっている事は大きく分けて三つ。

一つ目は、自分達も既に知っている通り、サッカー少年少女達の相次ぐ失踪。二つ目はその少女達の半分が、埠頭にて姿を消している事。三つ目はその埠頭にて、海坊主を見たなどという目撃情報があるということ。

三つ目の信憑性はかなり怪しいが。その“海坊主”が、何かを見間違えた結果である可能性はある。どちらにせよ埠頭の方へは調べに行くべきだろう。

問題は、街の人の態度があまりに非協力的だったという事だ。サッカーに関わる者は神隠しに遭う――などとまるで宗教のごとく信じてしまっている人もいるほどである。

おかげで問題の“埠頭”が何処なのか、探す事からまず困難だったのだ。皆が頭を抱え始めた頃になってようやく、“海坊主”を見たという老人を探し当てる事ができた。問題のポイントが何処であるのかも。

「影山の奴」

元より気長とはいえない難い染岡は、苛々と地面を踏み鳴らす。

「呼び出したのはてめえの方だろうが。歓迎の用意くらいしとけや！」

「ま、まあまあ」

目金と秋に両側から宥められ、フンツと鼻を鳴らす。まったく、

もし自分達が真帝国の場所を見つけられなかったらどうするつもりだったのか。本末転倒ではないか。

それとも - 鬼道がいたならそれも可能だと。そんな算段であったのかもしれない。彼の卓越した頭脳ならば、少ない情報でも自分の居場所を軽く見つけ出してみせると踏んでいたのかもしれない。

あくまでそれは、鬼道の死が影山の想定外だったとしたら - - という前提ではあるが。

- 俺は影山を赦さねえ。俺達を殺そうとした事も、土門にスパイなんて真似させてた事も、鬼道達を苦しめ続けてきたことも。

そして、赦せないのはそれだけじゃない。

影山はエイリアと繋がりがあつた筈なのだ。なのに奴は鬼道に、真帝国に來いと誘っていた。その前に鬼道はエイリアの口封じと思しき理由で殺害されてしまったのに。

この矛盾が何を示すのか、染岡には分からない。そもそも自分は頭脳労働には限りなく不向きなのだ。

ただ、一つ確かなことがある。それは。

- - もし...もし鬼道を殺したのが影山の意志なら。赦さないどころじゃ、済まねえぞ。

自分と鬼道はそう長い付き合いではない。とりたてて仲が良いわけでもないし、一番最初は敵だった事もあつて第一印象も悪かった。最期まで拭い去れない不信感があつた事も、否定はできない。

だけど。彼がいつも陰日向問わず、チームの為に奔走してくれていた事を知っている。体調が悪い時も、精神的にきつい時でも、自分達の前ではけして弱った姿を見せなかった。

立ち続け、皆の支えになる事こそ自分の役目と示すように。

実際、彼の作戦立案力のみならず、存在そのものに自分達は皆救

われてきた。本当はもつと“ありがとう”を伝えるべきだったのに。素直とは程遠い口下手な自分は、まともに感謝を口にする事もできなくて。

本当は、死ぬほど後悔しているのだ。言えなかった一言が胸にくすぶったまま、じくじくと現在進行形で傷を抉り続ける。

彼の全てを奪ったのは誰だ。

自分達の本当の敵は誰だ。

せめてそれを知りたくて――そうでなくば手向ける事もできなくて――染岡は此处にいる。

――俺は円堂達みたく、前向きな理由で立ってるわけじゃねえ。……
だけど。

埠頭の倉庫街。その入り口にキャラバンを停止させ、イレブンは地面に降り立つ。

ナメやがって。染岡は口の中で悪態をついた。冗談のつもりか、嫌がらせか。鬼道の、彼らの人生をブチ壊しておきながら。

倉庫街の入り口には、“帝国学園”と書かれた看板と、見覚えのないエンブレムが掲げられていた。

【1-11・キメラはまだ、羽根を持たず】

まるで喧嘩を売るように掲げられた“帝国学園”の看板。蹴り飛ばしたくなるのを理性で押しとどめて、円堂は入り口をくぐる。

倉庫街を抜けると、暗い海に出た。愛媛の埠頭。そしてまるで自分達を待ち構えていたかのごとく、海の中からそれは姿を現したのである。

地元民が“海坊主”と勘違いしたものの正体。それは巨大な潜水艦であった。

潜水艦が浮上してきた衝撃で大量の水しぶきが上がり……うっかり逃げ遅れた円堂はすっかり塗れ鼠に。ただでさえ斜めっている機嫌がさらに悪くなった事うけあいだ。

そうかこれも嫌がらせか！地味に腹が立つぞ影山！

しかもいかにも金をかけてそうな最新設備満載の船とは。一般庶民に喧嘩売つてるとしか思えない。

重たい音と共に開いていく入口。円堂は秋から受け取ったタオルで体を吹きながら、じつとその光景を見ていた。

階段が降りてくる。まるで円堂を招待するかのごとく、丁度真正面に。

「久しいな、諸君」

その低い声に。隣に立っていた照美が小さく肩を震わせたのが分かった。怯えているのかもしれない。円堂は迷わずその手を握った。照美の目が驚いたように見開かれる。円堂は力強く頷いてみせた。大丈夫だよ、という意味をこめて。

もう誰も、傷つけさせはしない。

もう誰も、独りにはしない。

「お前達が来るかどうかは一種の賭だつたんだがな」

階段の真上から。自分達を蔑むかのように見下ろしてくる影山。

「やはり来た、か。逃げ出さないその勇氣だけは讃えよう。ただ無謀なだけかもしれないがな」

「逃げないさ、俺達は」

円堂は男の、サングラスに隠れた瞳をひしと見据えて、ハッキリと断言した。

「俺達は逃げない。逃げ出さない。目の前にある現実からも、真実からも」

何かを変えたいならば。

救いたいならば。

立ち向かうしか方法は無いのだから。

「俺達は知る為に来た。知って…悪夢は終わらせてやる」

ビシリ、と。一瞬、頭に亀裂が走ったかのような痛みがはぜる。

フラッシュバックする景色。散らばる茶色の柔らかそうな髪と、ぽっかりと何も移さない赤い瞳。

床に咲き誇る紅蓮の花の鮮やかさと、血の通わない素肌の青白さ。恐怖と絶望に染め上げられたその記憶に、円堂は歯を食いしばって耐える。辛すぎる記憶。しかし、この感情を忘れてはならない。

この悲しみを、そして怒りを。

未来を見る事の叶わなくなってしまった彼の代わりに、今自分達にできる事をする為に。どんなに痛くとも円堂は自らの脳髓に刻みつける。

鬼道が生きていた証として。その死を無駄にしない為の、意志を繋ぐ為の礎として。

「お前には…聞きたい事がたくさんあるんだ、影山」

あらゆる激情を押さえ込んで、円堂は言葉を紡ぐ。

「お前の…最終的な目標は何なんだ。サッカーへを憎んでるのは知ってるさ。だけど世宇子中は敗れ、プロジェクトZは潰えた筈。その先に、お前が望むものは何だ」

もし。彼の憎しみの対象が特定の団体や個人であつたなら。その復讐という底の知れない闇にも、ゴールらしきものが見えたかもしれない。

だが、彼の恨みの対象は、サッカーというスポーツそのもの。物理的にどうこうするにはあまりに幅が広すぎる。

それとも最終的に、この地上からサッカーそのものを消し去る事が目的だとも言うのか？

「そういえば、お前達に直接話した事は無かったかな。まあ、君も君でいろいろ知らされてはいるようだが」

暗い笑みを浮かべて、影山。

「サッカーを誰より憎む私が、サッカー界の頂点に立ち支配する事。その為に、常に勝利し続ける最高のチームを作り上げる事…！具体的な説明をするならば、そんなところだろうな」

ちらり、と目線を、男は照美へと映す。照美はその眼を様々な感情で揺らしながらも、口を開いた。

「…気付いて、ました。貴方がサッカーを憎んでいる事も…私達世

宇子中もプロジェクトZも…全ては駒の一つでしかない事も」

影山はサングラス越しに、かつての教え子たる天使を見る。照美は切なげに、声を震わせて…しかしハッキリと告げた。

「それでも…不思議な話ですね。サッカーを憎んでいる貴方が私達に教えた破壊の手段。なのに私は…サッカーが大好きなんです。サッカーも…貴方の事も。サッカーは貴方と私達を繋ぐ、唯一の絆だったから」

サッカーが、絆。その言葉に、何人かがピクリと反応した。吹雪に、聖也に、春奈。

円堂も思い出していた。まだ鬼道が雷門に転校して来る前に。彼の家に呼ばれて、話してもらった過去。

両親が飛行機事故で亡くなって、春奈と二人だけで生きてきたこと。

サッカーを始めたのは、顔もあまり覚えていない父の唯一の遺品がサッカーマガジンであったからである事。

そしてサッカーが…亡き実父と自分を繋ぐ、唯一の絆だと思っていたからだ。

照美もきつと、同じなのだ。

彼がどんな経緯で影山に従う事になったかは分からない。でもきつと鬼道と同じように影山を信じてきて…鬼道以上に、影山という男を慕っていたのだろう。

もしかしたら本当の父のように思っていたのかもしれない。

「何度でも言います。貴方に届くまで、何度でも。たとえ敗北を知っても、神でいられなくなっても、いつかこの身体ごと朽ちても…この命がフィールドで散るなら本望です。サッカーが、好きだから」

影山に付き従った事で、その下でサッカーをした事で。仲間達を失い、自らの命すら失おうとしている照美。

しかし彼は強い心で言う。

それでもサッカーが好きだと。それでも今の自分を後悔しないと。影山を怨みはしないと。

「だから私は…貴方と戦う。私はサッカーで、貴方を救ってみせる」

憎しみは罪ではない。

けれど女神は知っているのだ。

世界を、誰かを救うのは憎しみではない。愛こそが幸せを齎す、唯一にして最大の魔法であることを。

「…思い上がるな、墜ちた女神が」

やがて影山は吐き捨てるように言った。

「かつて何度も告げただろう。私がお前に求めるのは勝利の美しさのみ。敗北は醜いぞ。墜ちて汚れた醜悪な天使など、もはや何の用もない」

照美は何も言わない。本当は傷ついたのかもしれないが…きっとその言葉すら、予想の範疇にあったのだろう。

くるり、と背を向ける影山の背を、待って！と呼び止めたのは春奈だった。

「お兄ちゃんを…お兄ちゃんを殺したのは誰！？貴方はエイリアと繋がってるんでしょう？なのはどうして…お兄ちゃんは殺されたの？貴方が指示したのっ！？」

それは多分、この場にいる全員が、最も聞きたい内容だろう。

周囲の温度がずっと冷える感覚。円堂は緊張して、春奈と影山を交互に見た。

「鬼道の妹…音無春奈か」

影山は、春奈がユニフォームを着ているのに気付き、小さく笑みをこぼした。それは失笑か嘲笑か苦笑か…それとも別の意味合いでか。

「それ以上の事を知りたくば…試合で私のチームを倒す事だ。来るがいい。お前達を潰したくてウズウズしている奴らがお待ちかねだ」

そのまま潜水艦の中へと消えていく。

知りたければ力づくで奪い取れ、という事か。望むところだ。どちらにせよ試合はするつもりでいる。そして負けるつもりもない。

「行こう！みんな！！」

「おうっ！！」

円堂のかけ声と共に。一同は一斉に、潜水艦の中へ続く階段を駆け上り始めた。

実験室にて。パタン、と二ノ宮はカルテを閉じた。

「暫く吐き気と目眩が残るわ。多少熱も出るかもしれないし」

意識を取り戻し、寝台から降りるデザーム。よろけながらも出口に向かう彼の背中に、二ノ宮は声をかける。

「今日は練習も休んで頂戴。無理は禁物よ？いいわね？」

デザームは青ざめた顔で一度だけ二ノ宮を振り返るも、返事をするのもしついのだろう。そのまま何も言わずに、部屋を出て行く。

「お大事に…ふふっ」

二ノ宮はとうに気付いていた。漫遊寺での雷門との戦いから、デザームが自らの立ち位置や記憶に疑問を抱き始めている事を。

鬼道が死んでからますます疑いを強めたようで、資料室にも頻繁に出入りしている。いずれ二ノ宮の正体にも辿り着くかもしれない彼の明晰な頭脳にはマスターランクの三人ですら一目置いているのだから。

…それはそれで面白いんだけど、ね。

さすがに今すぐ、自分が黒幕である事を確信されては困るのだ。イプシロンにはもう少しばかり働いて貰わねばなるまい。しかしイプシロンの面々は、エイリア皇帝陛下よりもデザームへの忠誠心が強い。デザームが万が一離反するような事になれば、メンバーも迷わず着いていくだろう。

それはちよつと面倒だ。イプシロンにはまだ利用価値がある。使
い物にならなくなるにはまだ早い。

- 気付いてるのかしらね…あの子。仲間の事は鋭いのに、自分の
事となると鈍いんだから。

ゆえに二ノ宮は、デザームへの生体実験を増やし、またそのレベ
ルも今までよりハードにした。少しでも彼の思考時間と余裕を奪う
為に。

麻醉で眠らされていた彼は、自らの身体に何が埋め込まれて、ど
のようにいじくり回されたかも知らないだろう。今日一日に至って
は全身の痛みやらけだるさやらで、実験内容を予測する余裕もなあ
だろうが。

- 強かで、美しい子は好きよ。…貴方はどんなに記憶をいじられ
ても、根っこの部分では何も変わらないのね。

思い出すのは、自分が吉良の元で働き始めた頃のこと。

デザームと呼ばれるようになる前から、年長者の彼は子供達の兄
貴分で、リーダー各だった。現イプシロンのメンバーは勿論、ジェ
ミニなどの子供達にも本当に慕われていた。

特に、ゼルとレーゼが懐いていて。デザームも彼らを実の弟のよ
うに可愛がっていたようだ。

だから。レーゼが生体実験の最初の犠牲者になった時 - 彼は我
が身を顧みず抗議しに来て。本来はグラン率いるガイアの一員にな
る筈だったのに、地位を降格され、レーゼ以上に過酷な実験に晒さ
れる事になったのだ。

- 勿体無いわね。あの馬鹿な正義感かえなければ、完璧なダイヤ
モンドになれたのに。

そしてまた。そのくだらない正義感のせいで、知らなくてもいい秘密に触れ、その身を滅ぼそうとしている。本当に勿体無い事だ。

「まあ、こつちも精々楽しませて貰うわ。素敵な玩具が壊れるまで…ね」

そろそろ、いい頃合いだ。

二ノ宮はモニターを操作する。エイリアの子供達の身体には盗聴機に小型カメラに放射性マーカーに至るまで、様々な仕掛けが埋め込まれている。

レーゼも、エイリア学園出身の不動も例外ではない。

「上手に踊ってみせてね…可愛いボウヤ達」

もうすぐ真帝国学園と雷門の試合が始まる。試合が終わったら自ら挨拶に出向くのも悪くはない。

愚かな魔女の謙族に見せてやるうではないか。
自らが描く、最高のシナリオを。

【1・12・それは悪の、召使い達】

潜水艦の、暗く狭い通路を歩く。

皆それぞれに、思うところはあるのだろう。俯き加減な者。心配顔の者。険しい顔で前を見据える者。共通しているのは皆一様に無言である事くらいだ。

風丸の隣を歩くレーゼは、水色のパーカーのフードを被って、不安げに俯いている。風丸が手を握ってやると、少し驚いたようにこちらを見てきた。

「大丈夫だよ」

何が大丈夫なのか、は分からない。でもそう言ってやりたかった。レーゼに対しての恨み辛みが消えたわけではないが。先日的一件以来、なんとなくほっとけない存在になってしまったのも確かである。弟ができたらこんな感じなのかもしれない。

自分より少しばかり背の低い彼を見下ろして、微笑んでみせる。

「大丈夫だから」

すると、ちよつとだけ安心したようにこくんと頷くレーゼ。

記憶が無いからこそ、今の姿が一番彼の本質に近いような気がしてならない。本当はとも臆病で、強がりで、しかし人知れず練習するような努力家だったのではないかと。

そんな彼が、謎の体調不良に見舞われ、妙な連中に狙われている。その上、自分達の仲間の一人は殺害された。不安がるのも当然だ。

自分が、何とかしてやらなければ。

そう思っていると、レーゼの反対の手を、宮坂が握った。

「大丈夫ですよ、リュウさん」

緑川リュウジ、という瞳子がつけたレーゼの仮名は、宮坂にも伝えてある。

宮坂は明るく笑って、レーゼに言った。

「大丈夫！だって雷門イレブンは無敵ですから！！」

ああ、そうか。なんだかレーゼがほっとけない訳。

入部した頃の、宮坂に似ているのだ。

あの時の宮坂は、今よりずっと自信なさげで、おどおどした様子が目立っていた。アガリ症なんです、と恥ずかしげに言っていたのを覚えている。小学校の時の大会で、ハードルで転んで、大怪我をして復帰したばかりだったせいだ。

それが今では、人前でドギマギもしなくなったし、陸上でも自身を持った走りができるようになった。それは他の誰でもなく、本人が努力して身につけた結果だろう。

・・・そうだ。本当は分かっているんだ。力は…努力して身につけるからこそ意味があるんだって。

自分はきつと、実力的にも精神的にも、この中の誰より弱い存在だけだ。

そんな自分だからこそ、できる事があるなら試したい。

・・・諦めない事が、俺達の最大の必殺技なんだ。

唐突に目の前が開けた。暗闇に慣れた眼には眩しくて、思わず手を翳す。

緑色に輝くフィールドにサッカーゴール。あまりにも見慣れた風

景だ。予想の範疇ではあったが、まさか本当に潜水艦の中にサツカーコートを作つてあるだなんて。

影山は脱獄したばかりの筈。一体どこからそんな資金を引っ張つてきたのやら。エイリアが資金提供してくれたのだとしたら、無駄に太っ腹だ。

風丸と同じ事を栗松も思つたようで、お金がかつてるでやんすねえ、とため息をつくのが聞こえた。

「待ちかねたぞ、雷門イレブン」

フィールドに反響する声。無人と思つていたので思わずドキリとする。

声は上斜め前方――柱の上からだった。二本の柱の上にそれぞれ人影が見える。二つの人影はそのまま体操選手のように飛び降りて、鮮やかに着地してみせた。

「あんた達」

塔子が驚きに声を上げる。

「どういうこと……？ 影山に捕まつてたんじゃなかったの……？」

目の前に降り立つたのは――佐久間と源田の二人だった。何やら、自分の知る彼らとは様子が違う。髪型やファッションの差もそうだが――なんだか雰囲気が異質だ。

少なくとも、影山に捕らわれて言いなりになっている人間には、見えない。

「随分遅い到着だったな。……まあ、あまり早く着くのもおかしい話か。喪に服す“フリ”くらいはしなければな」

「フリって……」

まるで雷門が鬼道の事などどうでも良いと思っているみたいではないか。

怒りは勿論あったが、それ以上に風丸は戸惑っていた。自分達を、まるで射殺すかのような二人の眼。

まるで親の敵でも見るような、眼。

だがこちらはまるつきり心当たりがない。そもそも彼らと顔を合わせたのは、精々帝国学園と試合した二回くらい。吹雪、木暮、塔子、レーゼに至っては初対面ではなかるうか。

「何故恨まれるか分からない。…そんな顔だな、お前ら」

佐久間が隻眼で、ギリリとした目線を向けてくる。

「俺達は…ずっと鬼道を恨んでいた。」

「……！」

「奴のせいで帝国は滅茶苦茶だ。雷門に負け、世宇子に負け…挙げ句本人は俺達を捨てて雷門に転校！お前らにも奴にも分からないだろつよ…病院のベッドの上で俺達が…どれほど悔しい想いをしたかなど…！」

鬼のような形相の佐久間。本気で悔しいのだろう。源田は一見物静かに見えるが、全身から怒りのオーラが噴き出している。

「何言ってるんだよ…！負けも転校も事実かもしれないけど、鬼道はお前達の為にも、世宇子を倒そうって…」

「黙れ裏切り者っ…！」

二人がかりで怒鳴られ、びくり、と話しかけた土門の肩が揺れる。

「裏切り者…ああそうだ、お前も裏切り者だ。帝国にいたくせに、あっさり雷門に行きやがって…。お前にだけは文句を言われる筋合いはない」

源田の声は、驚くほど冷たい。

「…俺達も最初はそうやって納得しようとしたさ。総帥は間違ってたんだから仕方ない。鬼道が転校したのも俺達の為の筈だから仕方ないってな…でも」

血の気が失せるほど握りしめられた源田の拳が、わなわなと震えている。

「鬼道も総帥もいなくなつて…帝国サッカー部がどんな有り様になったと思う？退院した後も地獄だった。俺達もレギュラーのみんなも頑張ったさ…。やめようとする一年を引き止めて、やけになる二三年を抑えて…頑張つて頑張つて…でもうまういなくて…！！」

知らなかった。

風丸は愕然として、源田の話に耳を傾ける。確かに…帝国という学校は、雷門とは別の意味でカリスマが物を言うチームだった。

鬼道の牽引力は今更説明するまでもなく。影山も、やり方こそ正しくなかったかもしれないが、有無を言わさぬ威圧感とカリスマがあつたのは確かである。

その二人が、世宇子との敗北を気に両方いなくなつて。その穴を埋める為に、副将たる彼らがどれほど血の滲む苦勞を重ねたか…それは彼らにしか分かるまい。

無意識に視線は宮坂へと向いていた。かつて風丸に、陸上部に戻つてくれないかと必死で頼み込んできた彼。

青ざめる。ひよつとしたら。陸上部でも、同じ事が起きていたのではないか。自分は立場上は副部長で、実質陸上部のエースだった。その自分がサッカー部へ助っ人に行つたきり戻つて来なくなつて。

部長の速水も、他の仲間達も笑つて応援してくれたけれど。本当は…言葉にできないような苦勞がたくさんあつたのかもしれない。思えば久々にトラックを走つたあの日、何人か面子が減つていた気

がする。

それでもサッカー部で戦う風丸を心配させまいと、笑顔で背中を押してくれていたとしたら。

風丸の視線の意味に気付いた宮坂が、一瞬だけ、苦いような笑みを浮かべた。それが全て物語っているように思えて――風丸は罪悪感で胸が詰まった。

「でも……結局鬼道は戻って来なかった。世宇子は倒したのに、戻って来なかった」

佐久間の空虚な呟きが、フィールドに溶けていく。

「忙しいとか、事情があるんだとか……自分を納得させようとしても無理で。やっぱり俺達は、あの人に捨てられたんじゃないかって思い始めた。弱い駒は必要ない。勝利できない俺達に……もう用は無いんだって」

「そんな……鬼道はそんなつもりじゃ……」

「そうじゃないって言い切れるのかよ円堂！お前は鬼道じゃないだろうがっ！本当だって言うなら鬼道を此処に連れてきて、土下座して謝らせろよっ！！」

激昂する佐久間。それは血を吐くような叫びだった。

「できないよなあっ！？鬼道有人は死んじまったんだからっ！！殺されたんだからっ！！」

空気が音を立てて凍りつく。

鬼道有人は死んだ。殺された。

改めて形になったその言葉が風丸の、仲間達全員の胸に突き刺さる。

「あいつはもう二度と謝らない……帝国に帰って来ない！気付いたん

だよ…全部、全部、全部、お前らのせいだって！お前らが鬼道をたぶらかさなければ、総帥と決別する事も俺達が負ける事も無かった！俺達を捨てて雷門に行く事も無かったんだ…っ！！そしてきつと…あんな惨めな死に方することだって…！！」

びしり、と佐久間の指が真っ直ぐ円堂を指差す。

「鬼道はお前らに騙された！お前らが鬼道を死に追いやったようなもんだ…！！」

佐久間と源田の理論は、滅茶苦茶だった。正しいのは鬼道が円堂に影響されたという一点のみ。そこから先は鬼道が自ら選んできた道で…その後の結果は偶発的に生まれたものではないか。

そもそも、鬼道は帝国メンバーを捨てたわけじゃない。世宇子を倒して尚雷門に残ったのは、エイリアが襲撃してきたせいには他ならない。世界の為には、雷門の一員として戦うしかないではないか。

それに彼はこの戦いが終わったら帝国に戻るつもりでいたのだ。

それが出来なくなったのは…二度と戻れなくなってしまったのは佐久間と源田を案じて一人で彼らに逢いにいったせいだ…。

そうだ。怒りをぶつきたいのはこちらの方だ。あの日、帝国に鬼道呼び出したのはお前達ではないのか。確かに佐久間の携帯から呼び出したメールが、鬼道の携帯には残されていたというのに。

むしろお前達のせいで鬼道は畏にけられたのだと言いたい。いや、そもそも本当はお前達が彼を殺したのではないのか。風丸は口を開こうとして…誰か掌に遮られた。

聖也だった。駄目だよ、と言うように首を振られる。風丸は悔しさに歯を食いしばった。

「…敗北の屈辱は勝利の喜びに拭うしかない。あの敗北が俺達の全てを壊した。お前らが俺達の全てを滅茶苦茶にした。絶対な赦さない。お前らを潰す為なら俺達は…悪魔にだって魂を売ってやる」

「その為なら、影山に従ってもいいつてのかよ……！」

二人のプレッシャーに気圧されながらも、叫ぶ土門。

「鬼道は言ってたぞ！影山は間違ってる。奴の決別してやっと……俺達のサッカーができるようになった……その最初の一步を踏み出せた……！」

「俺達のサッカー」、だって？」

視線で人を殺せそうな、阿修羅の形相で佐久間は土門を睨みつける。

「俺達のサッカーは負けたじゃないか……！」

佐久間が絶叫する。絞り出すような声で。

ダンツ！と重たい音がした。早くて重いシュートが放たれたと気付いたのは、土門の身体が吹っ飛ばされたのを見てからだった。

「ど、土門！」

「思い知らせてやるよ、俺達の受けた痛みを」

倒れた土門と、駆け寄る一之瀬の前に歩み寄り。佐久間は冷えきった眼差しで彼らを見下ろした。

「惨めに這い蹲るがいい。俺達には秘策があるんでな」

【1 - 13・平和への、行列】

明らかに、佐久間も源田も様子がおかしい。

確かに彼らは精神的に追い詰められていたのだろう。だが、物事を随分と悪い方に悪い方に考える傾向にあり、疑心暗鬼にも陥っている。やけに多弁で、攻撃的。

そんな症状を、聖也は過去にも見た事があった。それはとても悲しい場所で、何度も。

ある時は輝ける庭と呼ばれた町の研究室で。ある時は神々の戦場で。またある時は閉鎖的な小さな村だったり、遠い異国の戦場だったり。

- - その病の名を、俺達は仮性ハートレス症候群と呼んでいた。

詳しい事は未だによく分かっていない。聖也は研究者ではないし、一番最初に病を発見して研究していた科学者と弟子達は揃って感染発祥、悲惨な末路を辿ってしまったから。

治療法も原因もハッキリしていない。偶発的に完治したケースもあるが、何が要因になったかは分からずじまいであるという。

ただハッキリしている事は。発症すると強い疑心暗鬼と妄想に捕らわれ、性格が非常に攻撃的になり、場合によっては乖離性傷害を伴うこと。末期症状にまで至ってしまうと、あとは化け物になるか廃人になるか死亡するか。

様々な世界で確認されている、非常に恐ろしい病気。発症すると、脳内麻薬を多量分泌させる為か身体能力が飛躍的向上する事もあり、暴れる患者を抑えるのすらも骨の折れる作業となる。

- - 激戦地の最前線で戦う軍人ならともかく。普通に生活している一般人が発症する事は極めて稀だ。…だが。

例外が、ある。

この病を――人為的に発症させる事のできる物質が、ある世界には存在するのである。

ジェノバの遺伝思念。カオス因子。電子ドラッグ。その形態や形は様々で一定ではない。

聖也は鬼道に、ある物質の解析を依頼した。一つはエイリア学園の子供達の遺伝子。もう一つは神のアクア。

前者によって分かったのは、エイリア学園の、少なくともジェミニストームの子供達は普通の地球人である事。そして、後者は。

――神のアクアに含まれていた、五年前に落下した隕石の成分。それには人の潜在能力を限界まで引き出す効果があるらしい……と俺は鬼道に伝えた。

だが、実はその表現は正確ではない。隕石には、あの恐ろしい病、仮性ハートレス症候群を強制発祥させる事のできる成分が眠っていたのである。

それが改良されて神のアクアとして、照美達に使われていた。彼ら世宇子中が幻覚症状を呈して集団自殺を図ったのも、仮性ハートレス症候群のせいならば決して不自然な話ではない

そして今。おそらく神のアクアをさらに改良したと思しき“何か”がエイリア学園の子供達に使われている。このまま行けば、彼らにはおぞましい末路しか待っていないというのに。

――断言はできない。だが……影山がエイリアと繋がっており、神のアクアを握っていた事を考えれば……佐久間や源田にも同じものが使われていてもおかしくはない。

彼らは恐らく、神のアクアのようなものの力で強い疑心暗鬼にな

り、影山に従うよう洗脳されてしまっている。鬼道へ多少不信感を抱いていたのは確かだろう。だからこそ、そんな心の隙を影山に突かれてしまったのではないか。

このまま彼らが捕らわれていたら。辿る結末は世宇子と同じかもしれないし、もっと悲惨なものになってしまいかもしれない。

- - いや…。もっと前を辿れば影山も仮性ハートレス症候群を発症している恐れがある。

どうすればいい。どうすれば彼らを助ける事が出来るのだ。

悩んだ聖也の脳裏に、懐かしい声が蘇った。傷つきながらも未来を信じ続けていた、小さな“白き魔術師”の声が。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

- - 幸せになる魔法…か。

自分にも、使えるだろうか。あの時彼が使ってくれた魔法。いつも仲間達が無意識に使い続けている、最強最大の魔法が。人を幸せにできる白き魔法が。

- - いや。使えるかどうか、じゃない。使えるって信じなきゃ、駄目なんだ。

自分一人なら絶対無理だったけど。

自分の周りには今、こんなに素晴らしい仲間達がいる。

信じよう。信じるのだ。信じる者にこそ幸福は訪れると- -ある世界の“支配の魔術師”が言ったように。

奇跡を起こす。彼らを奈落から救い出せるものがあるとしたら、

それはサッカーでしか有り得ない。その為に来る事は、信じて全力で戦う事だ。

「…瞳子監督」

ミーティングにて。聖也は自らの考えを、口にする。

「今回の作戦：俺に任せていただけませんか」

誰もが驚いた顔で聖也を見る。聖也はメモ帳とペンを取り出し、手早く文字を書き込んだ。

我ながら字が綺麗な方でない事は自覚しているが、まあ、この大きさに書けば読めないという事は無いだろう。

「これが俺の希望です」

書いた紙を見せる。そこに記したのはフォーメーションとメンバー。

FW 染岡 照美 吹雪

MF 風丸 春奈 一之瀬 宮坂

DF 聖也 土門 塔子

GK 円堂

「ちょ…随分また変則的な…」

一之瀬が明らかに戸惑った声を上げる。

「染岡、アフロディ、吹雪のスリートップはまだいいとして…。風丸がMFで、入れ違いに聖也がDFって…。それも、試合経験のない音無と宮坂を揃って中盤起用だって？」

「そうだ」

「いくらなんでも無茶だ！ただでさえ慣れないフォーメーションだぞ。それも壁山と栗松を外したら、防御力が一気に下がるじゃないか」

「まあ、言いたい事は分かるが。黙って聞いてくれよ」

とんとん、と紙を叩いて聖也は説明する。

「今回の試合な。どうにも嫌な予感がすんだよ。佐久間の言った秘策ってヤツも気にかかる。ただでさえあいつのドリブルテクは厄介なんだ。なるべく奴にボールは回したくない。…そこでだ」

今回のスタメンを、足が速くて体力のあるメンツで固めたのである。視野の広く状況判断に長ける一之瀬と春奈を中央に置き、サイドを俊足の風丸と宮坂に任せる。

仮にボールを奪われても、ボールカット率の高い彼らならば、即座に対応し攻めに転じる事ができるだろう。そして彼らの足ならば佐久間相手でも十分振り切れる筈だ。

「んでもって。俺のノーコンは周知の事実。申し訳ないがまだ克服できてねえ。だったら客観的に見てディフェンスに集中させて、彗星シュートは前線にボールを上げる為だけに使った方が得策だろ」

スリートップにしたのは、攻めの人数を増やして、どこにすつ飛ぶか怪しい自分のロングシュートを拾って貰う為。そして早めに得点して勝負を決める為だ。

フォーメーション名はワイルドパーク。野生中の得意な3 - 4 - 3の陣形。

これにも当然意味がある。スピードのある面々でのフラット3。オフサイドトラップに引っ掛けて、敵の中央突破を足止めするのが狙いだ。壁山には悪いが、今回ばかりは足の遅い彼は作戦に向いて

いないのである。

それらを説明すると、イレブンも瞳子もどうにか納得したようだった。それでも、にわかじこみのフォーメーションでどこまで戦えるか、不安は隠しきれぬ様子である。

「…この作戦は、ただ勝つ為のものでもねえんだよ」

聖也は最後に、このメンバーを選んだ一番の理由を示した。

「一番の狙いは…佐久間と源田と、影山の眼を覚まさせる事だ。俺はそれを…照美と、春奈と、塔子。お前らに一番に任せたい。いや…お前らにしか、出来ないと思ってる」

名指しされた三人は驚いたようだが、次には真剣な顔で頷いた。

何故自分達なのか。彼らが一番よく分かっている筈だ。

彼らは誰より知り、理解している。影山のこと、あるいは鬼道のことを。一人は影山を救う事を願い、あとの二人は鬼道の最期の願いを叶える事を望んでいる。誰よりも、誰よりも強く。

「私、やります」

春奈が強い口調で言った。

「私には、お兄ちゃんのような作戦をたてる事も、お兄ちゃんのようなテクニクありません。でも…戦う為に、今此处にいるんです」

まだ、迷いはあるだろう。兄の死から立ち直るには時間がかかるだろう。

それでも彼女は精一杯前を向こうとして此处にいる。その脚で立

っている。

「幸せになる方法は分からなくても。これ以上…自分や誰かを不幸にしない方法なら、私にもできるかもしれない。お兄ちゃんなら間違いない…真つ先佐久間さん達を救いに行った筈ですから」

その強さが。どんな深い闇さえも照らし出す、一筋の光となる。

「僕も頑張ります！」

宮坂も、ぐつと拳を握って決意表明。

「これでも…風丸さんの役に立てるように、個人技なら結構練習してきたんです！それに元々僕、長距離ランナーですから。簡単にへばったりしませんよ！！」

「頼もしいじゃねえか宮坂。頼むぞ」

「はい！！」

実際見てみなければ断言できないが。多分彼のプレイスタイルは風丸とよく似たものだろう。多分攻撃より守備が向いてそうだ。ディフェンダーとして育てれば大きく化けるかもしれない。

自分も負けてられないな、と聖也は思う。サッカー歴は短いとはいえ、これでも最年長者だ。自分がチームの盾になってやらなければ。

コントロール音痴克服と一緒に、聖也はひそかにディフェンス技も練習してきた。今回自分は守備に集中しよう。どんな技が来ても、ゴールを割らせてなるものか。

「…佐久間にボールを渡さないだけじゃなくて…徹底的にマークをつけた方がいいと思う」

やや陰しい表情で考えこみ、土門が口を開く。彼は元々は帝国の

生徒。ひよつとしたら、佐久間の言う秘策にも心当たりがあるのだろうか。

尋ねると、まあな、と苦い顔で頷く土門。

「……禁じ技つてのがさ、あったんだ。影山が考えたシユートで。俺は使った事も教わった事もないから詳しく知らないけど…前、鬼道がその技を使った佐久間に滅茶苦茶キレてたんだ。二度と使うな
つて」

「そりやまた…何で？」

「なんか、身体にかかる負担が大きくて危ないらしい…としか。でも佐久間がその技を覚えてるのは間違いないんだ。もし本当に影山に洗脳されてとしたら…影山に命じられて、使っちゃうかもしれない」

禁じ技。一同は顔を見合わせる。響きだけで既に嫌な感じだ。ただ土門の話だけでは圧倒的にデータ不足である。

「どっちにせよ、多分向こうのチームのエースストライカーは佐久間だろうし。あいつにマークを…そうだな、基本的に二枚つけようか。一ノ瀬に吹雪、お前達が中心に頼む」

「了解」

二人は力強く頷いてくれる。

自分は鬼道のようなゲームメイク力はないけれど。彼の意志を継ぐ者達が支えてくれる、その事実そのものが大きな武器となる。

やってやろうじゃないか。救う為の戦いを、自分なりに精一杯。

- 見ててくれよ…鬼道。

天国でいるであろう彼に、恥じる事なき戦いを。稲妻の戦士達は、自らの平和へ向けて行列を成す。

始めよう。自分達の貴き聖戦を。

【1 - 14・威風堂々、宣戦布告】

「ごめんね…木暮君」

木暮の手を引いて歩きながら、春奈は謝罪を口にした。

「私のせいで試合…出られなくなっちゃって」

「…別に」

謝るなよ、と言いつつ木暮は不機嫌そうだ。彼も分かっているのである。ルーキーとはいえ、強力なディフェンス技を誇る彼が何故今回スタメンから外されてしまったのか。

体力ならピカイチ。すばしっこさでも他メンバーではけして劣らない。本来なら今回の作戦も適任であつた筈なのだ。

それができなくなつたのは、兄の死にショックを受けた春奈が、半ば八つ当たり気味に振るつた暴力のせい。おかげで木暮は左肩を痛めてしまった。これでは旋風陣が使えない。

幸い軽い捻挫であり、木暮の回復力から考えても、次かその次の試合には出れるだろうが。さすがに今回は無理がある。瞳子も聖也もそのへんはよく分かつていたのだろう。

もう一度ごめん、と呟き。春奈は木暮と共に目的地を目指す。目的…それは情報収集の為というべきか偵察と言ふべきか。真帝国学園の選手について少しでも知っておきたいが為の行動であつた。

潜水艦の薄暗い通路。その出口まで来た時である。

「何処行こうとしてんの、オマエ」

碧いフィールド。その光を背に、立っていた少年。モヒカン頭にフェイスペイント、ややつり上がった紅い眼。背はさほど大きくなく、顔もどちらかといえば童顔に分類されるだろう。

「今更逃げようつてのか？無理だぜ無理。なんたつて此処はもう海のど真ん中だからなあ？」

愉快そうに笑う少年の顔に、見覚えはない。しかし深緑色のユニフォームは、佐久間と源田が着ていたのと同じものだった。

「…雷門中のマネージャー兼MF、音無春奈と申します。こっちはDFの木暮君」

人に名を聞く時はまず自分から名乗るべし。一応常識だ。

「私達は、逃げませんよ。もう逃げるのも飽き飽きしてたところなんです。…もしかして、貴方が真帝国学園のキャプテンですか？」

「まあね」

肩を竦める。なんだろう。パツと見たかんじ、その変わった髪型とフェイスペイント以外は普通の子供となんら変わらないのに。少年の所作に、笑い方に、どこか歪なものを感じる。こんな違和感、影山相手にも感じた事はないというのに。

「俺、不動明王つてんの。ポジションはMFね」

不動、と名乗った少年はよろしくと手をひらひらさせる。

「あんたさあ、あの鬼道の妹なんだって？涙涙の兄妹愛話！源田と佐久間から聞いているぜ」ハハハ」

「…それが、何か？」

「何か、じゃねーだろ？ああ、あいつら言わなかったんだ？俺には散々愚痴ってくれたのによ」

ニイ、と眼を細めて春奈の顔を覗き込むように見てくる不動。

「あいつら、お前の事もすんげー恨んでるぜ？そりゃそうだよな。元はといや鬼道の奴は、お前の為だけに影山センセの虐待に耐えてきたし、恨まれる事もたくさんしてきたわけだし…。挙げ句雷門に

転校した理由の半分は、お前がいたからじゃね？って話だし…」

「どうして、それを…」

「知ってるかって？知りたいか？知りたいかあ？だったら教えねー」
「ははは、と意地の悪い笑い声を上げる不動。わざと春奈の不快感を煽って楽しんでいる。」

異様な雰囲気、木暮のしがみつく力が強くなった。春奈はその木暮を、護るように側に引き寄せる。かつて兄が自分にしてくれていたように。

「…貴方の言う事、正しいと思います」

自分はずっと護られる側だったけれど。いつも一番側で自分を護ってくれていた人は、もういないから。

「私のせいでお兄ちゃんはたくさん無茶をして…お兄ちゃんを想ってくれたたくさんの人を傷つけてしまつて。その果てがこんな結果…本当に恨まれるべきなのも憎まれるべきなのも、私なんだから分かってます」

護られるだけのお姫様は、もう卒業。

これからは自分が護る番だ。木暮の事も、大好きな仲間達の事も。

「だから私は、逃げないと決めました。全ての憎しみを受け止めて、立ち向かってみせると。そして…お兄ちゃんが護ろうとした人達を、今度は私が護る」

不動の、歪みを孕んだ眼に、真正面から向き合つ。怯えるなかれ。怯むなかれ。目を逸らすなかれ。耳を塞ぐなかれ。

立ちほだかる全てに立ち向かえ。
そうでなければ、幸福は手に入らない。

「佐久間と源田を救うつてのか？お前がかよ？」

はつと不動は鼻で笑ってみせる。

「今更何を言つたつてムダムダ。奴らは心から勝利を望んでいる。そして心からお前らの破滅を願っている。鬼道を騙くらかして奪い去ったお前らをな……！」

「仮にそうだとしても」

淀んだ光。不動の眼の奥に、春奈は喜悦とは別の感情を見た気がした。

それは多分――嫉妬。

愛するものがある者への、愛してくれる人を持つ者への。そして、抱く信念のある者への。

「憎しみでは、人は幸せになれないですよ。人を幸せにするのは、愛する事だけだから」

スツと少年の鼻先を指さす。

目を見開く不動に、春奈は堂々と宣言した。

「私達がそれを証明してみせる。そして……貴方さえも救ってみせます」

それは宣誓。

そして、宣戦布告。

「佐久間に源田だけじゃなく……この俺までも救うだつて……？思い上がってんじゃねえよ、忌々しい」

不快感も露わに、不動は言い放つ。

「いいぜ、やってみろやお嬢ちゃんよお！こっちはハナから手加減なんざしてやるつもりサラサラないんだからな！！」

「望むところです、不動さん」

本気でぶつかり合わなければ意味がない。それは佐久間と源田だけじゃない――恐らく何かしら訳ありの事情で集められただろう、不動達真帝国学園のメンバーにも言える事。

彼らの憎しみから逃げず、受け止める事ができたなら。自分も、自身の憎しみと悲しみを乗り越える事ができるかもしれない。

エゴでも結構。自己満足で結構。

「私達は、負けません」

春奈は自らに、誓いを立てる。

そして、試合が始まる。

ある者は再生を望み、ある者は終端を望み、ある者は愛を望み、ある者は奇跡を望む。そんな試合が。

ピッチに立つ真帝国学園。

それに対する雷門中。

――お前らだけは叩き潰さなきゃ気が済まない。

佐久間はギラつく目線で、最前線の三人――特に照美を見る。

データでは知っていたが、いざ目の前にすると忌々しくて仕方ない。何故自分達を地獄に叩きのめした世宇子のキャプテンが雷門にいるのだ？

こいつもどうせ、仲間を捨てたに決まっている。結局どこもこいつも一番大事なのは我が身。欲しいのは勝利を得る力だけ。

許せない。

なんなら負かすだけじゃなくて、自分達と同じように病院送りにしてやるうか。あの惨めさを味あわせてやればいい。爽快じゃないか。

ホイッスルが鳴る。

照美のキックオフ。ボールは染岡へ。

――確かあいつはドリブル系の必殺技が無かった筈……

しかも、どちらかといえば自己顕示欲が強く、ストライカーとして自らの見せ場を作りたがる。パスもあまり出したがらない。また感情がにプレイに出やすく、怒りに任せてスタンドプレイに出る事すらある――全て影山からのデータだ。

二人以上でチェックすれば潰せる可能性大。すぐ様、比得と日柄が囲みにかかる。

だが、まだ試合開始直後。さすがに冷静だったか。囲まれる前に、パスを出す染岡。その先には中盤から上がってきていた春奈がいる。

「させないわよ！」

そこに、走り込んで来たのが、真帝国学園のお姫様だ。勝ち気な女MF小鳥遊は、右足を思い切り振り上げ、突風を巻き起こす。

「アンタにだけは負けないんだから……！サイクロン……！」

小鳥遊の必殺技が炸裂。竜巻に巻き取られ、ボールが春奈から小鳥遊に渡る。

どうやら、小鳥遊は春奈に対抗心を抱いているらしい。そういえばあいつは、この真帝国メンバーでも異質な存在だったな、と思いつ出す。もしかしたら個人的に、春奈達に対して因縁でもあるのかもしれない。

そのまま持ち込む小鳥遊。まったく、女にひとつのが勿体無いくらいボールコントロールだ。その隙に佐久間も、雷門のディフェンスエリアまで上がっていく。

「ぶっ飛ばせ、佐久間！！」

パスが来た。うまい。佐久間がフリーになるいいタイミングだ。この位置ならすぐシュートに転じる事ができる。ところが。

ピイッ！

「オフサイド！」

ちっ、と舌打ちする佐久間。しまった、雷門はこれも得意だった。いつの間にか、雷門ディフェンスがセンター近くまで上がっている。「オフサイドトラップか……！忌々しい！！」

「駄目だぜ、ちゃんと周りによく見てなきゃ」

ニヤリ、と笑う塔子。安い挑発、乗る方が馬鹿だ。佐久間は落着け、と自らに暗示をかける。

そして冷静に状況分析。

奴らの今回のフォーメーションは、野生中の得意なワイルドパーク型と見て間違いない。このフォーメーションはフラット3が特徴。

怖いのはカウンターアタックだ。

また今回、データとはポジションの違う人間や、初めて見る選手も混じっている。慎重に、しかし手早く決めて、流れを掴むのが得策か。

…タイミングを図れ。あの技なら一発で流れを変える事ができる…！

オフサイドにより、雷門ボール。ボールは塔子から土門へ。そのまま上がるうとする土門に、向かって行くのが不動。いい気味だ、潰してやれ。佐久間は内心ほくそえむ。

土門飛鳥。そいつも忌々しい裏切り者だ。

「キラースライド！」

お株を奪われた形の土門が目を見開き、吹っ飛ばされる。そのまま呻いているのを見ると、そこそこダメージは受けたのかもしれない。

審判の笛は鳴らない。ボールを奪った不動は目で佐久間に合図する。

そついう事か。倒れていようと選手は選手。土門をゴールラインギリギリに吹き飛ばしたせいで、雷門は得意のオフサイドトラップが使えない。

上がる佐久間に、パスされるボール。

「やべえっ！」

聖也がディフェンスに戻るように言うが、間に合う筈もない。

…見せてやるよ。俺が得た力を…！

ピュウツと口笛を吹いた。地面から列を成して現れる真つ赤なペンギン達。鬼道が操っていた青いペンギンとは違う、もっと強力にして恐るべき生物爆弾。

宙へ舞い上がるペンギン達を、何処か呆然と見守る雷門。ニヤニヤと喜悅の笑みを浮かべる不動。

振り上げた佐久間の脚に、ペンギン達の鋭い嘴が食らいついた。走る激痛に歯を食いしばり、叫ぶ。

「皇帝ペンギン…ッ」

『あの技は絶対に使うな！何があっても、絶対にだ！！』

「一号ッ！！」

鬼道の、珍しく焦った声を思い出す。あの一度だけだった、自分が彼に本気でひっぱたかれたのは。

『あの技は危険すぎる。サッカーができなくなるだけじゃ済まない…』

- - 俺は使つよ、鬼道。あんたと同じ世界を見る為に。そして。

『命に関わるぞ、佐久間』

- - あんたの仇をとる為に。

【1 - 15・暴君の、飛べない鳥は】

雷門VS真帝国。凄まじい攻防。レーゼはマネージャー達の隣で、その全てを見ていた。

正直なところ。自分が此処にいていいのかも分からないし、此処にいるべきかも分からない。

記憶の無いレーゼに、彼らは真実をはぐらかすがごとく、大切なことは何一つ語ってはくれない。あの瞳子、という女性もだ。

それはとても不安なことだ。彼らに理由の分からない、疎ましさを孕んだような視線を向けられるたび、心臓の奥から突き上げられるような痛みが走った。

自分はきつと、彼らにとっても酷いことをしたのだ。なのにそれを覚えていないから、疎んじられている。それに試合に出れない自分は、彼らにとってお荷物以外の何者でもあるまい。

だけど。

『大丈夫だよ』

握ってくれた手は、温かった。元々記憶力は悪くないようで、キャラバンメンバーの名前は半日で全員覚えた。特に風丸、という名前の彼のことは、強く印象に残っている。

多分メンバーの中でも、自分と因縁深い関係だったのだろう。最初はレーゼがキャラバンに乗ることを一番に反対していたようだ。話の内容は聞こえなかったが、瞳子や他の仲間と口論していたのは知っている。

きつととてもとても恨まれている。それだけのことを、自分は彼らにしたに違いない。今でも全てを納得しきったわけじゃないだろう。だけど。

それでも手を握ってくれた。大丈夫だと、不安がるレーゼを励ま

してくれた。微笑みかけてくれた。まるで、兄のように。

- - ずっと昔…同じように私の手を引いてくれた人が、いた気がする。

きつと自分は、愛されて育ったのだ。だからよく似た温もりを知っている。与えられる感情の貴さが、分かる気がするのだろう。

- - 思い出したい。大切な人の顔を。名前を。

ぎゅっとお守り代わりのペンダントを握りしめる。

記憶を、取り戻したい。真実を知りたい。でなければ、自分は彼らにした“酷いこと”の償いもできやしない。何より、こうしてベ
ンチでただ見ているだけの無力さに、どうして耐えることができる
だろう。

『大丈夫ですよ、リュウさん』

太陽のように笑ってくれた宮坂。

『よろしくな。何かわかんねー事あったら遠慮なく聞けよ』

自分にも分け隔てなく接してくれた聖也。

『本当の貴方を取り戻す手伝いを、させて欲しいの』

そして、慈しむように抱きしめて - - 誓ってくれた瞳子。

此処は、自分の本当の居場所ではないのかもしれない。記憶を取り戻したその時、帰るべき場所はまったく違う何処かなのかもしれない。

それでも。レーゼは思う。

憎しみさえ抱きながらも、自分をキャラバンに置くことを許してくれた。一時的にはいえ居場所をくれた。まるで目隠しをされた子供のように足取りの覚束ない自分の手を引いて歩いてくれた。

この恩を、どうにかして返したい。自分にできることを探したい。出来ることなら。彼らと一緒に、戦いたい。

- - その為には、早く記憶を取り戻さなきゃ。

でも、どうやって？

「皇帝ペンギン…ッ」

レーゼが悶々と考えこんでいる間にも、試合は進んでいく。佐久間、という長い水色髪のFWにボールが渡ったようだ。

ぎよっとする。彼の召喚した紅いペンギン達が、彼の脹ら脛に次々の食らいついたからだ。

嫌な予感がする。それは本能的直感。

あの技は - - ヤバい。

「一号ッ! - - !」

その脚が、ボールに向けて振り下ろされ。雷門ゴールへと向かっていく。凄まじいシュートに加え、生物爆弾たる紅いペンギン達が追撃する。

が、肝心の円堂は完全に反応が出遅れてしまっていた。転倒した

土門に氣を取られていたせいだ。このタイミングでは、タメの長い大技は間に合わない。

「くそっ…ゴッドハンド!!」

円堂が繰り出す黄金の神の手。長い間、あらゆるシュートを封殺してきた伝説にも等しい技だと聞いている。

しかし、時代は変わるもの。過去の栄光もまたいずれは塗り替えられていく。それが世の理であり、必然だ。

ピシリ、と不吉な音がして。大いなる神の手に次々と亀裂が入っていく。皇帝ペンギン一号とゴッドハンド。その威力の差は歴然だった。

「ぐああっ!」

砕け散るゴッドハンド。吹き飛ばされる円堂。鋭く笛が鳴った。

1-0。真帝国の先取点。佐久間の必殺技は、鮮やかにゴールを決めてみせたのだ。

しかし。

「あ…あああっ!」

何かが、おかしい。シュートをまともにくらった円堂以上に、何故シュートを打った佐久間が苦しんでいるのだ？自らの両肩を抱くようにしてうずくまる佐久間の顔は、苦痛から脂汗を流している。

「やっぱり…そうだ。思い出した」

土門が足首を押さえながら、どうにか立ち上がる。立てるようだが、足を痛めたのかもしれない。顔色が悪い。

「皇帝ペンギン一号…鬼道が言ってた、絶対使っちゃいけない禁断技の一つ…」

「禁断技、だと？」

「ああ」

ふらつく土門を支えながら、聖也が聞き返す。

「自らの力を120%引き出す故、威力は充分だが…反動が半端じゃないって。元は影山が考案したシユートなんだけど…このままじゃ使い物にならないからな。鬼道が独自改良して、なんとか使える技にしようと頑張ってたんだ」

塔子が円堂に駆け寄っていくのが見える。彼も大分辛そうだ。足に力が入らないのか、太ももをパンパンと叩いている。

そして佐久間は、少しは激痛の波が引いてきたようだが、まだ膝をついて荒い息をしている。その威力と代償を推し量るには充分な光景。

「そうして出来上がったのが、皇帝ペンギン二号。威力は落ちるけど、三人で打つ事で試合で使えるようにしたんだ。それでも最初のキラーパス役は、一号ほどでなくとも身体にかなり負担がかかる…。帝国戦でも二回くらいしか打たなかっただろ？」

「らしいな。つっても俺あの試合病院送りになってたから、詳しくは知らねーんだけどよ」

「あ、悪い。聖也はそうだった」

そうなんですか、と隣にいた夏末に尋ねるレーゼ。夏末はフィールドを険しい表情で睨みつけたまま、頷く。

「ええ。…鬼道君はあの試合の途中、豪炎寺君と接触して足を痛めたわ。その後は一回打つのが限界だったみたいね…」

理解した。つまり、改良された二号ですら、連発するのは厳しい

技だったのである。ならば改良前の一号はどれだけ大きな負担がかかるか――。

「確か…そうだ、確かあの技を使えるのは二回が限界。もし三回目を打ったら…」

土門はそこまで話して、一端言葉を切る。顔色が悪いのは身体的ダメージのせいだけではあるまい。

「…サッカーが、できなくなる…だけじゃ済まないかもしれない。全身の筋肉にダメージを受けるんだ…呼吸筋や内蔵だってどうなるか…」

想像したくもない、とその顔が言っている。いや実際、想像しようにも出来ないのだろう。鬼道がその危険度を把握していたならば、仲間にその使用を許した筈はない。

重すぎる代償を背負う事は知っている。しかし、実際に三回使ってしまった人間を、少なくとも土門は見た事が無いに違いない。

そうだ。そんな技――自分だったら、絶対に仲間に使わせたりしない。

――どうしても使わなければならない場面になったとしたら。その時は私が使う。仲間達には、使わせるものか。

レーゼは考える。自分がチームのキャプテンだったら。自分が率いるチームであつたなら。

たとえ自らが身代わりになつてでも、仲間達には使わせたくない。そうだ、鬼道だって同じだったのではないか。だから改良したとはいえ皇帝ペンギン二号の最も負担のかかる役目を、自ら買って出たのではないか。

何故そんな思考を辿ったかは、レーザー自身にもよく分かっていない。なんせ記憶は戻っていないのだから。

確かなのはレーザーが、どうしようもない怒りを感じているという事だった。あんな技を平然と教え子に使わせている影山に。キャプテンでありながら、仲間のそんな姿を見て笑ってさえいる不動に。

・・・どうして、私はこんな場所に座ってるんだ。彼らは戦ってるのに、どうして。

どうしようもない、仕方ないで片付けたくない。瞳子は自分に、“雷門と戦ったチームにいた”事しか教えてくれなかったが。周りの話の流れから察するに、自分はきつと“エイリア”学園とかいう場所にいたのだ。つまり本来ならば敵だった筈。

彼らに義理立てする必要は、無いのかもしれない。でも。受けた恩を返さないなんて、そんなの自分自身が赦せない。

何より。自分は真実が、知りたい。真実を知る為に、戦いたい。このまま黙って見ているなんて、耐えられない。

「佐久間にボールを渡すな。渡つても、シュートエリアまでドリブルさせなければ、皇帝ペンギン一号を打たれずに済む」

試合は着々と進む。聖也の意見に、皆が頷く。

なるほど、あの技は脅威だが、ロングレンジのシュートでない事が唯一救いだ。こっちが前線でボールをキープできれば、佐久間にボールが渡る事があってもすぐシュートされる事はない。

それに今の一発だけで、佐久間はいぶダメージを負っている。強引に突破するのは難しい筈だ。

再び雷門ボール。照美はボールを風丸へと下げた。彼らがよく練習で使う、あの戦法で行くらしい。

「彗星シュート！」

風丸が、ロングシュートを放った。キラキラと光を放ちながら、青い弾道を描いてボールが真帝国のゴールへ向かう。

その間に上がっていく染岡、吹雪、照美のスリートップ。彗星シュートが防がれても、こぼれ球やパスボールは彼らが拾うという寸法だ。

けれど。

「秘策があるのは、佐久間だけだと思っな……」

ニヤリ、と源田が笑う。両手を広げ、シュートに構える。
まさか。

「ビーストフアング！」

野獣が吼えた。

獣の顎に模した源田の両手が、噛みつくようにボールに食らいつく。彗星シュートはいとも簡単に、キャッチされてしまった。

「くっ……ぐうっ！」

源田はボールを抱きかかえたまま、前のめりに膝をつく。痛みに呻く声。こちらからは見えないが、その顔は苦痛に歪んでいる事だろう。

「まさか……アレも禁断技か……!?」

「……ああ。ビーストフアングだ」

訪ねる一之瀬に、忌々しさをもはや隠しもしない土門。

「何でだよ……！禁断技の危険度はあいつらが一番よく知ってる筈だ

ろ…！なのに、どうして…っ」

場にそぐわない、明るい笑い声が聞こえた。不動だ。

「ハーハッハッハ！素晴らしい！！」

そのまま喜悦に歪んだ顔で、雷門イレブンを舐めるように見る。
どこかネジの外れてしまったような、そんな瞳。

「どうしてだって？決まってるだろ、勝ちたいからさ」

勝ちたいから、何でもやるというのか。それは本当に正しいのか。
それで彼らは満足なのか。

レーゼと同じように、雷門の仲間達も自問自答を繰り返している
事だろう。それでもまた笛は鳴るのだ。史上最低の試合を、続行す
る為に。

【1 - 16・エンドレス、ナイトメア】

勝ちたいから。その為なら禁断の技さえ、使う。たとえその身がどうなるうとも。

「勝利を、栄光を手にしたお前らには分からないさ」

佐久間は痛みに青ざめながらも、その綺麗な顔を喜悦に歪ませた。それは、不動が浮かべる狂った表情によく似通っていた。

「世界ってそういうもんだ。力こそ全て！敗者に言い分などない！弱ければ何の意味もないんだ…その志も誇りも踏みにじられて沈むだけ！！あの時の俺達のようにな…！」

風丸は黙ってその演説を聞く。聞かなければならない。何故だかそんな気がしていたのだ。

「力が無ければ全て失う…。皮肉にも、お前らがそれを教えてくれたんだぜ？弱かった俺達は全部失った。勝利も、栄光も、誇りも…
…鬼道もっ！！」

ズキリ、と痛む胸の奥。彼らの気持ち分かるなんて言う資格、雷門にいる自分には無いのだろうけど。

でも、分かる気はするのだ。弱い自分への絶望。力への渴望。それは護りたいものがあるからこそ。勝ち取りたいものがあるからこそ。

願いが、あるからこそ。

「だから俺達は力を手に入れたんだ…！強くなって…鬼道と同じ世

界を見る事ができたなら！俺達の全てを奪ったお前達から、その全てを奪い返す事ができる筈なんだ…っ！！」

頬が冷たい。ああ自分は、泣いてるんだ。風丸はそれを何処か遠くで見ている。

彼らが本当に欲しかったのは、力ではないのだ。力とはただ、そこに至るまでの手段に過ぎない。

願ったのはただ。ただ。

きっと此処にいる誰もと同じ事。そしてもう二度と叶わないと分かっている、切なくて悲しい夢。

聞こえた気がした。佐久間の、源田の、本当の声が。

…本当はただ。もう一度。

「君達の言う…力って何だい？」

今まで黙って話を聞いていた照美が、口を開く。

「禁断の技か？そんなものが真の力だとしても？…違うね。もし心からそう信じているのだとしたら…」

彼らしからぬ強い口調で。彼はハッキリと断言した。

まるで射抜くように。

「君達こそが弱者だ。かつて持っていた筈の強さすら捨てた君達に、真の勝利など永遠に訪れはしない…！！」

カッと佐久間の眼が見開かれる。その眼が血走り、激情でその手がわなわなと震える。

「本当の強さは…負けない事じゃない。何度負けても、立ち上がる

強さを言うんだ。負けた事のない奴なんか一人もいない。逃げ出した事のない人間だっていない」

「黙れよ……」

「雷門のみんなが、負けた事が一度も無いとでも？違う。彼らは君らの何倍も負けてきた。帝国に負け、ジェミニストームに負け、その他にもたくさん負けたから学んで、今此処にいる」

「黙れ……」

「なのに君達と来たらどうだ？ たった一度や二度負けただけであつさり諦めやがつて……。理不尽な現実を、彼らが嘆かなかつたとしても？敗北に、仲間の死に、彼らが立ち止まらなかったとでも言うつもりかい！？」

「黙れつて言つてるだろっ……」

「簡単に諦める奴が、真の勝者になどなれるものか！！力づくで奪い取れば、亡くした大切な物が戻ってくるとでも？ふざけるな！！そうやって一生眼を背けていればいい、臆病者っ！！」

「黙れええっ！！！」

制止の声が上がつたが、佐久間の耳には届かなかつたようだ。ポールを照美の胸元目掛けて思い切り蹴りつける。

「あうっ！！！」

「アフロデイ！」

華奢な身体が吹っ飛ばされる。審判の笛が鳴つた。ファール。当然だろう。それでもまだ怒りが治まらず、殴りかかろうとする彼を、さすがにマズいと思つてか源田と目座が二人がかりで止めている。

風丸が駆け寄ると、照美は咳き込みながらも身体を起こす。大丈夫だろうか。ただでさえ今の照美は万全な状態ではないというのに。

「お前こそ……力を手にする為なら何でもやる卑怯者じゃないか……！神のアクアを使つていたくせにっ！！！」

絶叫に近い声で叫ぶ佐久間。その佐久間に、照美は悲しげな眼差

しを向ける。

もしかしたら、重ねているのかもしれない。過去の自分の姿を、佐久間に。佐久間の言った事も事実ではあるのだ。照美は確にかつて、勝利を得る為に神のアクアというドラッグに頼っていた。

今の佐久間と同じ。力を得る為に。だけど。

「…そうだ。私は神のアクアを使い、サッカーを汚した。“だから” 雷門に敗れたんだ。そして…偽りの力を欲した罰を受け、たくさんの物を失った」

今の照美は知っている。

身体は丈夫でなくなっただかもしれない。あまりな大きな代償を支払ったかもしれない。

しかし。それでも間違いないことは。

「そして…敗北から這い上がったのさ。今の私は今の君達より、そしてあの頃の私よりずっと強い…！ 円堂君達の強さが、私に新たな力をくれたのだから…！」

彼は強くなった。

本当の強さを、手に入れたのだ。

「だったら見せてみるよアフロディ…俺達に勝つてなあ…！」

「勿論だよ…！」

立ち向かうその背に。

本物の天使の翼が、見えた気がした。

「行くぞ！」

雷門ボール。春奈のスローインで、ボールは風丸に。負けない。負けるものか。

風丸はキツと真帝国イレブンを見据える。自分は戦う。今この場所にある己の選択が正しい事を証明する為に。円堂や照美の強さこそ本物であると示す為に。

「疾風ダッシュ！」

必殺ドリブルで、竺和と郷院を抜き去る。

――考える。考えるんだ。

佐久間にボールを渡さないのはいい。しかし、問題は源田。よりによってGKの彼が禁断技を使ってくる。多分あの技も、連発すれば命に関わるシロモノだろう。

ビーストフアングを使わせたくない。皇帝ペンギン二号以上に未知の技なのだ。何発が限界かも分からない。次使えばもうアウトかもしれないのだ。

どうすればいい。どうすれば彼に技を使わせず点を入れる事が出来るのか。

そうこうしている間にも、敵ディフェンスが迫ってくる。弥谷と目座に挟まれそうになり、やむなく一ノ瀬にパスを出す。

「させるかよオ！」
「なっ！」

しまった。読まれていた。そのボールを、空中で不動に奪われてしまう。

「佐久間ちゃんにだけいいカッコさせらんないんでな……！見せてやるぜ……！」

そのままドリブルしていく不動。それが必殺技発動までの助走と気づいたのは、彼と小鳥遊と弥谷が縦一列に並んで走り出したから

だ。

ボールはまず弥谷へ。弥谷は走りながら、前に行く小鳥遊に向けて思い切りボールを蹴る。さらに小鳥遊がそのボールにさらに加速をつけて、前の不動へと――。

「まずいつロングシュートだ！ディフェンス！！」

塔子が素早く、シュートの軌道上へ走りよる。

不動がニヤリと笑った。止められるもんなら止めてみる、と言いたげに。

「これが究極のロングシュートだ……！くらえ、トリプルブーストオオ！！」

弥谷、小遊鳥が加速させたボールに、さらに不動がパワーを込めて蹴りつける。その威力たるや、とてもロングレンジシュートとは思えない。

まるで弾丸のように強烈な必殺シュートが、雷門ゴールに襲いかかる。

「させるかよ！ザ・タワー！！」

塔子の足元から、天高く聳える塔。その岩壁に激突するボール。ビシリ、と罫が入っていく塔。

「ぐあっ……！！」

シュートの勢いの方が勝っていた。崩れ落ちるタワー。悲鳴を上げて地面に墜落する塔子。

それでも多少の勢いは殺げた筈だが。円堂はキャッチしようとし

て――身体に力が入らなかつたらしい。ボールを取りこぼしてしま
う。弾かれたボールは雷門ゴールへ――。

「ゴール――真帝国学園、追加点――これで試合は2 - 0……真帝国
リードを広げました――！」

いつからいたのやら、角馬が興奮気味に実況中継する。

「ごめんみんな――！シュート、止められなかった――！！」

「円堂――」

円堂の手が震えている。さっきの皇帝ペンギン一号をくらった影
響だ。まだダメージが抜けきっていないらしい。

まずい。これ以上佐久間にあのシュートを打たれたら。佐久間だ
けでなく円堂も立っていらなくなるかもしれない。

「こっちのシュートチャンスを増やして、なるべく前線でボールを
キープし続けるしかない」

――ノ瀬が険しい顔で言う。

「問題は肝心のシュートの仕方。源田にビーストフアングを使わせ
ないでシュートするには、どうすれば――」

「俺に任せな」

「――！」

自信満々で名乗りを上げたのは吹雪。いつものオフエンス時のよ
うに、口調が荒々しくなり、表情が勝ち気なものに変わっている。

「奴が技を出す暇もねえくらい、凄いシュートをブチかましてやる。
あのビーストフアングとやらはマジン・ザ・ハンド並にタメが必要
みたいだからな。ある程度スピードのあるボールには対応しきれな
い筈だぜ」

「あ――！！」

その手があつたか。風丸が思い出したのは、初めてジェミニスト

ームと戦った試合のことだ。

あの時。円堂のマジン・ザ・ハンドは今よりずっと発動に時間がかかっていた。そのせいで奴らのノーマルシュートにも反応できずに、技を出す暇もなくパカパカと点を入れられてしまったのだ。

あの時ジェミニがやったのと同じ手を使えるなら。吹雪のスピードならそれも可能かもしれない。

「俺も協力するぜ！」

染岡が吹雪の肩を叩いて、力強く拳を握る。吹雪も笑顔で頷いている。本当に、いつの間にあんなに仲良しになったのやら。染岡なんてついこの間まで、あんなに吹雪を邪険にしていたというのに。

「佐久間のマークは任せろ」

一ノ瀬が決意の表情で言う。

「サッカーが出来ない辛さは、俺が一番よく分かってる。目の前でそんな最悪な光景は見たくない」

「一之瀬……」

かつて事故で生死の縁をさまよった一之瀬。彼にしか分からない事もあるのだろう。

もしこのまま佐久間と源田に技を使わせたら。いや、仮に自分達がこの試合を放棄したとしても。影山の支配下に置かれている以上、彼らの結末はきっと同じ。

いずれ技の代償で、重すぎる罰を受けるだろう。二度とサッカーのできない身体になるか、死ぬか。それは幼い頃一之瀬が受けた痛みと、同じ。

「佐久間と、あと不動にもボールを回さないようにしよう。ディフェンス、頼むぞ」

「おうっ！もう一点も入れさせねえ！！」

聖也がぐつと拳を掲げる。

作戦は決まった。あとはタイミングを図るのみ。

笛が鳴る。今度は染岡がキックオフ。ボールは照美へ。

「見せてあげよう…生まれ変わった私達の力を！」

さっき佐久間から受けたダメージは回復していない筈だ。しかし向かって来る比得と佐久間に、照美は気丈にも言い放つ。

「そして教えてあげるよ…本当の強さとは、何の代価もなしに得られるものではないという事を！」

そうだ。彼は言っていた。雷門の強さ努力を代価に得た本当の強さだと。

信じたい。風丸は強く強く願う。

無力さを感じる事があっても。敗北に這い蹲る事が何度あろうと。ただの力、ではない。今の自分達が得たものこそ何より尊い“強さ”であるという事を。

【1-17・君の歌、僕の祈り】

佐久間と源田の事を、塔子はよく知らない。それでも彼らの事を、どれだけ鬼道が大切に想っていたかは知っている。

話の中で。帝国メンバーの中でも特に名前の出たのがその二人。彼らの事を鬼道は懐かしそうに、そしてどこか愛おしそうに話してくれたものだ。

『佐久間のテクニックは、俺も見習うべき点が多い。あいつはいつも縁の下の力持ちに甘んじてくれるが…玄人が見れば分かる。あいつは、日の目を見ずに終わるにはあまりに惜しい素材だ』

ちよつと真面目すぎて、ストレス貯めやすいのが難点だが。彼がいなければ帝国は成り立たなかっただろうと鬼道は語る。自分が気持ちで負けそうな時、背中を押してくれるのが彼なのだと。

『源田の身長とパワーは、大きな武器になる。高校に上がっても通用するだろう。正直、GK以外のポジションも充分にこなせるんじゃないかな。奴が後ろでゴールを護ってくれるから、俺達は振り返らず走る事ができるんだ』

やや天然すぎると、聖也ほどでないが方向音痴なのが困りものだけれど。みんなの相談役にもなってくれるし、下級生にも慕われている。

本来なら彼のような人間がキャプテンを務めるべきだったのではないか、とすら鬼道は言っていた。

『二人とも、帝国の副将と言うべき、なくてはならない存在だ。本当に努力家で、皆の嫌がる仕事も進んで買って出る。仲間思いで、

そんなあいつらに何度救われたか知れない』

語る鬼道は、本当に優しい眼をしていた。ゴッグルごしでも分かる、慈しむ眼。心から大切な者を想う者の眼であった。

『あいつらがいたから。帝国のみんながいたから。…塔子とも春奈とも離れていても…頑張つて来れたんだと思う』

そんな鬼道を見るのはちょっとだけ寂しいけれど、でも凄く嬉しくて。

大好きな人が大好きな人達に、自分もいつか会ってみたい。彼らの事も、自分の知らない鬼道の事もたくさん知りたい。塔子はそう思ったのである。

『あいつらには感謝してる。同時に…申し訳ないとも。あいつらのこと、俺の分も頑張らなきゃって…本気で苦労してると思うんだ。勝手な事をした。恨まれていても、仕方ない』

そんな事ないよ、と言いたかった。しかしそれが彼にとって慰めにならない事は、塔子にもよく分かっている。

鬼道は頻繁に、帝国の仲間達と連絡を取り合っていたようだ。フットボールフロンティア開催時には逢う事もできたが、エイリアが攻めて来てからは難しくなってしまうている。

その代わりを埋めるように、彼らへの電話やメールの数が増えていった。本当は心配でたまらなかったのだろう。雷門の仲間達にはそんな素振りを見せずとも。

多分、知っていたのは塔子だけ。あるいは春奈も知っていたかもしれないが。

鬼道は雷門の作戦指揮に携わる傍ら、帝国の事をずっと気にかけて続いていた。

- - なあ佐久間に源田。あんた達は確かに、すつごく悩んでたのかもしれない。

憎しみと悲しみと、怒りと恨みと。暗い感情に支配された彼らの眼を見て、塔子は泣きたい気持ちになる。

- - だけど…鬼道はそんなあんた達の事、ずっと気にかけてたし、気付いてた。悩んでたのが自分達だけだとも思ったのかよ？

雷門イレブンが鬼道に影響を与えたのは事実だろう。その結果影山と決別するに至り、雷門へと転校した、それも確かな事かもしれない。

だけど。鬼道が帝国を、佐久間や源田を捨てたなんて - - そんな事絶対ない。あるわけない。捨てた存在に対して、ただの同情だけであんなに心配して気遣う筈ない。何より。

- - 鬼道、帰ろうとしてたんだよ？

視界が滲む。まだ泣くには早すぎるというのに。心臓がバクバクと煩い。眼も、耳も、胸も、焼け焦げてしまいそうなほど熱い。

- - あんた達の元に、帰ろうとしてた。帰りたがってたんだよ。帰るつもりだったんだよ。

エイリアとの戦いが終わったら、帝国に帰るつもりでいたのだ。それなのに。

帰れなくなってしまった。愛する仲間達の元へは、もう二度と。

「なのは何でっ…何でそれが肝心のあんた達に伝わってないんだよオオオッ!!」

叫ぶ声。嘆く声。灰色の空の下、フィールドに虚しく響き渡る。照美が小さく、罵る声が聞こえた気がした。塔子を、でも佐久間や源田を、でもなく。この残酷な運命を、シナリオを強いた誰かを。彼がきつと一番よく知っているのだろう。この世界に、神などいないという事を。

ドリブルで突き進む照美に、迫っていく佐久間と比得のダブルFW。照美は立ち止まり、その右手を高く掲げ、指を鳴らした。

「ヘブンズタイム!!」

女神の指先が、時間すらも操る。塔子の眼には、彼が瞬間移動したようにしか見えなかった。啞然とする佐久間と比得の二人を背に少年は妖艶に微笑む。

次の瞬間、巻き起こった旋風が、二人を吹き飛ばしていた。

染岡と吹雪が両サイドを駆け上がっていく。照美は弥谷と日柄を充分に引きつけてから、吹雪にパスを出した。

タイミングは完璧に見えた。だがここでまたしても立ちふさがったのが――彼女。

「ざまあないね!ハハハッ!!」

吹雪へのパスを見事にカットして、小鳥遊が高笑う。そのまま雷門陣営を、右サイドから突破しにかかる。

この展開はよろしくない。既にヘブンズタイムのダメージから復帰した佐久間が前線に走っている。パスを通されたらそのままシュートを決められてしまう。

「此処は通しませんよ…！」

その時、立ちふさがったのは意外な人物。宮坂がその愛らしい顔をキリリと引き締めて、上がって来る小鳥遊を睨みつける。

「音無さん、行くよ！」

「はいっ…！」

春奈と並んで、真っ直ぐ小鳥遊に向かっていく。ジャンプする宮坂、その脚を受け止める春奈。そのまま春奈は、思いつきり宮坂を空への放り投げる。

「これが僕達の必殺技…！」

宮坂の脚にオーラが集まる。

「シューティングスター…！」

その名のごとく。流れ星のように、小鳥遊へと墜落していく。凄まじい蹴りの一撃に、なすすべなく吹っ飛ばされる小鳥遊。

「凄え！あいつら、あんな必殺技いつの間に…！」

円堂が目をキラキラさせて叫ぶ。本当に、いつの間にあんなコンビネーション技を練習したのか。二人とも試合参加は今回初めてだというのに。

ボールは宮坂へ。彼がこちらを向く。眼があって…その意図を悟る。

「…いいじゃん、やってみようじゃないか。」

涙を拭って、キッと前を向く。宮坂からのパスを受け、塔子にボ

ールが渡る。

自分の魂を、心を、祈りを。このボールに込めて放つ。

- 鬼道と…あたし達の想い！あんた達にも届け…っ！

くるくると光を纏い、回転する。七色のパワーを右足にこめて、塔子は祈りのロングシュートを放った。

「レインボーループ！！」

虹の橋を描いて、ボールは真っ直ぐ敵陣へと突っ込んでいく。

「はっ…！やつぱりお前ら薄情者だな！！源田がどうなっても構わないってか！！」

嘲笑する不動。彼は気付いていないようだ。塔子が何の為にレインボーループを放ったかを。

教えてやる義理もない。どうせすぐ分かる事だ。

「染岡！吹雪！！いけええっ！！」

ロングシュートには、ゴールを決める為だけでなく。ボールを前線に運ぶという役割もあるのだ。奴らは忘れていたらしい。雷門お得意の戦法がどんなものであるのかを。

レインボーループはゴールではなく、左サイドを駆け上がったいた染岡の元へ向かう。

嘶くワイバーン。染岡がシュートを打つと、青い光を纏った竜が大きく羽ばたいた。

「ワイバーンクラッシュか！？」

源田が両手を突き出し、ビーストフアングを出そうとして――止まる。染岡のワイバーンクラッシュですら、ゴールには向かって来ない。

ボールの向かう先にいたのは、吹雪。あれはシュートではなく吹雪へのパスだったと、彼らが気付いた時にはもう遅い。吹雪のスピードは、誰もが知るところなのだから。

吹き荒れる雪嵐。吹雪と染岡、二人が同時にニヤリと笑った。

「くらえっ！俺達二人の必殺シュート……」

「ワイバーンブリザードッ！！」

雪風を纏った飛竜の一撃。その速さとパワーに、源田は反応できない。ビーストフアングを出せないまま、その顔のすぐ横にシュートが突き刺さった。

「よっしやあぁっ！！」

ゴール！これで1-2、あと一点で追いつける。ここで前半終了の笛。攻守が目まぐるしく変わる大接戦だ。

「おい！聞こえてんだろ、影山！！」

どうせあの男は、全ての会話も映像も、奥の部屋でモニターしている筈だ。塔子はビシリ、と見つけたカメラの一つに指を突き出す。

「いつまで猿山の大将やってる気だ？降りて来い影山！！モニターごしじゃなくて……あんたのその眼で、あたし達全員の覚悟を見届ける。それともそんな度胸も無いほど、臆病者なのか？」

間近で見る。その眼で焼き付ける。
自分達の想いを。自分達の魂を。

「あんたのサッカーへの恨みは、鬼道への執着は、その程度だって
いうのかよ!？」

そんな筈ない。
だって自分は知っている。鬼道は。影山は。本当はきっと。

「言つに事欠いてこの私を…臆病者呼ばわりとは…いい度胸だ、財
前塔子」

かつん、と革靴が地面を叩く音がした。それは断続的に響き、こ
ちらに近付いてくる。

悪寒を感じて、塔子は身震いした。闇の出口からゆっくりと姿を
現す男。影山に対し、塔子は真正面からそのサングラスの奥を睨み
つける。

本当は、逢つたらそのまま一発、顔面にお見舞いしてやりたかつ
た。殴るだけで気が済まなくなるのは明白なので、どうにか湧き上
がる怒りを押さえ込もうと必死になったが。

いや、いずれにせよ自分は殴れなかったかもしれない。

「この距離だつてのに…なんて威圧感だ…この野郎。」

帝国学園サッカー部の元総帥。

世宇子中サッカー部の元総帥。

中学サッカー協会の副会長。

そして…サッカーへの憎悪を糧とする、“黒き魔術師”。

「…間近で見る、と言つたな。いいだろう」

影山は、真帝国側のベンチの前に立ち、リヤリと笑つ。

「この場所から見てやろう。雷門の滅びの瞬間をな」

「はっ…残念だけでもう、誰も滅びやしないよ」

畏れるな。怯むな。

そのプレッシャーを前に、吞まれそうになる己を叱咤して、塔子は胸を張る。

「あなたの破滅のサッカーは此処までだ。あたし達が終わらせてやる。そして教えてやるよ、あなたにも、佐久間達にも!!」

誰かを憎む事は罪ではない。己の悲運を嘆く事は悪ではない。そうやって逃げた事のない人間なんて、ただ一人としていない。しかし。

「憎しみは誰も幸せになんかしない。サッカーを憎むあなた達に、サッカーを愛するあたし達が負ける筈ないってことをね!!」

綺麗事も、貫き通せば真実となる。

自分達が証明しよう。

白き魔法は、黒き魔法に勝る事を。

【1 - 18・ルナティック、パーティー】

「とりあえずこれで…一点は返したわけだけど」

瞳子の表情は堅い。誰もが険しい顔でその話を聞いている。

「後半は恐らく、吹雪君も染岡君も徹底的にマークされるわ。一つの攻めのパターンしか無いんじゃない？簡単に読まれて突破される」

そりゃそうだ。春奈はため息をついた。さっきの攻撃で、染岡と吹雪の連携技がうまく決まれば、源田に技を出させず得点できるのが分かった。だが、それは向こうも同じ。

あの攻撃は、吹雪と染岡が両方フリーになって初めて使える技と言える。徹底的にマークされたら、技を仕えても発動スピードが落ちるだろう。

それではまったく意味がない。源田にビーストフアングを使われちゃう。

「どうにかして探すしかない…奴らから得点するもう一つの方法を！」

「ああ」

円堂の言葉に皆が頷く。

こんな時、兄が生きていたら。雷門の頭脳とも言うべき鬼道有人がこの場にいたら。きっと何か、有効な手を考えてくれただろうに。

…駄目だ。お兄ちゃんにもう頼らないって…強くなるって決めたじゃない！

弱気になりそうになる思考を、首を振って振り払う。自分がこんなだから、いつも兄に心配かけて、死ぬ間際まで安心させてあげ

られなくて。

- - 考える。考えるんだ、音無春奈。

此処にはもう、鬼道はいない。ならば妹の自分が彼の代わりに、作戦を考えるのだ。兄ならどうするか、じゃない。自分ならどうするか。

それが出来ないようでは自分に、ピッチに立つ資格など、ない。

「佐久間と不動にボールを渡さない。かつ源田に技を出させない。
…なんだこの厄介な状況。まったくもー」

めんどくせーっ！と頭を掻く土門。その彼はさっき、不動のキラースライドをまともにくらっていたが、脚は大丈夫だろうか。

とにかく、もうじきハーフタイムが終わってしまう。何も思いついてないがやるしかない。

あっちは、こちらが佐久間と源田の身体を気遣って満足に戦えないでいる事に、とつくに気付いている筈だ。

もし自分が不動達ならどんな作戦を立てるだろう？どんな風に攻めて来るだろう？それを予測できれば隙はある筈。

- - 多分…油断する筈。どうせシュートコースが空いても、吹雪さん達以外なら打って来ないだろう…って。

そしてこれは確実な事だが、こちらは佐久間と不動にマークを集中させる分、他選手の突破を許しやすくなるだろう。特にあの小鳥遊忍というMFが厄介だ。彼女の動きにはキレがあるし、ディフェンス能力も高い。

けれど不動と佐久間以外にマンマークをつける余裕は、ハッキリ言って無い。ただでさえ吹雪を攻撃に割けば、佐久間のマークが甘

くなるのだ。

ここはディフェンス陣営を信じるしかない。塔子達ならきつと敵の中央突破を防いでくれる筈だ。

・向こうは必ず、こっちの守備の手薄になった場所を突いて、かつ最後は佐久間さんのシュートで決めたがる筈。…だったら。

「行くぞみんな、後半だ！」

「おう！」

後半、開始。向こうのキックオフからスタートだ。攻め上がる比得を、照美が止めにかかる。

「ヒッヒッヒ…！」

ピエロのような比得の顔が、凶悪な笑みの形に歪む。まるでパスをするかのように、ボールを照美の胸元へ飛ばした。

そして驚く照美に向けて、ボールの上から強烈なキックを見舞う。

「ジャッジスルー…！」

悲鳴を上げて弾き飛ばされる照美。

「ちょ…いいのかよあんな技！？」

風丸が抗議の声を上げるが、審判の笛は鳴らない。そのまま持ち込む比得。危機感を覚え、春奈と一ノ瀬は二人がかりで止めに行くが、易々と囲まれてはくれない。一之瀬がフレイムダンスの構えをとるより先に、ボールはフリーで上がってきていた小鳥遊にパスされてしまう。

「行かせるかつ!!」

今度は土門が止めに行く。けれど土門が技を出すより先に、小鳥遊がモーシヨンに入っていた。両手を広げて走り込む彼女の周りに、まがましい紫色の霧が噴き出す。

「ヤバいつ…逃げろ、土門!」

塔子が叫ぶが、遅かった。必殺技、毒霧の術。猛毒の霧にまかれて、土門が激しく咳き込み、倒れる。そこを悠々と走り抜けていく小鳥遊。

しまった。既にシュートの射程圏…!

「吹っ飛びなっ! バックトルネード!!」

小鳥遊はくるくる回転しながら、天高く跳躍する。木戸川清修の、宗方三兄弟が得意だったのと同じ必殺技だ。

豪炎寺のファイアトルネードとは逆回転。青白い炎を纏うシュートが、一気に雷門ゴールへと向かう。

「悪いが、もう一点もやらせねえぜ!!」

そこへ聖也が走り込んで来た。彼は勢いよく両の掌を地面に叩きつける。すると、彼の周りに紅い魔法陣のようなものが浮かび上がった。

何だ、あれは。今まで見た事もない、必殺技だ。

聖也はそのまま大きく跳躍する。そして掲げた両手を一気に振り下ろした。

「アポカリプス!!」

魔法陣から紅い光の柱が立ち上り、小鳥遊のバクトルネードの軌道を塞いだ。シュートは光の柱に阻まれる。

シュートブロック成功。聖也の力によって弾き飛ばされたボールは、一ノ瀬の方へ。
ところが。

「ハハハッ！残念だったなあ！？」

いつの間に。不動がピツタリと一之瀬をマークしていた。パスは不動にカットされてしまう。

「お前ら、ワンパターンだぜえ？流れを変えたい時、好手を切り替える時：高い確率で一之瀬にボールを集める。バレバレなんだよ！」

気付いていなかった盲点。春奈は愕然とする。言われてみれば、確かに。雷門の誰もが、新しい戦法で行くと決めたタイミングで、一之瀬か――鬼道の名前を呼びがちだ。

鬼道がない今。攻守ともに主軸は一之瀬となっている。パターンを読まれてしまうのも必然だ。

そして最悪な事には。先程の小鳥遊のシュートと不動に気を取られたせいで――肝心の、佐久間のマークが一時的に甘くなってしまうのである。

「し、しまった！」

不動のパスが、フリーで佐久間に渡ってしまった。佐久間がニヤリ、と笑みを浮かべる。

「皇帝ペンギン……」

飛び立つ紅い色のペンギン達。それが再び佐久間の脹ら脛に鋭くかじりつく。

「一号ッ!!」

強烈なシュートが、雷門ゴールへの走っていく。

「危ないっ!!」

「円堂君、逃げてっ!!」

マネージャー達の悲鳴が上がる。当たりどころが悪ければ円堂も命に関わる――そんな一撃。しかし円堂は怯む事なく、マジン・ザ・ハンドの体勢をとる。

しかし、果たしてマジンだけで止めきれぬのか――。

「行かせるかよっ!!」

「もう点はやらねえっ!!」

そこに――なんと最前線にいた筈の吹雪と染岡が滑り込んできた。ギリギリのタイミングだったが、彼らは二人がかりでボールに向けて脚を突き出す。

「おおおおっ!!」

みしり、と嫌な音がした。吹雪と染岡の顔が苦痛に歪み――次の瞬間、派手に吹き飛ばされていた。

二人がかりでも止められないなんて、なんて馬鹿げた威力なのか。やや勢いの弱まったボールに、円堂がその手を力強く突き出す。

「マジン・ザ・ハンドオオ!!」

吼える魔神。巨大にして強大な魔神の腕が、がっしりとボールをキャッチしていた。

三人がかりとなつてしまつたが、どうにか皇帝ペンギン一号を止められたようだ。しかしその代償は大きい。深刻な怪我には至らなかったようだが、円堂も吹雪も染岡も息が上がっている。さらに、彼らよりもダメージが大きいのは――。

「つ、次はっ…決める…っ!!」

膝をつき、ぜえぜえと喘ぐ佐久間。呼吸音もおかしくなつてきている。もう限界に近いのは明白。一発ですら酷い負荷のかかるあの技を、もう二発も打ってしまったのだ。

あと一発。あと一発打ってしまったら彼は――。

――どうすればいいの…？どうすれば…っ!!

もう嫌だ。これ以上、誰かが死ぬのを見るのは。誰かが傷つくのを見るのはもう、たくさんだ！

疲労をおして、吹雪と染岡が前線に戻っていく。時計は止まっていない。円堂のパス。ボールは塔子へと。

「もう誰も…死なせるもんかつ!!」

スライディングに來た日柄を、ジャンプでかわす塔子。さらに不動と比得を十分に引きつけた上で、パス。うまい。

ボールを受け取った風丸が攻め上がっていく。このままシュートを決めるわけにはいかない――彼も分かっている、考えている筈だ。考えつくまで時間を稼ぐしかない事も。

しかしもう、無駄に時間をかけている余裕が無いのも確かだ。

「疾風ダッシュ!!」

DFの帯屋を、その身軽さでかわす風丸。

「スピードで…負けるものかつ!!」

彼が叫んだ、その言葉を聞いた時だった。春奈は思わず、あつと叫んでいた。

スピード。疾風。かわす。

…そうか…その手があった!

シュート可能エリアに入った。しかし風丸は、身体は身軽でも吹雪や染岡のような弾丸シュートは打てない。つまり、源田にビーストフアングを使わせてしまう。

それを見越してか、不動はピンチにも関わらず余裕の表情だ。どうせ打てやしないとタカをくくり、わざと挑発してシュートコースを空けさせる。とことんイヤミな奴だ。

いいだろう。その余裕、後悔させてやろうじゃないか。

「風丸先輩!一端ボールを外へ出して下さい!」

「えっ!?!」

風丸が驚いてこちらを見る。春奈は続ける。

「時計を止めて欲しいんです!お願いします!!」

さらに頼みこむ。訳があるのを悟ったのだろう。風丸は戸惑いながらも、ボールをタッチラインの外へ出した。審判の笛が鳴る。

チャンスだったのに何故わざわざ真帝国ボールにしたのか。ヤケになったか、と鼻で笑う不動と小鳥遊を、春奈は横目で見る。

まだ分かってないらしい。自分達雷門が、世界一諦めの悪い集団だということが。そうやって自分達は勝ち抜いてきたという事が。

「言う通りにしたぞ、音無」

さあ訳を聞かせてもらおうか、という顔の風丸。他のメンバーも戸惑い顔で春奈を見ている。

「源田さんから、技を使わず点をとるもう一つの方法…見つけました」

「何だって!？」

「でも、シュートを決めるのは私ではありません。私に出来るのは、真帝国学園からボールを奪って、前線に繋ぐ事だけです」

これは、自分では無理なのだ。

いや。誰か一人の力では、けして無理なこと。

「これは、全員の力なくしては成功しない作戦です。どうか私に、力を貸して下さい!」

自分は、鬼道有人にはなれない。

自分は、音無春奈にしかない。

だからこそ、自分は自分のやり方でチームを護る。

- - お兄ちゃん、私、頑張るよ。

「分かった。信じるよ、音無」

「キャプテン…!」

円堂の言葉に、みんなが頷いてくれた。春奈はまた涙が滲みそうになって、慌てて堪える。

泣き虫は、卒業だ。自分は音無春奈。雷門のMF。

- - そして、鬼道有人の妹!

その誇りを胸に、少女はフィールドで戦士になる。

【1-19・吹き荒れし、神風の詩】

目の前の佐久間が、あからさまに驚いた顔をした。

そりゃそうだろうな、と宮坂は思う。だが苦笑するだけの余裕は無かった。なんせ今、自分と風丸は最もセンターに近い場所――2トップの位置に立ってるのだから。

『フォーメーションを変えます。ワイルドパークから、デスゾーンへ』

春奈はメモに書きながら、自分達に説明した。デスゾーン。それは帝国学園が得意としていたフォーメーションだという。

『メンバーとポジションも大幅変更です。でないと対応できませんから』

彼女が提案したのは以下のメンバーとフォーメーション。

FW	風丸	宮坂
MF	吹雪	一ノ瀬
		染岡
	緑川	照美
DF	春奈	
	塔子	聖也

この陣型には誰もが度肝を抜かれた。

DFの風丸と宮坂をツートップに起用。攻撃が本領である筈の吹雪と染岡と照美をMFの位置まで下げる。さらに春奈はディフェンスの最後方へ。

いや、最大の問題はそれ以上に。

『緑川… ってお前、レーゼを試合に出す気かよ!?!』

『はい』

『はいって…』

外された土門が、明らかに困惑した顔で春奈に問う。一番驚いているのはレーゼ本人のようだが。

そのレーゼの前に春奈は立ち、静かに言った。

『私、気付いてました。貴方がずっと…一人で練習してた事。悔しそうな顔でフィールドを見てた事。貴方なりに…真実を取り戻そうと頑張ってる事』

試合では、レーゼの顔を隠すパーカーは来ていけない。その代わりに春奈が差し出したのは…鬼道の身につけていた、予備の青いマントだった。

『レイさん。どうか私達に…力を貸して下さい。貴方の力が、必要なんです』

兄の形見を、かつての敵に貸す。それがどれほどの覚悟であり決意であったか。きっとレーゼにもそれが伝わったのだろう。彼はほんの少しだけ俯いて…やがて顔を上げた。

『…私は…何も覚えてないけど。貴方達の敵だった。そうなのだろう?。』

なのに、構わないのか、と。暗にそう問うレーゼに、円堂が笑いかけた。

何を遠慮する必要があるんだ、と言いたげに。

『約束しただろ!一緒にサッカーやろうって!!今のお前は悪い奴

なんかじゃない。目を見れば分かる。昨日の敵は今日の味方だ！！」

その言葉に。レーゼは切なげに眼を細めて、小さく、ありがとう、と言った。

『私にも…ピッチに立つ資格があるというのなら』

春奈が差し出したマントに、少年の白い腕が伸びた。

『私は…貴方達の力になりたい』

その眼は嘘を言っていない。心からの決意は、誰にも偽れない。誰かの力になる為に、決意した戦う意志。宮坂には分かる気がした。自分もまた護りたいものがあつて此処に、いる。

春奈は作戦を続ける。

フォーメーションを変えた理由の一つは、土門の負ったダメージの大きさ見越しての事だった。守りの要である彼を代えるのは正直手痛い、このまま無理をさせる方がもっと怖い。

そして土門を下げると、フラット3を機能させるのが難しくなってくる。ワイルドパークのまま続けるのはリスクの方がデカい。

またFW陣営の中でも、体調の思わしくない照美の疲労は大きい。よってやや前線から遠ざけた。それにこの作戦では、ウイングに置いた方が彼のスピードを生かせる。

実はレーゼを起用したのも、彼の俊足が必要だからだと言う。

『吹雪さん染岡さんは前半と同じく、向こうのマークの隙を突けそうならまたワイバーンブリザードを狙って下さい』

でも向こうも、二人のマークは徹底するだろう。もう一度チャンスが来るかは怪しい、と彼女は続ける。

『裏を返せば…その分風丸さんと宮坂さんへの注意は緩慢になる筈です。お二人がFW向き選手でない事は不動さんもよくご存知でしょうから』

風丸も宮坂も、FWにはあまり向いてない。二人とも必殺シュートが無いわけではないが、片や彗星シュートで片やクロスドライブ。ビーストフアングを打ち破るにはあまりに心もとない。

しかし春奈はそれを分かった上で、今回彼らをツートップに起用したのだ。それは真帝国学園を油断させる為だけでは、無い。

『お二人の最大の武器はシュートではなく、雷門一のスピードですから』

それは、秘策。聞いた宮坂も納得はした。理解もした。が…ただでさえ自分は初試合で、テクニクに不安があるのだ。できるだろうか、自分にも。

- いや、できるか、じゃない。やるんだ!!

自分だって雷門イレブンだ。

- 雷門の誇りは、僕が護る!!

ホイッスル。郷院のスローイン。ボールは小鳥遊へ。そのまま彼女はドリブルで上がっていく。

春奈に闘争心を燃やしているというのは本当のようで、まるで挑発するかのように、彼女の真正面から突っ込んでいく。

「あたしからボールを奪ってみなさいな、お嬢ちゃん!!」

「勿論ですっ!!」

春奈と宮坂の距離は遠い。此処からならば、シューティングスターが来ないと踏んで油断しているのだろう。確かに、この位置からあの連携技はできない。

でも。

「スピニングカット!!」

残念無念。

春奈のディフェンスはそんな甘いものじゃない。水色のオーラを纏った彼女の脚が弧を描き、地面から青い焰が噴き出す。

「なっ…何っ!？」

驚愕の表情を貼り付けて、小鳥遊が焰の壁に足止められる。その隙に春奈は彼女から、見事にボールを奪ってみせた。

「レイさんっ!!」

そして春奈はレーゼにパスを出す。

鬼道の青いマントを着て、フードを被ったその表情は見えない。

本当に戦えるのだろうか。たとえ本人にやる気はあっても、記憶は戻っていないのである。果たしてどれだけ感覚が戻っているか。

そこに佐久間が走って来る。憤怒と憎悪に染まりきった顔で。

「何処の誰だか知らないが…嫌味のつもりか!? 鬼道さんとそっくりな格好しやがって…っ!! 潰してやる!!」

鬼の形相でタツクルに来る佐久間。レーゼは一瞬ビクリと肩を震わせたが――しかしそこから、逃げる事は無かった。

「私は、負けない…！」

宮坂も、雷門も目を見開く。レーゼが掲げた右手に集まる、紫の光。その光をまるで盾にするかのように、自分の前方へ突き出すレーゼ。

「ワープドライブ…！」

あれは、ジェミニストームの。記憶は戻っていない筈なのに、必殺技を使えるだなんて。

いや。分かる気もする。心の記憶は消えても、身体に染み付いた記憶は消えないもの。彼らが日頃サッカーによる訓練を重ねていた戦士ならば――。

短いワープゾーンを作り、疾走する少年。驚愕に凍り付く佐久間を、ワープによって遙か後ろに抜き去っていく。

吹雪が染岡へのパス。予想通りそう見越して、素早く弥谷と竺和が吹雪と染岡をマークする。その為、風丸と宮坂は共にフリーになっていた。

いや、たとえマークされていても。彼らのスピードには真帝国学園メンバーとはいえそう簡単にはついて来れまい。

「風丸！」

レーゼのパス。風丸は鮮やかに受け取った。そのまま宮坂と併走して真帝国ゴールへ切り込んでいく。

「馬鹿め！」

嘲り笑う不動の声。

「大した必殺シュートも持たないそいつらに、何ができる！？血迷ったか雷門！！」

馬鹿はそつちだ、と宮坂は思う。まさか此处まで来てまだ気付かないなんて。

何のために自分達二人を春奈がツートップ起用したか。よく考えればその狙いなど一つしかないだろうに。

「疾風ダッシュー！！」

風丸がDF、郷院を軽やかにかわす。もうゴールは目前だ。源田が技を出そうと身構える。ところが――いつまで立っても風丸がシュートを打つ気配がない。

そしてゴールエリアに一步踏み入って、源田を充分ひきつけたところで。

「宮坂！」

来た。源田が目を見開く。宮坂はパスを受け取り、そのまま――なんとゴールエリアでドリブル。源田が慌てて戻ろうとするが間に合う筈もない。

宮坂は源田を抜き去り――ちょこん、と軽くボールを蹴った。文字通りコロコロとボールはゴールへ。

「1！...ゴール！！2 - 0！！」

自称、雷門専属実況の角馬が叫ぶ。

「な、なんと！！宮坂、シュートではなくドリブルで源田を抜き去ってゴールを決めたああ！！これは奇策だ！！」

そう。だから自分達二人がツートップ。雷門で最も脚が速いからシュートを決めれば、源田も技を出せてしまう。しかしドリブルで抜き去られたら成す術がない。それが出来るのは自分と風丸の疾風ディフェンスコンビだけ。

「やったな宮坂！追いついたぞ！！」

「はいっ！風丸さんのおかげです！！」

二人でハイタッチ。風丸の嬉しそうな顔を見ると、宮坂も嬉しくて仕方ない。

風丸のおかげ。そして春奈のおかげだ。彼女が作戦を思いついてくれなかったら、得点する事はできなかっただろう。

- - 血は争えないって事かな。

鬼道の妹は伊達じゃない。

宮坂は思い出していた。風丸がサッカー部の助っ人に駆り出されて、初めて雷門が帝国と戦った日の事を。宮坂もまたあの試合の一部始終を見ていた。帝国を率いる鬼道の手腕には畏怖すら抱いたものだ。

春奈と目が合う。彼女がにっこり笑ってピースしてきたので、宮坂も返した。シューティングスターを練習した時にも思ったが。なんだか彼女とはいいコンビになれる気がする。

「お前ら…いい気になってんじゃねえぞ」

ぞくり。

宮坂ははっとして振り返る。

「ちょっと遊んでやろうかと思ってたけど…もう我慢ならねえ。一体誰を怒らせたか、思い知らせてやる」

鬼のような形相で、不動がこちらを睨みつけていた。低い低い、ドスの効いた声。宮坂の背中に冷たいものが走る。

「知ってつか？ああ、陸上部から入ったばっかのお前は知らねえかあ。サッカーって結構命懸けのスポーツなんだぜ？反則？あるにはあるよ、でも抜け道ってのも何処にでもあるんだなあ」

ニイ、と彼の口元がつり上がる。左目は見開き、右目は細められ――左右非対称な歪な笑み。その異様な雰囲気、宮坂は思わず後ろに後ずさった。

そして宮坂が一步下がると、逆に一步近付いてくる不動。

「分かる？俺ずーっと我慢してたの。いつもそう。相手を蹴っ飛ばす時さあ…もうちょっと力入れたら肋骨くらいイケんのになあつて…。いい音すんぜ、気持ちいいくらい」

ケタケタ、ケタケタ。

耳障りな笑い声と、脚を凍り付かせるような言葉。

何なんだ。何なんだこいつは。

明らかに正気じゃない。気が狂った、猛毒の言葉を吐く黒き魔術師がそこにいる。

「俺は負けるわけにはいかねえんだよ」

その言葉は闇の魔法。

死を抱く、魔術師のくびき。

「フィールドで死にたいか、お前？」

笑い声が遠ざかる感覚。自分を呼ぶ風丸の声すらも遠くに聞こえた。

宮坂は気付かされた。脚が竦んでいる。自分は今、間違いなく怯えた。

不動の悪しき魔法にかけられてしまったのだと。

【1・20・墜落、日和】

どうにかこれで、同点。流れはけして悪くない。だが染岡は、どこか胸騒ぎを覚えていた。それは後半の時間がもう残り少ないからなどではなくて。

- あの不動つて野郎…一体何なんだ。

彼が真帝国のキャプテンらしい、ということは分かる。テクニクも実力も申し分ない事も。

だが。

「イカレてやがる…」

他にどう表現すればいい？

染岡も、先程の不動の言葉は聞いていた。彼の表情までは見えなかったが、それでも-彼の秘めた狂気を窺うには、充分だった。

挑発、なのだろう。そして警句、脅迫。サッカーをまだあまり知らない宮坂へ、精神的ダメージを与えようと揺さぶってきたのだ。

それ自体は珍しい事じゃない。相手を怒らせる、あるいはビビらせて動きを鈍らせるのは、スポーツの常套手段だろう。しかし。不動の言葉は-何かが違うのだ。

こんな時、自分のボキャブラリーの無さが恨めしい。この違和感を、戦慄を、どう表現すればいいのかわからない。

確かなのはその異様な空気に、自分が畏怖を抱いたという、その事実だけ。

- くそっ…ビビってんじゃねえぞ俺！

パン！と両頬を叩いてカツを入れる染岡。

- - ビビったら負けだ負け。流れはこっちにあるんだ、このまま逆転すりゃいい！！

「染岡！」

ととと、と吹雪が駆けてくる。普段の穏やかな彼とは違う、好戦的な目つきの少年。

彼は二重人格なのではないか。染岡も薄々それに気付きつつあった。実は彼は、途方もなく重たいものを背負っているのではないかと。

けれど。どんな吹雪でも、吹雪なのだ。最初はその二面性も、どちらの吹雪も嫌いだった。今は- - そんな彼のいい所も、たくさん見えるようになってきている。いいコンビになれるかもしれない、とすら。

『豪炎寺になろうとするなよ！お前は染岡竜吾だ！！』

かつて。豪炎寺との実力差に悩んでいた染岡に、円堂が言ってくれた言葉を思い出す。自分は自分。豪炎寺の真似じゃない。染岡には染岡のサッカーがある、と。

それなのに自分は最初吹雪に、豪炎寺のサッカーを求めてしまっていたのだから酷い話だ。

豪炎寺にあって吹雪には無いものは確かにある。だけど同時に、吹雪には吹雪にしかない物がたくさんあるというのに。

「あと一点で勝ち越した。ヘマすんじゃないぞ！」

どうやら、彼なりに励ましてくれているらしい。

攻撃的になつてゐる吹雪は、言葉が荒つぽい。だが、結構気がきいて他人を気遣うところとか、子供っぽい走り方とかは、普段の彼と何も変わらない。

多分――本当は凄く繊細で優しい子供なんだろう、と思う。

FWバージョン吹雪はちよつと染岡にも似てるかもしれない。不器用で、ついついつつけんどんな態度をとつてしまふ所とか、ツンデレくさい所とかが。

「はっ……テメーこそミスつたら承知しねえぞ」

そうだ。何も畏れる必要は無い。自分は独りで戦つてゐるわけではないのだから。

吹雪がいる。円堂がいる。みんながいる。鬼道もきつと、側にいてくれている。それが自分達の誇るべき、強さ。

ホイッスルが鳴る。試合再開。さっきの宮坂&風丸コンビを警戒してか、真帝国は彼らにもマークをつける事にしようだ。

が、そうなれば当然、今度は染岡と吹雪のマークが甘くなるわけだ。

「もう一発決めようぜ吹雪、ワイバーンブリザードだ――！」

「おうつ――！」

二人でフィールドを駆け上っていく。この調子なら行ける、染岡がそう思つた時だった。

「そおーはさせませーん！ヒヤッハハハア――！」

背筋を突き抜ける悪寒。真つ黒な威圧感を全身で感じ、一瞬頭が真つ白になる。

不動がいた。狂氣的に笑いながら、こちらへ猛スピードで突っ込んで来る。

おかしい。こいつはおかしい。おかしい、おかしい、おかしい、

おかしい。

怖い！！

「キラーズライドオオ！！」

金縛りが溶けた時には、不動の顔が目の前にあつて。足首に重たい衝撃。気付いた瞬間はもう、染岡の景色は逆さまになっていた。必殺技をくらった。派手に吹っ飛ばされた。それを理解したのは、芝生に叩きつけられた後。蹴り飛ばされた右足を中心に、熱気のような痛みが全身を駆け巡る。

喉の奥から掠れた悲鳴がほどばしった。痛い！！

「そ、染岡っ！」

吹雪がぎょつとして立ち止まるのが見えた。その隙に、不動がボールを保持したまま吹雪にわざと向かっていくのも。

よせ。やめろ。そいつに手を出すな！

叫ぼうとした声は、痛みに呻くばかりで音になってくれず。

「ジャッジスルー2！！」

不動の凶悪な眼がギラリと光った。

吹雪の腹にボールを当て、その上から何度も何度も蹴りつける。

彼の肋骨から嫌な音がした。そして最後は地面に叩きつけるようにして突き飛ばす。

「ぐああっ！！」

「吹雪……ッ！！」

明らかに敵選手を潰す為の技。質が悪いどころじゃない。自らの身体を押さえるようにしてうずくまる吹雪。小柄は身体がダメージから小刻みに震えている。

笛が鳴った。不動にイエローカードが出たのだ。そりやそうだろう。むしろあれで何でレッドカードじゃないのが疑問だ。明らか恣意的な攻撃だったではないか。

「染岡っ！吹雪っ！」

風丸や一ノ瀬が慌てて駆け寄って来る。

「俺は…大丈夫だ。それより、吹雪は…」

一ノ瀬に支えられ、どうにか立ち上がる。ズキズキと足は痛みを訴えているが、立てないほどじゃない。残り時間も僅か。気にしてなどいられない。

吹雪の事が心配で仕方ない。自分はガタイもあるし、丈夫さが取り柄のようなもの。だが吹雪は、あんな酷い技を、小さな身体でもるにくらってしまったのだ。

「だ…大丈夫だよ、染岡君…。大した事、ない」

いつの間にか、普段の大人しい吹雪に戻っている。お世辞にも顔色がいいとは言えない。ひょっとしたら、肋骨に罅でも入ったんじゃないだろうか。

「…畜生っ…不動の奴…！！」

これ以上吹雪に負担をかけるわけにはいかない。他のメンバーも疲れてきている。自分がなんとかしなければ。

痛む脚に鞭打って、染岡はフィールドに戻る。

「…負ける訳に行かぬーのは…こっちも同じなんだよ…！！」

雷門も選手層が薄い。あれだけこっぴどくやられた吹雪と染岡をまだフィールドに残すだなんて。小鳥遊は呆れたように、雷門の選手達を見た。

- - まあ、どうでもいいけどね。アンタ達が潰れようと何しようとあたしの知ったこっちゃないし。

小鳥遊忍。真帝国学園の紅一点。実は小鳥遊は、他の真帝国メンバーとは明らかに違う点が一つある。

それは小鳥遊が、自分の意志でこの場所にいるという事。愛媛で頻発している、サッカーをする少年少女達の誘拐事件。それは不動がスカウトした子供達をある力で洗脳し、エージェント達を使って次々と拉致した為に起きたものだった。

佐久間と源田も例外にあらず。彼らは影山の周りをかぎまわっていた為、邪魔者を始末するついでに引き込まれたといった方が正しいようだが。

- - あたしは、女だからって理由でずっとサッカーさせて貰えなかった。

いや、理由はそれだけではない。

小鳥遊の兄は、愛媛で名の知れたサッカー選手で、U14の代表にも選ばれていた。それが、試合中の怪我が元で死亡。両親は以来、

妹にもサッカーを禁じたのである。

- - だけどあたしはサッカーがしたかった。だってサッカーは…兄貴とあたしを繋ぐ、たった一つの絆だったから。

思い悩んでいたその時だ。不動が自分の目の前に現れたのは。よからぬ企みなのは明白。言う通りにしなければ無理矢理拉致していくと宣言したくらいなのだ。しかし小鳥遊には、断る理由が無かったのである。

サッカーが出来るなら何処でもいい。喜んでついていつてやる。だから小鳥遊だけは、洗脳を受けていないのだ。そんな物、必要なかったから。

- - あたしには、この学園が必要なんだ。此処がなくなったら、あたしはまたサッカーを奪われてしまう。

忌々しい雷門イレブン。佐久間達のような憎悪こそ無かれど、小鳥遊にとっても邪魔な存在である事に間違いはない。彼らは小鳥遊の唯一のフィールドを奪おうとしているのだから。

させるものか。自分のたった一つの居場所なのだ。絶対に護る。彼らなどに渡してなるものか。

- - 音無春奈。あんたには絶対、負けない。

偶然にも。春奈と小鳥遊はよく似た境遇にあった。二人とも大好きな兄を喪っている。その絆を、サッカーに求めている。

違いがあるとするなら。春奈はこの試合に負けたところで、精々佐久間と源田を取り戻せなくなる程度だが。自分達は負けたら後が無いという事。

影山に、過剰な忠誠心など持ち合わせていないが。恩があるのは

確かである。そしてその影山は敗者をけして赦さない。弱い事は罪だと信じている。

負けたら自分も不動も、間違いなく切り捨てられるだろう。

- - 不動も不動で、あたしとは別に負けられない理由があるみたいだし。

イカレたキャプテンだが、その腕は買っている。それにある意味自分も同じような狂気を抱えて此処にいるのだ。

即ち己のサッカーの為ならば、どんな卑怯も厭わないという、狂気を。そういった意味じゃ共感が持てるし、仲良くしてやろうという気にもなる。

- - 後半も残り僅か。一点だ。一点入れば勝負はキメられる。

雷門ボールで試合は再会。ボールは宮坂から風丸へ。

吹雪と染岡はピッチにこそ戻ったが、ダメージは大きいようで動きが鈍い。あちらもそれはよく理解しているのだろう。となればワイバーンブリザードをもう一度狙って来る率は低い。

となれば風丸と宮坂を押さえてしまえば、雷門は手詰まりだ。予想通り上がっていく二人に、真帝国メンバーは守りを固める。

「メガクエイクー！」

勢いよくジャンプする郷院。風丸がその俊足で避けようとするが間に合わない。轟音とともに郷院が着地すると、大地に激しい衝撃が伝わり、ひび割れていく。

悲鳴と共に吹っ飛ばされる風丸。そのまま郷院はボールを不動へパスする。

「風丸さんっ！くそっ……」

駆け寄ってきた宮坂を、不動はギリリと睨みつけた。

「邪魔すんじゃないぞ、ガキがあっ！！」

ひっ、と息を飲んで足を止める宮坂。不動の狂気に、彼の紡ぐ黒い言葉にあてられて完全に吞まれたようだ。

これぞ、黒き魔術師たる不動明王の真骨頂。小鳥遊はニヤリと笑う。これであいつはもう怖くない。

そのままトリプルブーストを放つつもりか。不動を見ると、彼は愉しげにアイコンタクトしてきた。その意味する所は。

――まったく、アンタも趣味が悪いねえ。

最後の一発は佐久間に決めさせるつもりらしい。彼がどうなるか、無論分かっているだろうに。

「いいさ。付き合ってやるよ、アンタのカーニバルに」

悪魔と言われようが構わない。

自分は自分の為に。己の信じるサッカーを貫く。それだけだ。

【1・21・そして彼らは、溺死して】

雷門は強い。それは分かっていた。なんせあの鬼道が惚れ込むほどのチームなのだ。けれど自分達には、禁断と称されたほどの技がある。

皇帝ペンギン一号とビーストファングがあれば。かつて鬼道が見ていたのと同じ世界を見る事ができる。彼を、追い越し、憎たらしい雷門を叩きのめす事ができる。

その筈だったのに。

- - 互角だと？ そんな事… 有り得ないっ！！

佐久間はギリリと奥歯を噛み締める。全身を苛む痛みより、悔しさの方が勝っていた。

理不尽？ 不条理？ ああ、なんて表現すればいい。自分達は勝つ為だけに、莫大な代価を払ってきた。それは帝国にいた時から変わっていない。

スポットライトが当たるのはいつも鬼道で。自分はいつでも日陰の花だった。だけど、それでもチームに貢献できるならと。努力して努力して努力して、努力し続けてきたというのに。

それに加えて今は。命を削ってでも禁断の力を手に入れた。使いこなす為に血反吐を吐くまで訓練した。それなのに、まだ何かが足りないとしても？ まだ雷門の方が勝るとしても？

- - 有り得ない… あっていい筈がないんだっ！！

ふざけるな。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなっ！！

奴らなんかより何倍も自分達は頑張ってきた。奴らなんかよりず

つとサッカーを愛してきた。奴らなんかよりずっと努力してきた。

そして奴らなんかよりずっと。

ずっと鬼道と、彼と同じ夢を、想ってきたというのに。

何故その全てを、横からしゃりしゃり出て来た連中にかっさらわれなければならない？何故自分は愛した全てを、理不尽に奪われなくてはならない？

何がいけなかったというのか。自分達に何の罪があった？此処までの罰を受けなければならない程の事をしたとでも？

そんな筈ない。有り得ない！！

思考は最終的全て、同じ場所へと帰結する。

「お前らだけは…絶対に赦さない…！！」

赦さない。赦さない。赦さない。

だから、殺す。鬼道が愛したサッカーで、奴らの誇りも魂も、このフィールドで叩き潰してやる。

「俺達の方が上だ！！お前らなんかより上なんだ！！叩き潰して…証明してやる！！」

そうだ。自分達こそ勝者にして強者。鬼道は騙されたのだという事を、彼は自分達と共に在るべきだったという事を、この場で思い知らせてやるのだ。

春奈、とかいう名前の女が、まるで哀れむような眼を向けてくる。同情か、蔑みか。決り出したい眼だと思った。こんな女の為に、鬼道はずっと苦しんできたと思うと、激情が溢れて止まらない。

憎い。そんな言葉では言い表せないほど、憎い。

鬼道は死んでしまったのに――その妹が平然とピッチに立っている、事実そのものが恨めしくて仕方ない。

「潰れてしまえっ！消えてしまえ――っ！！」

佐久間の声に呼応するかのように。不動から小鳥遊へとボールが渡り、彼女はまた毒霧の術で不調の照美を抜き去った。

パスが出る。ボールは佐久間に来た。佐久間は真っ直ぐ、春奈に向けて突っ込んでいく。その憐れむような眼を消し去る為に。鬼道を縛り続けた忌々しい女を潰す為に。

春奈の眼が驚愕と、恐怖に見開かれる。その身体にボールをブチ当てるべく、佐久間は脚を振り上げた。

積もり積もった、あらゆる憎悪を叩きつけるように。

「くたばれっ……音無春奈ああっ！！」

『……どうして、なんだよ！！』

ドクン。

その時。佐久間の脳裏に、まるで硝子の欠片の如く――断片的なシーンが、蘇った。

帝国学園の、薄暗い廊下で。自分と源田の二人は、鬼道に詰め寄っていた。あれはそう――雷門と初めて戦うより、ずっと前の事。鬼道は憔悴しきった顔だった。顔や腕、見える場所の傷は少ない。だから自分達は、彼の身に起きている悲劇にすぐには気付けなかったのだ。どうして彼が自分達と同じロッカーで着替えたがらないのかも。

ユニフォームとマントの下は、包帯でぐるぐる巻きだった。その下にどんな凄惨な傷があるかなど想像もつかない。彼が影山に、どんな暴行を受け続けてきたのかも。

ただ確かなのはそれが事実である事と、その虐待により鬼道の心は常に擦り切れ続けているという事だけ。

『何で鬼道が…鬼道だけがそんな目に遭わなければならないんだ！？』
『？』

怒りをぶつける相手を間違えている。

それでも佐久間は言わずにはいらなかった。悲しくて仕方がなかったから。あまりにも不条理な運命が、それでも立ち上がる鬼道の強さが、何も出来ない己の弱さが。

『何でそうまでして…総帥に従うんだ！？どうして…どうしてっ！』
『！』

みつともなくも、自分は涙を流した。源田も泣いていたような気がする。

そんな自分達に――鬼道は疲れ切った顔で、それでも笑って言った。自分には今はまだ、総帥の力が必要なんだ、と。

『護りたいものがあるんだ。護りたい約束が、護りたい人が』

鬼道は、幼い頃に生き別れになった妹と約束したのだという。彼女は自分が護ると。そしていつか必ず迎えに行くと。

その為には――フットボールフロンティアで三連覇を成し遂げなくてはならず。影山の教えと力なくしては難しいのだという。

『命に代えても、護りたい。その為なら何だってするさ』

小さな身体を精一杯張って、運命を変えようとしていた少年。その力を、破壊ではなく救う為に使おうとしていた天才ゲームメーカー。

『大丈夫だ。…俺は壊れたりしない』

源田と二人、抱き寄せられた温もり。鬼道はまだ14歳の子供だったが、大人よりも親の愛を理解していた。

皆の“親”として、愛する事を知っていた。そうやってずっと妹を想って来たのだから。

『だって…お前達がいてくれる。お前達は俺が辛い時、いつも背負ってくれる。その優しさが俺を救ってくれる』

自分は優しくなんかない。

だけど、思った。それでも自分にも、鬼道を救うただ一つの魔法が使えるのなら。

『ありがとう』

優しい子になろう。

強さ以上に、優しい子になろうって――そう決めたんだ。

「……ッ!!」

全身から汗が噴き出す。目の前にいる少女が。鬼道が心から愛する存在であった事を。その鬼道の為に自分が自らに誓った事を……思い出してしまった。

回想した一瞬。ほんの一瞬、佐久間は動きを止めていた。その僅かな間が、目の前の状況を変える。

「音無ッ!!」

どんっ、と一之瀬が春奈を庇うようにして突き飛ばす。佐久間の打ったボールは、一之瀬の胸元に直撃していた。

「ぐあッ!!」

「い……一之瀬先輩!!」

一之瀬の身体が転がる。その一之瀬に駆け寄る春奈。佐久間は、自分でも驚くほど動揺していた。胸の中がぐちゃぐちゃにかき回されるかのよう。

自分は今、破壊の為にサッカーをしていた。護る為じゃない、壊す為のサッカー。鬼道の愛する物とはかけ離れたサッカーを。

そして彼が命懸けで護ろうとした妹に、殺意をこめてボールをぶつけようとした。

「っ……」

だけど。

だけどもう、今更なのだ。

「うわああああっ!!」

今更気付いたところで、何になる。もう何もかもが遅すぎる。後戻りなんて、出来る筈もない。

まるで自棄になったようにドリブルで駆け上がっていく。雷門ゴールに迫る。円堂と眼が合う。

それは憐れむ眼では無かった。悲しむ眼だった。一体、何を？

『あの技は絶対に使っな!何があっても、絶対にだ!!』

「皇帝ペンギンッ」

『あの技は危険すぎる。サッカーができなくなるだけじゃ済まない…命に関わるぞ、佐久間』

「一号ッ!!」

『そんな事になったら…俺はどうすればいい。お前はそんなに俺を泣かせたいのか』

ああ、自分は、悲しませてる？
貴方を今、泣かせてしまっているの？

「あああああっ！！」

全身の肉を引きちぎられたかのような激痛が走った。三回目の皇帝ペンギン一号。限界を、超えた。喉から引き絞るような絶叫が突き抜けていく。

自分はただ、力が欲しかった。鬼道と同じ世界を見たかった。でもそれは壊す為じゃない。誰かを追い抜かして、優越感に浸りたかった訳でもない。

護りたかったからだ。傷だらけで孤独に戦う、あの人を。

どうして忘れてしまっていたのだろう。本当に成りたかったのは、彼を救えるような、優しい戦士の姿だったのに。

佐久間の絶叫をBGMにして、ボールはゴールへと向かって来る。円堂はとっさに動けなかった。目の前の悲劇に、身体が硬直してしまっていた。

- どうしてこんな事になる？

さつき一瞬。春奈を攻撃しようとして、動きを止めた佐久間。円堂は見逃さなかった。佐久間の表情が、身体のダメージとは別の痛みに歪んだ事を。

- どうしてこんな事になった？

三回目の皇帝ペンギンは放たれてしまった。佐久間の身体はズタズタになり、その痛みはショック死レベルに達しているのだらう。突き刺さるような悲鳴が全て物語っている。

佐久間も源田も、鬼道とすれ違い、雷門を憎み、あの影山に従って此処にいる。しかしその感情、それ自体は罪ではないのだ。円堂の中にも、誰かを憎む暗い気持ちは絶えず渦巻いているのだから。それに。

分かるような気がするのである。彼らが一番に望んでいる物が何だったのか。彼らが一番取り戻したがつている物が何なのか。何を悔いて立っているのか。

そして彼らが、その望みが二度と叶わない事にも、気付いているのだらうという事も。

- だからその虚しさを、何かにぶつけるしか無かったんだ、きっと。

それを利用されてしまっただけ。なのに何故彼らがこんな目に遭わなければならぬ？自分達は鬼道になんと謝ればいい？

自分達には、救えないのか？どんなに願っても、望んでも。だとしたらこれは、誰への罰？

「円堂っ!!」

その時視界に移り込む影があつて――円堂は漸く我に返った。染岡だ。全速力で走って来た彼が今、円堂に直撃する筈だった皇帝ペンギン一号の軌道上に――。

「もう誰も…奪わせはしねえぞ――ッ!!」

バキリ。

染岡が突き出した脚に、ボールが食らいついた。染岡が齒を食いしぼる。重く響いた、骨の碎ける音。それでも彼は耐えた――その身体が吹っ飛ばされるまで。

「染岡君――ッ!!」

吹雪の絶叫。円堂は唇を、血が出るほど噛み締めた。勢いはかなり死んだとはいえ、まだシュートは生きている。

視界が滲む。目の奥が痛い。それでも円堂は悲鳴のように叫んで、技を出した。

「マジン・ザ・ハンドオオ――!!」

怒りと、それを飲み込む悲しみを吐き出して。魔神の手が、佐久間の命懸けのシュートを止めていた。

ボールをキャッチした円堂のグローブに、ポタポタと雫が落ちる。ホイッスルと実況の角馬が叫ぶ声が聞こえた。

「佐久間の皇帝ペンギン一号決まらず!試合終了!!2-2、引き分けだあっ!!」

【1 - 2 2・桜散る、涙散る】

至上最低最悪の試合。ひょっとしたら誰もがそんな風にこのゲームを評するのもかもしれない。こんなのはサッカーじゃない、潰し合いで殺し合いではないか、と。

その考え方は正しくもあり、間違いでもあると源田は思う。

フィールドのあちこちで、怪我をして倒れ伏す選手達。ああなるほど、これは健全なスポーツと呼ぶにはあまりに暴力的な事だろう。しかしそんな光景を、既に自分達は嫌というほど見慣れているのだ。本気にならなかった試合なんて、今まで一度もない。

自分達はいつだってサッカーに命をかけてきた。大袈裟ではなく、このフィールドは自分達にとって殺し合いにも等しい戦場だったのだ。

勝つ事は誇り。強い事が存在証明。自分達もまた少なからず影山の思想に影響されていたのだろう。弱ければ全てを失うと、無意識に怯えていたのかもしれない。

でもそれ以上に。勝ちたいと願った理由が、あったのだ。

- 俺は少しでも...少しでも長く、みんなとサッカーがしたかった。

今やっと、思い出したのだ。当たり前だった筈なのに、気付けば当たり前でなくなってしまうていた事。

自分は、サッカーが大好きだったのだ。

でもそれはただサッカーをする事じゃない。愛していたのは、大好きな仲間達とやるサッカー。勝ち続ければ、勝ち続けた分、皆とプレイできる時間が長くなる。笑っていられる。

そうだ。だから、勝ちたくて。負けたくなくて。

それなのに...勝てなくて。

- - なあ…何が、いけなかつたんだ？

ずるり、と。もはや痛いのか熱いのかも分からぬ脚を引きずって、
一歩一歩前へと進んでいく源田。

フィールドは、こんなにも広がったのだと思い知らされる。自分はGKだから見えてなかった。仲間達はこんな広い場所を、死に物狂いでいつも走り回っていたのだと。

- - 俺達…何処で間違っただんだ？

自分達が間違えたのか。他の誰かが間違えたのか。

自分達が罪人だったのか。他の誰かが罪人だったのか。
あるいはその全てに、咎があつたのか。

- - こうなるかもしれないって…分かつてて。このピッチに立った
筈なのに。

禁断の技を使うと決めたその瞬間に。この未来もまた高い確率で
存在していた筈だ。自分はそれを予想していた。予想していたのに
突き進んだ。要は、確信犯ではないか。

それなのに理不尽さを感じるなんて、どうかしている。

それとも、自分は心の何処かで気付いていたのか。禁術に頼るのが
過ちである事を。それともまだ誰かに止めて貰いたがつていた？
どっちにせよ愚かとしか言いようがない。

- - でも俺は…死にたかつたわけじゃない。死んで貰いたかつた訳
でもない…佐久間にも…鬼道にも。

全身は、まるで悲鳴を上げるがごとく痛みを伝える。一歩踏み出
すたび、何処かが壊れる音がする。

このまま歩き続けたら、脚の指の先から粉々に砕けて、源田幸次郎という人間は塵のように消えてしまふのだろうか。

それでも歩みを止めないのは、たった一人、同じ痛みを共有した仲間の元へ辿り着く為だった。

フィールドに仰向けに倒れたまま、佐久間の身体がビクビクと痙攣している。皇帝ペンギン一号を三度打った代償。その激痛たるや、死んだ方がマシといったレベルなのだろう。

立ち上がるどころか腕を持ち上げる力も残されていない親友。自分が側にいなければと思った。そうしなければ一生後悔する気がした。

源田は知っている。佐久間次郎という人間の脆さを。不動のスノウトはきっかけに過ぎない。本当はもつとずっと前から彼が、狂いそうなほどの愛憎を胸に抱いていた事に、自分だけは気付いていたのだ。

だけど、自分では鬼道の代わりにはなれない。同時に源田にとっても、佐久間では鬼道の代わりにはなり得ないのだ。

その喪失を埋めるように寄り添って、同じ赤信号を並んで渡っても。結局ゴールなど見える筈もない。そして自分達が信号無視を繰り返している間に、本当にかの人は世界からいなくなってしまった。雷門が憎い。音無春奈が憎い。世界が憎い。運命が憎い。

それでも自分と佐久間の間には、決定的な違いがあったような気がしてならない。何故なら源田は、まだ正気を残していたのだから。思いの外頑丈だった己の心は、狂気に堕ちる事すら赦してくれなかった。雷門を潰しても鬼道は帰って来ない。喪われた日々は戻らない。ただ虚しいだけと知っていた。

それなのに、佐久間を止める事もゲームを降りる事も出来なかったのは。ひとえに自分もまた、このやり場の無い激情をぶつける相手が欲しかったからに他ならない。

八つ当たりだ。誰より分かっている。分かっている、ぶつけなければ耐えられなかった。このあまりに過酷すぎる、現実に。

「佐久間…さく…ま…」

痛い。でも本当に痛いのは。折れた肋骨でも傷めた腱や筋でもなく、捻った関節でもなく。

「佐久間…俺…思い出したんだ」

胸の奥の奥。

魂に繋がる場所が、痛い。

「帰って来るって」

『源田。佐久間。…本当にすまない。俺の勝手な行動で、迷惑ばかりかけて。…でも』

「帰って来たいって」

『俺の…帰る場所は、帝国にある。俺はそう、思ってる。だから…もし、お前達が赦してくれるなら』

「そう言っただじゃないか…鬼道は」

『エイリアを倒した後…もう一度、同じピッチに立つてもいいか？』

忙しくて忙しくて仕方ない鬼道が。それでも合間をぬって何度も電話をくれて。たった一度だけ、お見舞いに来た時。確かに、そう言ってくれたのだ。

帝国こそ帰るべき場所だと。自分は帰るつもりだと。

鬼道は、自分達を捨てたわけじゃなかった。雷門に誑かされたわけでもなかった。本当は、自分達はとくに知っていたのだ。

それだけじゃない。世宇子に負けて。病院のベッドの上で悔しさを噛み締めていた自分達に。鬼道は頼みがあると言った。自分に、時間をくれないかと。

雷門に行く、と初めて自分達に告げたあの日にだ。彼は戻る事を約束してくれていたではないか。その彼を信じて背中を押したのは他でもなく…。

「俺達も、言っただ。鬼道に…頼んだぞって…」

『頼んだぞ、鬼道。俺達の仇をとってくれ!』

「そうやって…そうやって雷門に鬼道を送り出したのは、俺達だっ
たじゃないか…!!」

ああ、そうなのか。

自分達こそが…最たる悪だったのか。
なんて身勝手なのだろう。

鬼道は約束してくれていた。自分達は約束を信じて彼の背中を押
した。なのに。

自分達は都合のいい事をまるまる忘れたフリして。勝手に裏切ら
れただの騙されただのと思い込んだのだ。

いや…それも本当は、違う。

自分達は全部分かっていた。だけど鬼道が裏切ったと、雷門に騙
されたと思う事で紛らわそうとしただけなのだ。

惨めに負けてしまった己の弱さと。鬼道と同じ場所に行けなかつ
た無力さ。そして。

鬼道が死んでしまったという、あまりに大きな悲しみから。

「源…田……」

痛む身体に鞭打って。膝をつき、佐久間の上半身を抱える源田に。
佐久間は荒い息の下、自分の名を呼んだ。

「どうしよう……泣いて、るんだ」

もう指先一つ満足に動かせない少年。その眼に、みるみる涙が溜まっていく。

「鬼道が、泣いてる……。いつも、涙なんか見せなかったあいつが……泣いて……。どうしよう……。どうしよう……。お、れ……」

泣いてるのはお前だ、と言いたかった。佐久間の頬をポロポロと涙の雫が零れ落ちていく。源田の頬も、また。もしかしたら本当に、鬼道も今泣いてるかもしれない。

鬼道にとって何が幸せだったかなんて、今となっては分からないけど。

自分達のこんな姿を見て、彼が笑ってくれる筈が、ない。

「どうして……。俺はただ……。ただ……」

佐久間の腕は動かない。それでも源田には見える気がした。救いを求めるように空へと伸びる、彼の手が。

「鬼道と、もう一回サッカー……。やりたかっただけ、なのに……!!」

その掠れた声が。言葉が。源田の胸を突き刺す。

そうだ。自分達はただもう一度、胸を張って帝国サッカー部を立て直して……。鬼道とサッカーがしたかった。それだけだったのだ。なのに、その願いは二度と叶わない。鬼道は、殺されてしまったから。

「鬼道、鬼道、きどつ……。きど……。どうして……。どうして……。どうし……。」「かくん。」

謔言のように紡がれていた佐久間の言葉が、不自然に途切れた。首が完全に力をなくして垂れ、源田の腕の中の重みが増す。

「さく…ま？」

真っ青な顔で。瞼を閉じ、動かなくなってしまった佐久間。さあ、と源田の全身から血の気が引いていく。

そうだ。佐久間の身体は今、ボロボロで。もし全身の筋肉に損傷が及んでいるとしたら――。

「さ、佐久間！！佐久間っ！！しっかりしろ、佐久間あつ！！」

まだ辛うじて息はある。しかし意識を失ったとなるともう危ない。早く病院に連れて行かなければ、サッカーができなくなるところじや済まない。

彼を抱えて立ち上がろうとして、源田は己の身体がまるで思うように動かない事に気付いた。そうだ、忘れていたが、自分も怪我をしていたのだった。

だが、そんなの構っていられない。このままでは佐久間が死んでしまう。状況に気づいてか、雷門の何人かがこちらに駆け寄って来るのが見える。でも、彼らの手は出来る限り借りたくなかった。これは自分達が撒いた種なのだから。

何より後ろめたすぎる。自分達は彼らを散々痛めつけ、罵つてきたのだから。

痛みに歯を食いしばってもう一度立ち上がろうとする。体の中から嫌な音がした。立ち上がるどころか、膝を持ち上げる事すらできない。

――俺は最後の最後まで無力か…っ！！

悔しい。その感情だけで死んでしまえそうなほど。

「何がキング・オブ・ゴールキーパーだ…守護神だ…！結局俺は何も…何一つ…！！」

「面白い余興、見させて貰ったわ」

ドクン。

その声が背中から降った途端。源田の全身から、嫌な汗が噴き出した。

この場に似合わぬ、カツン、というヒールが地面を叩く足音。

「ま、こんなもんかしらね。貸し与えたエイリア石も純度の低いものだったし」

甲高い、粘着質な女の声。
知らない声だ。その筈なのに。

「期待して無かった割には、収穫もあったし。恩に着るわ、影山センセイに不動クン？」

なのに何故、自分はこんなにも恐怖を感じる？どうしてその声だけで――悪夢めいた何かを思い出しそうになる？

源田は顔面蒼白になりながら、振り向いた。振り向いて、しまった。

「貴方の役目も、ここまでね。源田くん？」

血のような紅い眼。ニィ、と不動とは違う種類の喜悦に歪んだ女の顔がそこにあつて。

思い出した。その名前だけだけでも。

「二ノ宮、蘭子……！！」

返事の代わりに、女は笑みを深くした。

【1 - 23・災禍の魔女、降臨】

試合は、終わった。しかしこの場所の状況はといえばまさしく死屍累々。脚を完全にやられてしまった染岡は立つ事もままならず、吹雪、一之瀬も満身創痍。他のメンバーも疲労困憊といった様子だ。照美自身も、何度もラフプレイを受けたせいで、全身傷だらけである。何より元々体調が思わしくないのだ。体力は限界に来ていた。だが最も怪我が誰かと言えば語るまでもない。這うように佐久間の元へ辿り着いた源田はそこで気力体力を使い果たし、佐久間とはいえば源田に抱きすくめられたままピクリとも動かない。

このまま放置すれば命が危ないのは明白だった。

- - やつと彼らは… 大事な事を思い出せたのに。

照美は全て見ていたし聞いていた。源田の叫びも、佐久間の涙も。彼らは雷門と春奈の強さに触れ、やつと悪夢から醒める事ができたのだ。自分と同じように。でも。

醒めた先もまた悪夢だなんて、悲しすぎる。

- - 駄目だよ。君達は… 死んじゃ駄目なんだ。

『完璧じゃなくなつて… 護れる物はあるさ』

思い出すのは、あの晩の鬼道の言葉。思えば自分に、立ち上がる事こそ強さだと最初に教えてくれたのも、彼だった。

- - 大切な物があるなら、生き抜かなきゃ。

彼らは知る由も無い事だが。鬼道は佐久間達とだけでなく、自分

と吹雪との約束も破っていった。それは無論本人の意志でも彼の咎でもないけれど。

彼は自分達を必死で護ろうとしてくれたのに。命を落とした事が契機で佐久間と源田を護る事ができなかった。誰が悪いわけでもない、それは結果論であるとしても。

護りたいモノがあるなら、どんなに辛くても生きるしかない。生きる事が死ぬ事より遥かに辛いとしても。それは照美が誰より今痛感している。

よろけながら立ち上がり、彼らの元へ向かう。視界の端で、瞳子が電話しているのが見えた。おそらく救助を呼んでいるのだろう。自分に出来る事は精々、二人を助け起こす手伝いをする程度だろうが。何かをせずにはいられなかった。見殺しになんて、出来る筈もないのだから。

- - もうこれ以上、誰かが死ぬのは見たくない。

断片的な記憶。世宇子の仲間達の最期の笑顔と、繋いだ手の感触。宙に放り出された時の、潮風の冷たさと、水底でもがくいくつもの手。

そして鬼道が死んだと聞かされた時の、胸を抉るような痛み。

- - そしてもうこれ以上... あの人を、人殺しにしたくない...

もしこのまま佐久間と源田が死んだなら。それは間接的にはいえ、影山が殺した事にもなる。

過ちを繰り返したのはお互い様で、今の自分にそんな事を言う資格は無いのかもしれないけれど。

あの人を、救いたい。影山にもうこれ以上、罪を重ねて欲しくない。

- だってあの人は私にとって、たった一人の…。

その時だった。

突然、空気の密度が上がったかのような - - 奇妙な感覚。暗い色の霧が立ち込めて、空間がぐにやりと歪んで - - ああそうだ、まるでエイリアが現れた時のような。

違うのは。歪んだ空間の隙間に、黒い蝶が舞踊りだした事。その蝶が集まり、やがて人の形を成した事だ。

「面白い余興、見させて貰ったわ」

カッン、と真っ赤なヒールが鳴った。

「ま、こんなもんかしらね。貸し与えたエイリア石も純度の低いものだったし。期待して無かった割には、収穫もあったし。恩に着るわ、影山センセイに不動クン？」

それは、真っ赤なドレスに、真っ赤なルージユをひいた一人の女だった。

焦げ茶のおかつぱ頭に、血のように紅い眼。年は二十代後半くらいか。背の高い妖艶な美女、と言ってもいい。だがその美しさは見る者に畏怖と、不快感すら与えるもの。

この場に似つかわぬ、喜悦に満ちた笑みがそう思わせるのか。あるいはその鼻につく甲高い声のせいかな。

女は影山を見、不動を見る。なんとあの二人が、驚愕に凍りついているではないか。一体何者なのか。いや、そもそも今、一体どうやって現れた？

その場違いすぎるドレス姿といい、その様はまるで - - 。

「貴方の役目も、ここまでね。源田クン？」

源田に向けて、麗しく微笑んでみせる女。源田は佐久間を抱きしめて振り向き、真っ青な顔で女を見ている。

役目？という事だ。源田は彼女の事を知っているのか？
やがて戦慄くように、源田の唇が開かれる。

「二ノ宮、蘭子…!!」

掠れた声だったが、ハッキリと聞こえた。

二ノ宮？二ノ宮と言ったか？

『下手な興味で…我らの領域に踏み込まない事だ。さもなくば命の保証はない。…あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らいに来るぞ』

『そいつは二ノ宮様の貴重な実験体だ。我々に引き渡して貰おう。逆らった場合命の保証はない』

魔女。二ノ宮。

カゼルの言葉と、洗脳されていた真帝国学園の子供達の言葉が、
照美の脳裏に蘇る。

まさか、この女が？

「お前が…エイリア学園の二ノ宮って奴か…!？」

風丸がハツとして声を上げる。そのすぐ隣では、源田と同じく顔

面蒼白になり、宮坂に支えられているレーゼの姿が。

女……二ノ宮は、その風丸に笑いかける。無邪気に、しかし何処かネジの外れた笑みを。

「可愛い子ね。あたしのお気に入りの玩具と並ぶと映えるわね。……いいわ、自己紹介してあげる」

玩具ってレーゼの事か？その言葉だけで一気に皆の不快感を最高レベルに押し上げておきながら、女は平然と話を進める。

「あたしの名前は二ノ宮蘭子。エイリア皇帝陛下の側近の一人よ。陛下直属の親衛隊の隊長をやらせて貰ってるわ」

その二ノ宮に向けて、真っ青な顔で叫んだ人物がいた。
不動だった。

「ちよつと……ちよつと待ってくれよ二ノ宮様！！何で此処にアンタが来るんだ！？それに期待してなかったって……そんな……」

「あら、本当に何も気付いて無かったの？意外〜」

二ノ宮は目を丸くして、嘲りに満ちた声を出す。

「貴方は独断で影山センセイを脱獄させて、エイリア石を持ち出して……計画を進めたつもりみたいだけど、違うのよ？貴方が先走るように仕向けたのは全部あたし達。貴方の目の届く所に資料を並べてあげたり……力の弱くなってきたエイリア石の欠片を盗み出しやすくしてあげたり」

「な……何だと……？」

「嫌あね、あれだけお膳立てしてあげたのに分かってないなんて！期待されてるでも思っただの？ジェミニストームから外された……失敗作でしかない貴方が？きゃははははっお笑いだわ、傑作だわあ……！！」

「な……あ……っ！？」

不動の顔が紙のように白くなる。耳障りな二ノ宮の嘲笑。それは自分達に向けられたものでもないのに――どうしてこんなに嫌な気持ちになるのだろう。

今の会話だけで、何となく理解した。不動はエイリア学園の人間であり、元々はジェミニストームのメンバーだった事。独断で影山を脱獄させ、真帝国を築いたつもりでいたが――違っていた事。

「貴方なんて最初から捨て駒よ。あたし達の掌で無様に踊ってただけなのよ！だからこそ色々協力してあげたわけ。そこの佐久間クン源田クンを引っ張ってくる時だって――ねえ？」

がくん、と膝をつく不動。

「俺が……俺が失敗作？捨て駒？あの方がそう言ったのか……？あの方が……？あ……あああああっ！！」

絶叫し、頭をかきむしる。壊れた、胸を抉る声で泣き叫ぶ。自分達には詳しい事など何も分からない。ただ、彼が“あの方”の為に何かを成そうとしていて、しかしたった今その全てを失ったのだと――それだけは理解する事が出来た。

「不動クンは、素質はあるけどまだまだダメ。これで分かったでしょう？魔術師の端くれといえど、真の魔女と魔法の前には無力だつて事が」

魔術師に、真の魔女に、魔法。この女の言う事はまったく訳が分からない。

――いや、今はそれ以上に気になるワードがある。佐久間と源田を引き入れるのに彼女が協力した――という言葉。そのせいだろうか。あの凜々しく冷静だった源田が、あんなにも怯えているのは。

「名前だけでも思い出せるだなんて…さすが、貴方はモノが違うわね。そっちの玩具とは大違い」

一步、源田に近付く二ノ宮。本当は後退りたいのだろう。しかしもはや身体はボロボロな上、瀕死の佐久間を抱きしめている源田は動けない。

「ね…それ以上も思い出して頂戴。あたし達が初めて逢ったのは、何処だったかしら？」

「い……嫌……」

ガタガタと、幼い子供のように震えている源田は、絞り出すようにそれだけを紡ぐ。

「嫌…嫌だ…っ。思い出したくない…！！」

その様子に。二ノ宮は機嫌を損ねるところか、ますます悦びに満ちた笑みを浮かべる。怯える少年の頬に指を這わせ、その指がすと下の方に降りていく。

真っ赤なネイルの指が、厭らしい仕草で彼のきめ細やかな肌を這う。だが不快感より恐怖の方が圧倒的に勝るのか、少年は震えて硬直するばかり。

首筋をなぞり、やがては源田の胸の中心をまっすぐ指差して止まる。

「…雷門の子達は、優しいわね。教えてくれなかったのねえ…鬼道クンが殺された日、佐久間クンの携帯から呼び出されてたって事」

源田の眼がさらに大きく見開かれる。

駄目だ、と照美は思った。本能的にだ。それ以上言うな。それ以上語るな。

それ以上は、聞いてはならない。

「さあさ、思い出してご覧なさい…貴方達の身体を貫いた、その傷を」

女が謡うように紡いだその瞬間。源田の背中から突然 - 真つ赤な血が噴き出した。マネージャー達から悲鳴が上がる。その血は照美の頬にまで飛んできた。

「げ、源田君…っ!？」

がくん、と力を失い、源田の身体が横倒しに崩れ落ちる。ひゅーひゅーと木枯らしのような息が聞こえる為、まだ彼が生きている事こそ確かだが…。

グラウンドに、みるみる紅い海が広がっていく。見れば佐久間の胸や頭からも、じわじわと紅が染み出してきている。

何だ!?! 一体何が起こったのだ!?!

「さあさ、思い出してご覧なさい…」

指についた源田の鮮血を美味しそうに舐め上げて、二ノ宮はさらに残酷な言葉を続ける。

「“あの日”、愛媛で何が起きたのかしら? “その後”、東京で貴方達は何をしたのかしら? そして帝国で…何を見たかしら?」

心臓がまた、雷鳴の如く大きな音を立てた。

愛媛。東京。帝国。

鬼道呼び出した佐久間の携帯電話。確かに自分達はそれを、知っていた。だが偽メールを送る方法が無いわけではなく、鬼道と直接

佐久間や源田が話したわけでもない。

だから照美も考えなかった。否、考えないように、していた。彼らが本当に、あの事件に関わっているだなんて。

「さあさ思い出して…思い出してご覧なさいよっ！！」

二ノ宮の顔に、醜悪に歪んだ笑みが浮かんだ。

「貴方達の大好きな大好きな鬼道クンを殺したのは…一体だあれ！？」

バキリ、と空間に罅が入ったかのような錯覚。瀕死の源田がカッと目を見開いたまま――絶叫した。魂を引き裂くような、声で。

【1 - 24・真実は、刃の如く】

話は - - 十日以上前まで遡る。

源田はその日、佐久間と共に愛媛に調査に来ていた。脱獄したという影山の真意を探り、その野望を食い止める為。そしてこれ以上鬼道に負担をかけない為に。

埠頭に何かがある。そこまで調べたものの、それ以上辿り着くより先に影山の手の者達に見つかってしまった。即ち影山の手下達と、不動率いる真帝国学園の生徒達にだ。

持ち前の体力を生かして、逃げ回る二人。しかし、向こうは数で攻めて来る。市街地まで逃げ切るより前に - -。

『見伊つけた』

不動に、発見され。あっという間にエージェントと真帝国の子供達に包囲されてしまった。手首を捕まれ、口を塞がれては悲鳴も上げられない。

自分達はこのまま捕まってしまうのか。また影山の奴隷にされてしまうのか。

源田の脳裏をよぎったのは、最悪の想像。自分達を手の内に収めた影山が次、どんな行動に出るかは容易く知れた。

影山は異常なほど鬼道に執着している。きつと自分達を人質に鬼道を脅迫するだろう。そしてまた、鬼道が影山の支配下に置かれるような事が起きたら - -。

- - 駄目だ…絶対に駄目だ、そんな事…！！

また同じ悲劇が、繰り返されてしまう。

思い出すのは、影山の虐待と圧力に耐え、ボロボロになっていっ

た鬼道の姿。自分達はいつもそんな彼を見ているだけで、何も出来ずにいて。

彼の力になりたくて此処にいる筈なのに、これではまた鬼道の足を引っ張ってしまふ。やっと影山から解放されて、前を向いて歩けるようになった彼の。

それだけは避けなくてはならない。そう思ったのは源田だけではなかったようだ。この命に代えても、影山に囚われるのだけは避けなくてはならない――と。

「ぐあっ!!」

悲鳴が二つ上がった。佐久間に手を噛まれた男と、源田に思い切りタックルをくらった男の。

「に、逃がすかつ!!」

暴れに暴れる二人に、伸びてくる幾つもの手。大人の手に子供の手。それを必死で振り払わんと抵抗を続ける源田達。

がむしゃらに暴れて、やっとその群集から抜け出して――走り出そうとした、その時だった。

ガンッ!!

源田のふらついた体が、勢いよく何かにぶつかる。それは倉庫街に積まれた、鉄骨や角材。本当はしっかり縛って置いておくべきところを、責任者がいい加減だったのか乱雑に積み上げられていただけだった。

それが災いした。

ぶつかった拍子にバランスが崩れ――それらが源田の上に、土砂崩れのように落ちてきたのである。

「源田あつー！」

ドンツ！と背中にタツクルをくらって、源田は転がった。轟音。衝撃。激痛。ああその時のショックをどう説明すればいい――手を縛られていたせいで受け身をとる事も叶わず、その少年は悲劇に成すがままだった。

「う……ぐ……っ」

背中と胸が、焼け付くように痛い。それでもどうにか少しだけ身体の向きを変えて、後ろを振り返った。

そこには滅茶苦茶に崩れ落ちた鉄骨と角材の山が。酷い有様だ。多分真帝国の奴らは逃げ出したのだろう――いなくなっている。

立ち上がろうとして、脚がおかしい事に気付いた。

「――ッ――！」

右の脹ら脛まで、角材の山に埋もれている。いや、それだけじゃない。源田は見た。自らの頭から、身体から、勢いよく滴る紅い滴を。

そして理解した。背中に何本も、細い鉄骨が突き刺さっている事を。

ひきつれた悲鳴が喉から絞り出される。押し寄せる激痛の波の中で、どうにか佐久間の事を思い出す。自分のすぐ側にいた彼は何処に――。

「あ……」

いた。見つけた。

「ああ…あああ…」

見つけて、しまった。

「あああああああつ！！」

重たい角材の一番下から。褐色のほつそりとした腕と、水色の髪が覗いている事を。

その下からじわじわと真つ赤な海が広がっていく事を。

まさか、さっきの体当たりは。佐久間は自分を庇って、あの下敷きに…あれでは、もう。

…何でだ…何でだあつ！！

叫ぶ事は出来なかった。源田はガハツ、と大量の血を吐いた。急速に身体から力が抜けていく。源田の周りも血の海だった。その中に、ダイブするように沈みこむ身体。

どうしてこんな事になってしまうのだろう。自分達は何を間違えたのか。こんな所で。こんな惨めな死に方をしなければならない？どうして？

ただ、鬼道の役に立ちたかったただけなのに。ただ、普通に、当たり前のサッカーをしたくて…ただそれだけで。

…鬼道は…いつも俺達の前じゃ涙なんか見せなかったけど。

緩やかに霞みがかっていく意識の中、源田は思う。痛みすら薄れつつあるとなると、これはいよいよマズいのだろう。真帝国の奴らが救急車を呼んでくれるとは到底思えない。

このまま自分達が死んだら。そしてそれを鬼道が知ったなら。

- 泣かせてしまっただろうか。そんなの…嫌、だな。

嫌だけれど、もはやどうしようもない。源田の思考が諦めに落ちようとした、その時だった。

災禍の魔女が - 現れたのは。

「お生憎様ねえ。数ある運命の中から、最も残酷な道を選んでしまっただなんて。これも必然かしらね？」

源田の視点からは、真っ赤なヒールを履いた足首までしか見えなかったが。

女が目の前に立っている事だけは、分かった。

「……誰…？」

血に塗れた唇で、どうにかそれだけを絞り出す。掠れた小さな声だったが、女の耳には届いたようだ。

「あたしは魔女。最も残酷にして偉大な、災禍の魔女よ。この世界での名前は、二ノ宮蘭子」

くすくす。女は笑っているらしい。

「ねえ貴方…望みはある？あたしは魔女だから、叶えてあげられるかもしれないってよ。代価はきっちり貰うけどね」

魔女。その言葉を馬鹿らしいと笑う気力など、源田には残されていなかった。魔女だろうと悪魔だろうと人間だろうと - 何でもいい。

望みを、叶える。その言葉に源田は縊ってしまった。それこそ、藁をも掴むような心地で。

「助け…て…」

助けて。お願い、助けて。

「さくま、を…たすけて…」

自分のせいで、彼が死ぬような事があつてはならない。自分のせいで誰かが傷つくのを見るのはもうたくさんだ。

自分が生きたくなかったわけじゃないが。源田が何より最初に願ったのは、それだった。

魔女に助けを求める事が、どれほど危ない賭かも知らないで。

「…いいわ。助けてあげる。佐久間君も…貴方もね」

急速に視界から光が失われていく。ブラックアウトの寸前、最後に拾ったのはこんな言葉だった。

「ただし…貴方達は今日からあたしの玩具にして駒よ。あたしの為に働いて貰うわ…壊れるまでね」

「げ…源田と佐久間が…死んでいただって！？それも鬼道より先に

！？」

土門の驚きの声を、どこか遠い場所で聞く。

源田はガタガタと震えながら、両手で自らの肩を抱いていた。

そうだ――“思い出した”。

この背中への傷は、あの時降ってきた鉄骨によって負ったもの。自分分はあの場所で命を落とした筈だ。佐久間と、一緒に。

「どういう事……？二人が死んだなら、今此処にいる源田君達は何だっというの……！？」

ベンチから、夏末が叫ぶ。二ノ宮は飄々と、そしてあっさり言い放った。

「生き返らせたのよ。私の魔法でね」

「ば……馬鹿な……！！そんな事あるわけ……」

「無いって言い切れるの？証拠は？」

「……っ！！」

言葉に詰まる夏末。そうだ、自分も佐久間も魔法など信じて無かったのだ――そんなモノ有るわけがない、と。

あの日実際に、自分達が生き返るまでは。

あれだけの傷。仮に生き延びても、相当長い間治療が必要だった筈。ところが源田と佐久間が目覚めたのはその翌日で、負った筈の怪我は綺麗さっぱりなくなっていたのだ。

「悪魔の証明……か」

一之瀬が苦い顔で呟く。

「悪魔が“いる”事を証明したければ、実際に悪魔を連れて来れば済む。だが悪魔が“いない”事を証明するのは遥かに難しい……」

「頭がいいのねボウヤ。その通りよ。悪魔の証明は、魔法にも当て

はめる事が出来るのよね。尤も、人間は頭が堅いイキモノだから…実際に魔法を見ても、簡単には信じようとしなのだけど」

少なくともこの場で魔法が“存在しない”事を証明するのは不可能に近い。そういう事だ。

「この世に“有り得ない”事は“有り得ない”の。覚えておきなさい」

二ノ宮はにつこりと笑う。衝撃的な話を語るにはあまりに不似合いな笑顔で。

源田の心を、あまりにも重たい恐怖が塗り潰していく。自分達は死んだ。それなのに生き返った。

だが本当の問題は…ここから先なのだ。消されていた記憶の恐ろしさに、言葉も出ない。そうだ、自分は全て見ていた筈なのに、忘れさせられていた。

あの魔女の手によって。

「…さて大事なのは此処から先。佐久間クン源田クンをスカウトするように不動クンに命じたのはあたし。でも不動クンは、大事な大事な人材を殺してしまい、あたしの手を煩わせたわ」

ビクリ、と膝をついた不動の肩が震える。

「まあその時点で…お役御免にされても仕方なかったんだけど？あたしってば優しいから、ちょっとだけ挽回のチャンスをあげたのよ」

二ノ宮はポケットから何かを取り出して掲げる。それは携帯電話だった。ベージュ色の、auの最新機種…源田には見覚えがあるものだった。

「コレ、佐久間クンの携帯電話。不動クンに、盗んでくるように命令したの。何に使うかまでは教えてあげなかったけどね」

そうだ。佐久間の携帯。買い換えて半年程度しか経っていないのに、真帝国学園に来てすぐ紛失したと大騒ぎになったのだ。

まさか。二ノ宮が不動に盗ませていたとは。

「もう分かるわよね？そうよお、あたし。あたしがあの日帝国学園に、鬼道クンを呼び出したの」

悲鳴にならない悲鳴が、あちこちから上がった。

鬼道を、あの倉庫に呼び出した携帯を、二ノ宮が持っていた。それはつまり――。

「あたしは最後にトドメを刺しただけ。でもずーっと見てた。見たのよ…教えてあげましょうか？」

ニイ、と。まるで口裂け女のように――真つ赤なルージュが凶悪につり上がる。狂気と、快楽と、喜悦を最悪の組み合わせで掛け合わせたような――そんな笑みの形に。

「ずーっと見てたわ。」

待ち伏せに気付いたあの子の驚愕に染まった力才も。

いきなり蹴り飛ばされて、軽く吹っ飛ばされちゃったところも。腕を叩き折られて悲鳴をあげるところも。

肋骨を一本ずつ叩き折られていくところも。

男達に滅茶苦茶されて、涙を必死に堪えるところも……」

やめて。

もうやめてくれ。

それ以上、言わないでくれ。

「その中に大好きな仲間の顔を見つけて、その顔を絶望に染め上げるのもね……！」

源田は頭を掻き篦り、絶叫した。

そうだ。そうだ。そうだ。

望んでなどいなかったのに。

自分達が、鬼道を殺した。

【1 - 25・噛み千切る、理性】

不慮の事故により、死んだ筈の自分達は。二ノ宮の“魔法”により、生き返る事となる。

目覚めた源田は、既に黒い感情に支配されていた。即ち、自分達を捨てて雷門に行ってしまった、鬼道への憎しみに。それは佐久間も同じ。

『悦びなさい。恨みを晴らさせてあげるわ』

二ノ宮はそう言つて、自分達を甘く誘つた。気付いた時、愛媛にいた筈の自分達は一瞬にして東京の――帝国学園にいたのである。

これも彼女の魔法なのか。何かをおかしいと感じる心すら、その時の源田には失われていた。

自分達の他に。二ノ宮は男を三人連れていた。黒服姿の、ガッチリした体格の男達だ。彼女の直属の部下だろうか。

二ノ宮と男達と、自分と佐久間。六人で、例の体育倉庫で待っていた。電気もつけずただじっと息を殺して。

鬼道が扉を開けて入って来るやいなや――男達が素早く彼を中に引きずりこんだ。鬼道には抵抗する間も悲鳴を上げる間も無かつただろう。大人と子供の腕力差体格差は決定的な上、元々鬼道は華奢な部類に入るのだ。

扉は重たい音と共に閉じられ、鍵がかけられる。鬼道が男達に押さえつけられたところで、電気がつけられた。

『佐久間：？源田：？これは、一体：！？』

『久しぶりだな、鬼道』

戸惑いを隠せない様子の鬼道に、佐久間が淡々と言う。

戸惑い――そう、あの時の彼は驚愕より戸惑いが大きかった。この見知らぬ男達と女は一体誰なんだ、とか。何故自分はこんな風に

拘束されるんだろう、とか。

自分がこれから酷い目に遭わされるとは思ってもいない。源田を、佐久間を、信じきっている人間の――眼。

それが、酷く苛ついて。

『俺達が何で怒ってるかも……分からないのか？鬼道』

じり、と源田は彼の目の前に立ち、ゴーグルをやや乱暴に外した。切れ尾の、ルビーの瞳が露わになる。

『うつ……』

目元に僅かに走った痛みと、突然瞳を襲った眩しい光に、鬼道は顔をしかめる。

何故彼がゴーグルをつけるようになったか。それは己の表情を隠す為と――もう一つ。健常者よりも、光に弱く、ある一定以上の明るさの下では視界が真っ白になってしまうからだと聞いている。

彼がそうだったのは身体的な事ではなく――影山の虐待によって後天的に、精神的なものが原因だという事も。

『全部お前が悪いんだよ』

かつて、その瞳の色が綺麗だと思った。宝石のようだ、隠すなんて勿体無い――と。

だが。今はその色すらも忌々しい。

込み上げる激情に任せて、源田は彼の腹を蹴り飛ばしていた。

『がはっ……!!』

スパイクが、柔らかい腹と堅い肋の感触を知る。そのタイミング

で男達が手を離すものだから、痩せつぽうちの鬼道の身体は壁の方まで吹っ飛ばされた。

激しく咳き込みながら、転がる鬼道。その前に佐久間がつかつかと歩み寄り、胸を蹴りつける。

『俺達はずっとずっとお前に尽くして来たんだ。なのに…』

普段よりずっと低い声で呟く佐久間。背を向けた彼の表情は、源田の方からは見えなかったが。

みるみる驚愕に染まる鬼道の顔が、その全てを物語っている。

『お前はあっさり俺達を捨てて雷門に行った…！仇討ち？誰がそんな事してくれて頼んだよ、ええ？お前は強い奴らの仲間になって勝ちたかっただけじゃねえか。その程度なんだよなあ、お前にとって仲間なんて…！！』

鬼道の胸倉を掴み、持ち上げる佐久間。佐久間の方が鬼道よりも背が高いので、目線を合わせようとすると鬼道の踵が浮く形になる。憤りに憎悪。暗い感情で震えている佐久間の背中。

『ふざけんな…！！これほど敬い、尽くしてきた俺達をお前は否定したんだ…っ。この裏切り者がああっ！！』

叫び、彼は思い切り鬼道の身体を地面に叩きつけた。肩口から落下した鬼道に、更に何度も蹴りを食らわせる。

そのたびに上がる呻き声。だが、源田は気付いた。鬼道がまるで抵抗らしい抵抗をしていない事に。

頭にすっかり血が上っている佐久間を押さえこみ、源田は一步前に出た。

『鬼道。…どうして抵抗しない?』

まだ、少なくとも足は無事な筈。逃げようと思えば逃げる体力はある筈だ。なのに、何故。

暴力から僅かばかり解放され、咳き込みながら。掠れた息で、鬼道は言った。

『……すまなかった』

紅い眼は、朧気にしか自分達を映していないだろうが。しかしハッキリと眼があつたのを源田は感じ取った。

『すまなかった。俺の勝手に…お前達を傷つけてしまって。自分の都合だけで行動して…本当に、すまない』

命乞いではなかった。心からの謝罪だったと後になってみれば分かる。

『俺はお前達にずっと感謝していた。お前達がいたから、どんな場所でもずっと戦って来れたんだ。その恩に報いるつもりが…あだで返す結果になって…謝っても、謝りきれない』

でもそんなしおらしい態度すら。

『俺にぶつける事で…お前達の気が済むなら。…それでいい。全部、ぶつけてくれ』

苛立ちを増す要素にしか…ならなくて。

『だったら…望み通りにしてやるよ!!』

鬼道は、理解していない。天才ゲームメーカーとして、フィールドの上で周りの動きを読むのは得意中の得意なのに――自分に向けられる好意に対してあまりに鈍感すぎる。

自分はどんな状況にいても、他者に惜しみなく愛情を注ぐのに。自分に注がれている愛情にはまるで気付けない。

それは幼くして両親を失い、“自分が守らなければ”という切迫感の中で妹を護り続けてきた事。そして父にも等しい存在である筈の影山から、暴力による歪んだ愛を受け続けてきたせいなのだろう。己に愛される資格など無いとすら、思っているのかもしれない。だから、見えない。自分がどれほど周りに想われているのかも、自分がどれほど周りに影響しているのかも。

鬼道は謝った。確かに、謝った。

でもそれは、『自分達を置いて雷門へ行った事』であつて。『自分達の愛情にあまりにも鈍かった事』への謝罪ではないのだ。

『お前は何も分かつちやいない……分かつてない分かつてない分かつてないっ――！』

横たわる鬼道の身体を、佐久間と二人がかりで何度も何度殴り、蹴った。

悔しくて仕方ない。どうして解らない？どうして気付かない？自分達がどれほど鬼道を信じてきたか。どれほど想ってきたか。

『お前のせいで何もかも滅茶苦茶だ――！帝国も……俺達のサッカーもっ――！』

嫌な音が複数回。多分、肋骨や鎖骨がイカれたのだろう。手首をスパイクで思い切り踏みにじってやったら、脚の下に鈍い感触があつた。手首も砕けたのか。それでも鬼道はずっと、悲鳴を

喉の奥で殺していた。

『…それで気は済んだかしら?』

やがて。ずっとニヤニヤしながらリンチを見ていた二ノ宮が口を開く。

気が済んだ? 済んだ筈がない。殴れば殴るほど、胸の奥のドス黒い炎は増すばかりだ。

『貴方達、やる事が大人すぎるわ。まあそれはそれで一興なんだけど。どうせなら…その子が一番苦しむ事をやっておあげなさいな』

一番苦しむ事?

戸惑う源田をよそに、女は証明の一部を落とした。薄暗くなる室内。もうまともに動けない状態の鬼道を、二人の男達が左右から押さえつける。

眼が暗さに慣れない。それでもチカチカする景色の中、源田は確かに見た。

先程まで僅かに苦痛の色を滲ませるばかりだった鬼道の顔が――恐怖に彩られたのを。

『あ…ああ…』

男の太い指が、少年の髪を乱暴に掴む。髪留めがちぎれ、ドレッシングがほどけた。もう一人の男の手には――ナイフ。

『お前が悪い子だからいけないんだよ』

三人目の男が、鬼道の耳元で囁く。

『だからこれは、お仕置きなんだ』

何故この男を二ノ宮が選んだか、気がついた。声が似ているのだ

- - あの人に - - 影山に。

鬼道の頬を、涙が伝った。そして、言った。

『ごめんなさい...』

流石に、ぞつとする。今まで見た事もない、怯えた子供の顔。鬼道はまるで壊れた機械のように言葉を紡ぐ。

『ごめんなさい...ごめんなさいごめんなさいごめんなさい...』

鬼道の心に深く刻まれた心の傷を。二ノ宮は嬉々として抉ってみせたのだ。影山に虐待されていた時とよく似た状況を作り出す事によつて。

今、鬼道には男の姿が影山に見えている。フラッシュバックに、現実が見えなくなっているのだ。

『おやりなさいな』

二ノ宮が高らかに命じた。男の手に持ったナイフが振り下ろされる。何度も、何度も。肌を切り裂く音。上がる悲鳴。しかし男達に押さえつけられている鬼道は逃げられない。

精神的な苦痛と肉体的な苦痛で、錯乱状態になっている筈だ。

血の匂いが強くなる。肌と一緒にビリビリに引き裂かれて、赤黒く染まったマントが地面に落ちた。さらに暴力は別の方向へも向かう。まさしく鬼道が今まで影山にされてきた全てを再現するように。ころん、と鬼道の折れた足首から運動靴が脱げ落ちた。靴下もとうにビリビリで本来の用途を果たしていない。

色の白い素足を、血が何本も筋を引いて伝い落ちていく。

『ほらもつともつと泣き叫びなさいな！！あたしを楽しませて頂戴
！！』

二ノ宮が嗤う。嗤う。嗤う。源田も佐久間も動けないまま、ただ目の前の凄惨な現場を見ていた。

ボロボロにされていく自分達の元リーダーから、目を離す事が出来ない。

『ち…違う…』

みしり、と胸の奥から鳴った音。ずっと気付きながら無視していた音。

歯車が噛み合わずに擦り切れていく、音。

『こんな…こんな事したかったわけじゃ…』

源田の呟きに、二ノ宮が振り返る。心底蔑むような眼で。

『あら、今更何言ってるの。貴方達、鬼道クンが憎くてたまらないんでしょ？鬼道クンに復讐してやりたかったんでしょ？』

『でも…ここまでやる必要はっ…』

『散々殴ったんだから、貴方達もとつくに共犯。今更被害者ぶらないで頂戴』

男達に代わる代わるのしかかられる鬼道と、眼があつた。源田の顔を映したせい、か、少しだけ正気の色が見えて。

『すまな、かった…』

消え入りそうな声。彼はまだ、自分達へ謝り続けていた。こんな

悲惨な目に遭わされているのに。

『ありが、とう…』

どうして。

本当に裏切ったのは鬼道じゃない。自分達の方だと言っているのに。

どれくらい時間が経ったか。男達がまるでゴミのように、鬼道の身体を投げ捨てた。全身を血で真っ赤に染め上げ、ビリビリの服が僅かに肌に纏わりついているだけの――ボロ雑巾のような姿。それでもまだ、生きている。虚ろな眼で宙を見ながら。

『さあ…トドメを刺しなさい』

二ノ宮にナイフを握らされた。鬼道の血がべったりついた、ナイフを。

『いや…嫌だ…っ』

こんな筈じゃなかった。

ただ鬼道が気付いてくれればそれで良かったのに。

『うわあああつー！』

ナイフを投げ捨て。そこで源田は、ショックで気を失ったのだっ
た。

【1・26・終末の、ラブソディア】

嗚咽が響く。源田が泣いている。血の海の中、佐久間を抱きしめたまま、瀕死の体で弱々しく涙を流している。

他の者達は、涙さえ流す事が出来ない。あまりにも衝撃的な話に、あまりにも惨たらしい真実に。

「愉しかったわあ。あそこでこの子が殺ってくれたら最高の作品だったのに。まさかあの程度でクラッシュするなんて…おかげで記憶は消さなきゃいけないし、二度手間だったわ」

二ノ宮の笑う声を、塔子はただ呆然と聞く。脳がまだ、事実を受け付けてくれずフリーズしているのだ。

「で、仕方ないから、あたしが情けをかけてあげたわけ。気持ち良かったわよ…刃が肉に食い込んでいく感触！直に伝わる、弱々しい鼓動！！…あれは何回繰り返してもクセになりそう…っ！！」

女は醜惡な笑みを浮かべて、嬉々として自らの殺人を語る。

この女が、全てを壊した。

源田と佐久間の死の原因を作り、影山を煽り、源田達の意志をねじ曲げて弄び、彼らを惨劇に無理矢理荷担させて。

彼らから、自分達から。

鬼道を永遠に奪い去った。

「……ッ！！」

怒りと憎しみで、一気に目の前が真っ赤になる。この女が全ての元凶。この女がこの女がこの女がこの女がこの女が！！

これほどの激情を、十四年の人生で味わった事があつただろうか。

「やっぱり…全ては貴様の仕業だったのか…」

しかし。

塔子が持っていた銃を抜くより先に。

「ブツ殺してやるッ、アルルネシアアアアアア - - ! ! !」

誰よりも冷静に見えた、聖也が。

絶叫と共に、二ノ宮に踊りかかっていた。

ガキインッ!!

聖也がどこからともなく取り出した、鍵のような形の、赤と青二本の剣。それは二ノ宮の寸前で、見えない壁のようなものに阻まれた。

「殺してやる…殺してやる殺してやる殺してやるッ!!
てめえだけは赦さねえ…一度殺すだけでも飽き足らねえッ!!」

修羅の形相で、力任せに剣を震う。行き場の無い殺意を叩きつけ

るように。

しかし二ノ宮は涼しい顔だ。

「生きたまま腸引きずり出して食ってやるっ…死んだらまた生き返らせて、何万回だって殺して…無間地獄に叩き落としてやるっ!!」

聖也の怒声と雰囲気の恐ろしさに、誰もが声をなくしていた。飛びかかる寸前だった塔子ですら。

いつもおちゃらけて、お馬鹿で、鬼道が死んだと聞いた時も冷静に皆を慰めていた彼が…こんな姿を見せるだなんて。

それに…アルルネシア？

二ノ宮の事だろうか。

「その名前を知ってるって事は…なるほど、貴方キーシクスね。あまりにも力を感じないから気付かなかったわ」

小馬鹿にしたような顔で言う二ノ宮。

「無様ねえ…かの終焉の魔女、キーシクス卿ともあるう人物が、そんな惨めな姿になっちゃって。あたしを追って来たのかしら？干渉値を護る為に、ガチガチに能力を制限した貴方なんか…怖くもなるともないわよ？」

「黙れメス豚があっ!!」

聖也が吼える。憎悪に満ちた凄まじい形相で。

「何故だっ…何故あいつらを巻き込んだ!?何故鬼道を殺したっ!!あの子はやっとな…やっとな自由になれたんだぞ…っ。やっとな願いを叶えてやっとな…影山と決着をつけようとしてたのに!!仲間の元へ帰ろうとしてたのに…っ」

そうだ。

鬼道には帰る場所があつたのだ。
帰りを待つ仲間達がいたのだ。
それなのに。

「返せよ…っ鬼道を返せ！人殺し！！」

その言葉に、二ノ宮が弾けたように笑う。蔑みきつた声で。

「貴方がそれを言うの？今まで何万もの世界を滅ぼしてきた魔女の貴方が！！お笑いねっ…くだらない情に振り回されるから何の望みも叶わない！！誰も護れない！！だから愉しいのよ…貴方みたいな人を喚かせるのは！！」

「黙れええっ！！」

聖也は叫び、刃を高々と振り上げた。しかし。

「やめて聖也さん…！！」

その動きは中途半端に止められる。

「闇に吞まれちゃ駄目…そんな人の言葉に耳を傾けちゃ駄目…！だつて貴方は…白き魔法使いなんだ…！！」

吹雪が。後ろから聖也に抱きついていていた。涙を流しながら。

「ふぶ…き…」

聖也の眼から急速に、黒い焰が消える。不思議だった。あれだけ空間を満たしていた恐ろしいまでの威圧感が、吹雪の言葉と共に消失したのだから。

「貴方は誰かを不幸にする魔女なんかじゃない…！その人とは違う

…違っただよ…」

聖也の手から、剣が滑り落ちる。鍵の剣は地面に落ちると同時に、溶けるようにして消えてしまった。

「吹雪…ごめん。情けない姿…見せちゃって」

泣き出しそうな、子供の顔。普段の聖也に戻っていた。いつもの彼からは予測もつかないほど自信なさげで、弱々しかったが。

「なーによそのハートフルドラマ。つまんないわねっ」

二ノ宮は子供のように口を尖らせる。誰もがキツと彼女を睨みつけた。

聖也に出鼻を挫かれる形となったものの、皆の気持ちは同じなのだ。彼女が自分達の大切な仲間を奪った。

間違いない。誰もが直感しただろう。

この女こそ自分達が倒すべき真の敵にして、黒幕なのだと。

「つまんないから…さっさと終わらせちゃいませよ。さあ、何人が生き残れるかしら？」

「何をする気!？」

秋が叫ぶ。魔女はニヤリと笑って、パチンと指を鳴らした。

「ファイガ」

その瞬間。潜水艦を、轟音が襲った。爆発音。塔子はハツとして辺りを見回し…気付いた。向こうからモクモクと黒煙が上がっている事に。

まさか機関部を爆破したのか!?

「またどこかで逢いましょう、可愛い坊や達。生きてたら、の話だ

けどね」

「待てっアルルネシア！」

「ご機嫌よう」

二ノ宮の周りを、黒い霧が取り囲んでいく。聖也が憤怒の表情で低く唸った。

「覚えとけ…てめえは必ずオレが殺す。鬼道や佐久間達の痛み…何千倍にして返してやる…!!」

ひらりひらりと舞う黒い蝶の群。その中に埋もれていく中、二ノ宮は最後まで厭らしい笑みを浮かべていた。

「やれるもんならやってみなさい？ふふふ…きゃははははっ…!!」

やがてその身体は全て蝶に覆われ、消えてしまった。後には、目の前の急展開とファンタジーに呆然とするイレブンが残される。

再び爆音。フィールドの向こう側には、ちろちろと火の手が上がっている。

急いで逃げなければ。しかし…どうやって？

「佐久間ッ！！源田！！しっかりしろ！！」

土門がぐったりと意識を失っている佐久間達に、必死で声をかけている。まだ息はあるようだが、あの出血量は危ない。元より禁断の技のせいで、二人の身体は限界だったのだ。

そして彼らだけではない。雷門の方にも怪我人は続出している。普通に走るのも厳しそうな者もいる。

いずれにせよ此処は海の上。このままでは逃げ場がない。救命ボートを探して脱出しなければ…しかし間に合うか？それにこの船の乗務員は？

「総帥ッ！！」

照美の声。塔子はハッした。さきほどまで試合を見ていた筈の影山が、いつの間にかいなくなっている。

「総帥ッ何処ですかッ！？総帥・・・ッ！！」

「あ、アフロディー！！待てっ危険だ！！」

影山の名を呼びながら船内へと入っていく照美。あまりにも危険すぎる。それに彼の身体もボロボロな筈だ。

塔子は慌ててその背中を追いかけた。

これが報いか。

影山は一人、高台で空を見ていた。鈍色の空は重く、湿った潮風を吹かせている。いつそ雨が降ればいい。嵐のような大雨で全て洗い流してしまえばいい。

人の罪は結局・・・どう足掻いても清める事はできないのだから。

・・・罰を受けるべきだったのは・・・鬼道ではなかった。それなのに。

下方からは、断続的に爆発音が響いている。いずれこの船は沈むだろう。たくさんの悲しみと、憎悪を、暗い海の底に呑み込むに違いない。

それが自分の運命なら、受け入れよう。そもそもこの年まで生き長らえたのが奇跡のようなものだ。本当なら自分は幼い頃、父の手

で殺されていた筈なのだから。

今、影山は考える。

何の為の生だったか、そして何の為の死だったかを。

父が死に母が死に。憎悪に身を焦がしながら耐えていた自分。そこに現れたのがあの魔女だった。魔女は甘く囁いた――お前の心は復讐でしか晴れない、と。

幼い影山は魔女に誘われるまま雷門の敷居を跨ぎ、復讐の為に円堂大介の率いるチームに入った。

そして起きる、イナズマイレブンの悲劇。しかし実のところそれは、影山が直接の原因ではない。バスに細工したのも、影山の名をかたつて出場を辞退したのも、あの魔女の仕業だったのだから。

厚意でした事だと、二ノ宮は告げた。しかしその真意が今なら分かる。彼女はただ自分が愉しみかっただけだと。事態を引っ掻き回し、チームメイトから恨みを買うように仕向け、影山の逃げ道を塞ぎ。

そうやって影山が壊れていく様を見て笑っていただけなのだ。

鬼道の事についてもそう。彼女はエイリア皇帝陛下を護る為に手を回したと言っていたが、実際はただ鬼道を玩具のように弄びたかっただけ。あの話を聞いて漸く理解した。

自分は従うべき人間を、継るべき存在を誤った。自分は間違っていたのだ、と。

――父を追い詰めたサッカーが憎い。その原因を作った円堂大介が憎い。

その黒い焰は今でも消えていない。
でも。

- 本当の意味で私を不幸にしたのは他の誰でもない…私自身だった。

憎しみでするサッカーは、楽しいものではなかった。圧倒的な力を持つ駒で、弱者を踏み潰した瞬間は、確かに喜悦を伴うもの。

しかしどれほど強い駒を集めても満たされなかった。勝利の次の瞬間、胸の奥に穴のあいたような虚しさが込み上げ - それを振り払うように、また次の勝利を求めてきたのだ。

まるで薬物中毒者のように。

- 常に勝利し続ける最高のチームを作り上げれば…満たされると思っていた。でも。

そんなモノは存在しなかった。そして自分にとって最高傑作と呼ばれた戦士は、勝利だけを自分に提供する存在ではなかったのだ。

敗北を知り、絶望を知り、その上で立ち上がり続けた鬼道有人。彼と、彼の愛する仲間達こそ、最高に限りなく近い強さを持っていたのだ。

彼らのサッカーは影山に教えた。負けて立ち上がる強さに勝るモノは無いのだと。

- お前を失ってから、気付くだなんてな。

『そうすい』

たどたどしい言葉で自分を呼び、小さな手でこの手を握り。施設から引き取ったばかりのあの子を思い出す。

彼はきつと自分を最期まで憎みながら死んでいったのだろう。けれど、自分は。

ドォン！！

一際大きな振動が来た。バランスを崩し、影山は高台の下へと放り投げられる。

――ここまで、か。

自分は間違いなく、鬼道と同じ場所には行けないだろうけど。

――出来る事なら、もう一度だけ。

もう一度だけ、あの子の顔を見たかった。

影山がそう願った時だった。

「零治ッ！！」

影山の手を、掴む手があった。

【1・27・しあわせな、ゆめ】

影山は呆然とその姿を見ていた。

自分はあらゆるモノを利用し、裏切り、捨て去って此処にいるのだ。今更誰かの助けなど期待していないし、助けるようなお人好しに心当たりも無い。

なのに。

今自分の手を握り、引き上げようとする手がある。

一体、どうして？

「ごめん。…本当にごめんね。こんなに…遅くなってしまつて」

影山の手を握る少年 - 聖也はそう言つて、はらはらと涙を零した。

「四十年も、かかっちゃつた。でもやつと…やつとまた、君に辿り着けた。この手を握れた」

温かな雨が、風に舞つて影山の手に落ちる。四十年 - 何の事だろう。影山は少年の顔に、全くといっていいほど見覚えがない。

そもそも目の前の彼は、四十年前に生きていた存在には、とても見えないのだが。

「思い出して。君が俺に、教えてくれたんだよ。人を幸せにする、とつておきの力を」

聖也は目に涙をいっぱい浮かべて、切なげに笑つた。

「サッカーは大好きな人と仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法……そうだろう？」

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

「……！！」

それは、影山が幼い頃信じていた魔法。大事に大事に抱きしめ、しかし家族の離散と同時に捨て去った魔法。それを知っているとは――まさか。

「お前：キーシクス：なのか？」

青みがかった黒髪。切れ尾の、群青の瞳。整った顔立ち。それらには確かに――あの頃影山が共にサッカーをしていた、女性の面影があった。

「俺は魔女だから。持っている姿は一つじゃないし、君よりもずっと長い時間を生きてきたよ」

よくよく聞いてみれば声も似ている気がする。女性にしては低めで、青年よりは少し高い、そんな中性的な声。

信じられない。いや、しかし実際に魔女は存在したのだ。二ノ宮が魔女ならば、他にも魔女がいても、おかしくはない。

「でもね。君は俺が知るどんな魔法より素敵な魔法をくれたんだ。何十年経っても…君の事を忘れた日なんて、無かった」

聖也の、影山の手を握る力が強くなる。その温もりが教えた。これは夢でも幻でもない現実であると。そして。

「助けに来たよ、零治。今度こそ、君を助ける。あの時出来なかった分まで、君を護る」

彼は本気で、自分を助けたいと願っている事を。

「……何故だ」

声が震えた。情けないくらいに。プライドが山のように高い影山からすれば、許せる筈もない事。

しかし今は、羞恥を感じる余裕すら無かった。ただ何故、という疑問だけが脳髓に満ちていた。

「私は君と仲間達を殺しかけたんだぞ。地区大会の…あの試合で」

地区大会決勝。帝国と雷門の二度目の戦いで、影山は雷門のフィールドに鉄骨を降らせるといふ暴挙に出た。それこそ、雷門イレブンを皆殺しにするくらいのもりで。

しかし、事前に罠を察知した鬼道が円堂に、イレブンをディフェンスラインまで下げさせたせいで、誰一人落下の下敷きにはならなかった。

地面に突き刺さった鉄骨が、豪炎寺目掛けて倒れてきた時は、聖也が彼を庇った。結果聖也は脚を粉碎骨折する重傷を負い、以降のフットボールフロンティアの試合に全く出られなくなってしまった

のである。

恨まれていない筈がない。そう思っていたのに。

「でも、結局誰も死んでない。…俺が豪炎寺を庇ったのは、豪炎寺を助ける為だけじゃなかった。…俺なら下敷きになっても、死なないと思ったからなのさ」

少年の眼に、憎悪の焰は無かった。少なくとも影山に向けられるような暗い感情は、何も。

「君にこれ以上…手を汚して欲しくなかったから。全てはそんな、俺のエゴ」

何を馬鹿な事を。

もうとつくに自分の手は血に染まっている。この身体も、魂も、心も、どうしようもない程醜く汚れきっているのだ。なのに今更何を！

そう笑い飛ばそうとしたのに、出来なかった。聖也の身勝手さを嘲る事が、どうしても出来なかった。

この感情の名前も知らないのに。

「私は…鬼道を追い詰めた。毎日毎日、暴力を奮って傷つけた」

今でも恐ろしいほどハッキリ蘇る。暗い部屋。泣き叫ぶ声。謝る声。自分の怒声。もかく小さな手足。血の匂い。身体を濡らす朱。その日々のせいで、鬼道は一生消えない心の傷を負って。アルルネシアにそのトラウマにつけ込まれ、苦しんで苦しんで死んでいった。

「私が鬼道を殺したも同然だ。…誰かに赦される資格など、ない。」

影山はハッキリと悟っていた。自分こそが鬼道のあらゆる苦しみの根源であり、鎖だったのだと。

自分さえいなければ。自分にさえ出逢わなければ――きっとあの子は。

「…君は確かに鬼道を苦しめた。…でもね」

鬼道、気付いてたよ、と。聖也の顔が悲しげに歪む。

「本当は同じだけ、零治が苦しんでたって事も。零治が本当は…我が子のように鬼道を愛してたって事も…全部全部、分かってたんだよ」

息を呑む。

それを聖也が知っていた事も驚いたし、鬼道が気付いていた事にも驚かされた。

「君は…お父さんに、普通の愛し方をして貰えなかったから。同じ事を、鬼道にしまってたんだね。…愛する事と傷つける事を、同じにってしまったんだ」

そうだ。そうなのだ――自分は。

「…そうだ」

影山の視界が緩やかに滲んでいく。

「私は…鬼道を愛していた。本当の息子のように」

自分は。当たり前のように、普通の父親にならなくてはと思った。しかし、虐待されて育った子供は、虐待する親になってしまったのだ。

愛すれば愛するほど手が出た。歪んだ愛は暴力に変わった。躰と称して、恐ろしい事もおぞましい事もして。駄目だ駄目だと分かっているのに繰り返してしまう。

自分が父にされてきたのと、まったく同じ事を。

「しかし結局、私はあの子の父親にはなれなかった。あの子を傷つけるだけ傷つけて、むざむざ死なせてしまった」

あの子をエイリアに関わらせたくなくて。鬼道の愛するモノに少しでも報いたくて、帝国学園だけは破壊しないよう上層部に進言した。

でも結局その程度なのだ。自分が彼の為にできた事なんて。

「あの子だけじゃない。私は関わる者に不幸ばかり振りまいてきた。私を信じたばかりに世宇子の子供達はみんな死に、佐久間や源田も……。馬鹿馬鹿しい。何が幸せの魔法だ」

自分は結局生まれてから死ぬまで、誰かを幸せにするサッカーなど出来はしなかった。

願っても願っても、想いの届かなかった父。救えなかった現実に絶望して、全てを諦めたのだ。

そう、自分の復讐の本当の目的は、世界を呪っての事じゃない。サッカーを憎いと思い込む事で、全てを諦めようとしたに過ぎないのだ。

「そんな事、ない……」

ハツとする。もう一つ。聖也よりも華奢で白い手が、影山の手を掴んだ。

「貴方は私に…人を愛する事を教えてくれた！独りぼっちの私に居場所をくれた！世界をくれた！！たくさんの絆をくれ、未来をくれた…！！」

照美だった。荒れ狂う潮風に金糸を靡かせ、本当の女神のように、彼はその手を差し出していた。

彼を捨てた筈の、影山に。

「間違っていた事は、たくさんあったかもしれない。でも何回だって言います。私は、貴方が教えてくれたサッカーが大好きです…！！貴方だって本当はサッカーが大好きだった筈です…！！」

『だから僕はサッカーが大好き！』

そうだ。

結局叶わない魔法だったけど。幻になってしまった魔法だったけれど。

自分はサッカーが大好きだった。

彼らと、同じように。

「アフロディ、お前は…今でも尚サッカーが好きなのか。私に手を差し出すというのか…」

どうして、なんて聞くだけ野暮かもしれない。

憎しみより愛を選ぶ。愛の女神の名に相応しく。

ああ彼はここに来て本当の神になったのかもしれない。偽りの、形だけの神ではなく。人間として、最高の神に。

「恩人を助けたい。そしてサッカーが好きだ。…それ以上に何の理由が必要なんですか」

誰かを救いたいと願う気持ち。

何かを、誰かを愛する気持ち。

ずっと忘れてきた、やっと思い出せた気持ちが、そこにある。

「…そうだよ、影山」

「…！」

照美の後ろから、意外な人物が顔を出した。

財前塔子。財前総理の一人娘にして、雷門ディフェンスの要。そしてデータにはあった…鬼道とは、幼なじみにして特別な関係にある可能性が高い、と。

「あんたは、あんたが思っているほど恨まれちゃいない。あんたが犯した罪が消えるわけじゃないとしても…間違った事、たくさんやってそこにいるんだとしても」

何故彼女が自分を助けようとするのか。鬼道を傷つけ続けてきた自分を、誰より恨んでいて然るべきなのに。

どうしてそんな…泣き出しそうな顔で自分を見るのだろう。

「少なくともあたし…知ってるんだ。鬼道はあんたを赦してなかったけど、でも本気で恨んでたわけじゃなかった。今の自分があるのがあんたのお陰だって事も…あんたのおかげでエイリアに帝国が潰されずに済んだって事も…気付いてたよ」

「……！」

「鬼道は…あんたを赦したがってた。だからあんたと決着をつけたくて…此处に来たくて…でも来れなくて」

少女の眼に、みるみる涙が溜まっていく。

「生きるよ、影山。あたしは…あんたを恨んでるけど。鬼道の恩人で、あいつに…サッカーを教えてくれた人に、死んで欲しくない！」

影山のサングラスが外れ、風に飛ばされていった。

黒いブラインドごしにしか見えていなかった世界が、突然クリアになる。

自分の手を必死で握る二人の少年がいた。自分を見て涙を流す少女がいた。

「…私は…とうに自分はこの世界に必要な存在と、そう思ってた。だから反発して、足掻いてやろうとしたのかもしれない」

やっと気付けた。

でも全てはあまりに…遅すぎて。

「私にはもはや救われる価値もない。…それでも君達は救いに来てくれて、鬼道もそれを望んでくれたというなら…それだけで、充分だ」

影山が何をしようとしているか分かったのだろう。三人の顔に絶望の色が走る。

「ありがとう。そして…すまなかった」

自分は鬼道と同じ場所には行けないだろう。最期の最期まで教える子達を苦しめるなんて、酷い大人だ。

それでも。これが自分に出来る最期の償いで、けじめ。

「君達が、生きてくれ。…これ以上、誰かを悲しませる事が無いように」

悪夢は。

悲しい夢はどうか、自分達で終わりに。

「零治……っ!!」

突風と共に、影山は聖也と照美の手を思い切り振り払っていた。
彼らの明日を、途切れさせない事を願って。

悲しい夢に、さよならを。

落下しながら影山零治は静かに眼を閉じた。

次に巡る世界が、訪れる未来が。

彼らにとって幸せな夢である事を祈りながら。

【1・28・汝、己が心の眼を信じよ】

照美を追って、潜水艦の内部に入ってしまった塔子。いつの間にかいなくなっていた聖也に影山。

吹雪の視界の端、そんな彼らを探しに行こうとした円堂が瞳子に止められるのが見えた。

「駄目よ円堂君！火の回りが早い…危険すぎるわー！」

「でも監督っ！！塔子達がっ！！」

その時、一際大きな揺れがフィールドを襲った。メンバーの誰もが立ち上がる事も出来ず膝をつく。爆発音…さっきよりも大きい。このままでは沈没は免れまい。

そして自分達も。

「うっ…！」

「そ、染岡君っ…！」

足を押さえて、真っ青な顔になってうずくまる染岡。応急処置では追いつかない怪我なのは明白だった。多分骨が折れている。この振動だけでも辛い筈だ。

「俺は…大丈夫だ」

脂汗を流しながらも、吹雪を気遣う彼。見ていて辛かった。自分はまだ、護られようとしている。護られる事しか、出来ない。

「俺の事より自分の心配しやがれ。お前だって怪我してんだろが」

優しすぎるよ、君は。

言いかけた言葉を、口の中で殺す。

北海道で初めて逢った時。明らかに吹雪に対して彼は喧嘩ごしだった。何故そんなに嫌われてしまうのだろう。心当たりの無い自分

は戸惑つてばかりいて。

その理由を、皆からそれとなく聞いた。豪炎寺という、染岡が唯一認めたストライカーがいた事。彼が理不尽な形でチームを離れさせられた事。

その豪炎寺の居場所を。吹雪に奪われてしまふのではないかと、畏れていた事。

- - -でも君は優しいから。少なくともそれを直接、僕に言う事は無かった。

本当にはブチ撒けたい怒りで溢れんばかりだっただろうに。不満と不安に喚き散らしたかっただろうに。

溜め込むしかなくて、でも隠すにはあまりに不器用で。

それが分かったせいだ。どんなに険悪な態度をとられても、少なくとも吹雪が染岡を嫌う事は無かった。彼の憤りも理解できないわけじゃない。

それに - - 今まで自分が晒されてきた悪意のない興味と比べたら、可愛い悪戯のようなものだ。

- - 言つても、良かったんだよ。豪炎寺君の居場所は豪炎寺君だけのものなもの。僕に奪う権利なんか、ないから。

自分がイナズマキャラバンに参加した理由は、他の皆のような正義感じゃない。ただ自分は自分の小さな世界を護りたかったに過ぎず、その手段を目の前に提示されたから従った、それだけの事なのだ。

必要とされないならば、自分が此処にいる意味などない。

そもそも自分は、弟の命と引き換えに、半ば彼の居場所を奪い去るようになつたストライカーになったのだ。これ以上誰かの大事な物を奪うような人間には、なりたく無かった。

でも。染岡は今の今まで吹雪に本当の意味で罵りの言葉を浴びせる事はなく。段々と吹雪を豪炎寺とは別の存在として認めてくれるようになった。

吹雪は豪炎寺の椅子を奪う事を望んでないし、周りは誰一人そんな解釈はしていない。そう気付いてか、いつしか仲間の一人として受け入れてくれるようになった。

彼は優しい。優しくて不器用だ。

男らしくて、思いやり深くて、強くて。友達というよりお兄さんのよう。吹雪は彼に友情と尊厳を同じくらい抱いた。彼のようになれたら、と。

- - 僕は、疫病神だから。僕が弱いから。みんなみんな、僕の前からいなくなってしまう。誰一人、護れない。

完璧な存在にならなくて。自分が完璧じゃないから、大事なものはみなこの手をすり抜けていってしまう。

父も。

母も。

アツヤも。

鬼道も。

「僕は…平気。大した怪我じゃないから。…でも」

怖い。怖くて仕方ない。

「やだよ。…染岡君までいなくなっちゃったら…僕は…っ!!」

これ以上、大切な誰かを喪うなんて耐えられない。

そんな事になったら、きっと自分は壊れてしまう。粉々に、硝子細工のように碎け散ってしまう。

失いたく、ない。

「怯えるなよ」

ポン、と頭の上に大きな手。

「…俺はお前が…本当は何に怯えてんのかは分からねえ。でも…怯えんなよ。信じろよ。…永遠な事なんて無いとしても…いつか必ず終わりは来るとしても」

その手の温かさに、その優しい声に、優しかった父を思い出す。痛みに顔を歪めながらも、染岡は吹雪を安心させようと笑ってくれている。不覚にも、涙が滲みそうになる。

「少なくともそれは今じゃねえ。例え離れる時が来てもいなくなる訳じゃねえ。少なくとも、俺は」

「染岡君…」

きっと彼は、豪炎寺の事を思い出しているのだろう。永遠なんてない。全ては変わりゆく。出会いと別れを繰り返して、人は今日を生きていく。その中には理不尽な事もたくさんある。

それでも。

離れても絆は消えない。縁が無かった事にはならない。染岡はそう信じる事で、試練を乗り越えたのだらう。

「君は…強いね」

そこにある、吹雪にはない本当の強さ。それが眩しくて、羨ましくて。

「僕も君みたいに…強くなりたいよ」

また一つ、大きな爆発音がした。衝撃に煽られ、二人してフィールドに倒れ込む。断続的な振動。地面にしがみつくように、上半身を起こすので精一杯だった。

それでも染岡の手だけは離さない。

もう失う事の無いように、強くその手を握りしめる。

どうすればいい。こんな状態では救命ボートを探しに行くところではない。瞳子が海上保安庁に連絡したようだが、その助けめ間に合うかどうか――。

「まだ早いぞ、雷門イレブン」

低い、落ち着きのある声が降る。覚えのある、しかし予想だになかった声が。

「え……？」

吹雪は顔を上げる。振動の波が一時的に収まった。またすぐ爆発が起きるのは明白だったが、それでもその人物を見上げる為に体を起こすには充分だった。

「まだ早い。お前達に、こんな場所で死なれては困る」

どうして。どうして彼が此処に。

「デザーム…!？」

吹雪が名を呼ぶと、黒髪の青年は小さく笑みを浮かべてみせた。前に逢った時より、顔色が悪いように見えるのは気のせいだろうか。

「何でお前…!？どうやって…」

染岡が口を開きかけ、あつと声を上げた。デザームが傍らに、黒いサッカーボールを抱えていたからだ。

あの黒いサッカーボールにはどんな手品か、何人もの人間を空間転移させる力がある。あれでエイリアは日本中を自由自在に飛び回る事ができるのだ。

デザームはわざわざその力で、沈没寸前のこの船にワープしてきたというのか。しかし何の為に。

「グラン様の御命令を…ひいては私自身の意志を遂行しに来ただけだ」

「グラン…様？」

また新しい名前が出て来た。彼の上司の一人だろうか。ガゼルより上の立場か下の立場か…いや、そもそも彼らの階級は一体幾つあるのだろうか。

「グラン様は事情により、まだ表舞台には上がれない。ゆえに私が代わりに来たまで…二ノ宮様の命令違反ゆえ、他のメンバーは連れて来れなかったがな」

そういえば、この場所にいるのはデザーム一人。イプシロンのメンバーは見当たらない。

それに…二ノ宮。その名前にズキリと胸の内が痛くなる。倒れて動かない佐久間と源田を見た。鬼道を殺し、不動と影山を利用し、佐久間と源田を追い詰めた魔女。

彼女の命令違反な事を、“グラン様”とやらはデザームに命じたというのか？

「助けに来てやったと言っているのだ」

その言葉に、誰もが目を見開いた。

「二ノ宮様は、お前達が生きようが死のうが構わないと思っているらしいが。私は困る。我々イプシロンはまだお前達と本気の勝負をしていない。こんな形で潰されるのは不本意なのだ」

そしてデザームは吹雪の方を見る。黒目がちの瞳に見据えられ、吹雪は戸惑う。

自分の中のアツヤが言う――あいつは初めて、エターナルブリザードを止めた相手。奴を倒さなければ完璧になどなれはしない、と士郎としての自分も、あの瞬間感じ取っていたのだ。ライバルらしいライバルもいなかった白恋中のサッカーから、イナズマキヤラバンで日本中を巡る旅へ。

仲間達と出会い。イプシロンと戦い。久々に本気の悔しさを思い出した。自分の力の及ばない領域がまだまだあるのだという事を。

「吹雪士郎。貴様との決着もまだついてはいない。…そうだろう」

ドキリとする。まるで胸の内を見透かされたかのように。

「し…信じられませんかよ、そんなの！貴方はエイリアで…本当なら僕らが消えた方が、侵略には都合がいい筈でしょう！？」

ベンチにしがみついたまま目金が言う。それも間違いなく正論だった。実際、彼ら宇宙人は侵略者。雷門はそれを阻止しようとして

いる。

このまま自分達が海の藻屑になってくれれば、これ以上都合のいい事はない――その筈なのに。

「信じるか信じまいかは好きにすればいい。だが……」

そしてデザームの方も、至極最もな事を言う。

「確かなのは、このままなら全員御陀仏という事だ」

そうだ。もし畏だとしても。今の自分達は、デザームの力を借りない限り、この潜水艦から生還する術がない。

既にフィールドの反対側の入口からはちろちろと赤い炎が揺らめき、黒い煙が上がっている。船が沈むよりも、ここが炎に包まれる方が早いかもしれない。

「……いいでしょう」

「監督!？」

「眼を見れば分かる。……貴方は、正義感が強い。人を傷つける嘘をつける人間じゃないわ」

すくつと瞳子が立ち上がる。まるでデザームの事をよく知っているかのような口振りだ。

その時、潜水艦の中に駆け込んでいった塔子、照美、聖也の三人が戻って来るのが見えた。聖也はぐったりした様子の照美をおぶっている。何かあったのかもしれないが、それを尋ねるのは後だ。

「……俺も、信じる。デザーム」

戻ってきた彼らを視界に入れ、デザームを見て、円堂が言った。
「信じるべきものが何かくらい、分かるさ。……お前は嘘をついちゃいない」

「…僕も信じるよ」

「吹雪…」

円堂に続き、吹雪も顔を上げた。

「それに僕も、あんたと決着をつけたい」

瞳子も円堂も吹雪も賛成した。ならば他のメンバーも断る理由がなくなる。どちらにせよ、二ノ宮なんぞの手で、こんな場所で死にたい奴など一人としていないのだから。

まずは生きる。生きて、生き抜いてから考えればいい。その先の未来をどう在るべきなのかは。

「いい返事だ」

デザームの笑みが濃くなる。彼の掲げた黒いサッカーボールが、黒紫の光を放った。それは霧のように、緩やかに空間を包み込んでいく。

「大阪に、我らが廃棄した訓練施設がある」

空間転移。ワープの寸前に、デザームの告げる声が聞こえた。

「そこで再びあいまみえよう。楽しみに待っているぞ、雷門イレブンよ…！」

やがて黒紫の光の中、彼の姿も、沈没寸前の潜水艦も見えなくなった。

光が収まった時、吹雪達がいたのは愛媛埠頭。

真帝国学園は目の前で爆発し、海の中へと消えていったのだった。

【1 - 29・帝国に、光あれ】

救急車の音を聞く度に、あの日の事を思い出す。兄が死んだあの日。そして多分これからは今日の事も思い出すのだろう。

多分一生忘れられまい。その傷も、痛みも。むしろ忘れてはならない事なのだろう。

その痛みこそ、鬼道有人と音無春奈が生きた証なのだから。

「佐久間君……」

救急車の担架に乗せられていく佐久間を見る。不幸中の幸いと言うべきか、頭から上は無事だったようで。一時的にとはいえ意識を取り戻した彼は、横たわったまま春奈の方を見た。

「……すまなかったな。とんだ八つ当たりに巻き込んで」

「……いいえ」

掠れ、疲れきった声だが、この距離で聞くには充分だった。春奈は首を振る。

八つ当たりなんかでは、ない。自分は彼に恨まれても仕方ない立場だ。ある種影山より、自分の存在こそが兄を苦しめていたと言ってもいい。

淀んだ世界で、鬼道の存在が、鬼道を想う気持ちが春奈の支えとなっていた。きっとそれは佐久間も同じ。

それを身勝手な都合で奪われれば、憤るのも当然の事。

「もう……手も脚も動かないんだ。……きつとこれが、鬼道を悲しませた罰……。すくえなかった罰なんだ」

事実なのだろう。佐久間の首から下は不自然すぎるほど動かない。呼吸の音も、何だか引つかかっているように聞こえるほどだ。

「だからさ。…あんたに頼みがあるんだけど」

「…何ですか？」

その佐久間の動かない手を握り、春奈は尋ねる。

「あんたは、生きるよな」

「……！」

「あんたは、泣かせるなよ、あいつをさ」

何処かで見守ってくれているあの人を、悲しませてはいけない。
空の上で涙を流させるような事があつては、ならない。

『あんたがこのまま不幸になつても…鬼道は絶対喜ばない』

塔子が言ってくれた言葉を思い出す。

大好きな人を泣かせたくないから。笑っていて欲しいから。

幸せを、願う。

その気持ちは、自分達みんな、同じ。

「…はい」

春奈は頷く。

「生きます。お兄ちゃんに、笑っていて欲しいから」

生きて、生きて、生きて。

幸せを見つけて、生き抜く場所を見つけて。

ありがとう、と。佐久間はほっとしたように笑った。そして呟いた。

「また鬼道と、サッカーやりたかったな」

隻眼がゆっくりと閉じられる。

「あっち行ったら、またできるの、かな…」

ハツとする。佐久間が完全に意識不明に陥ったのが分かったのだろ。元より重傷患者なのだ。救急隊員達の動きが慌ただしくなる。駄目だ。

死んでは、駄目だ。彼はこんな場所で終わっていい人間なんかじゃない――！！

「佐久間さん！！」

ぐったりと、中に運び込まれる佐久間に向かって。春奈は精一杯叫んでいた。

「貴方も生きなきゃ駄目です！生きて…生きて下さいっ！！」

彼の護るべき帝国は、この過酷な現世にある。遠い遠い、手の届かない場所なんかじゃない。

「みんな貴方を待ってます！！私も待ってます！！だから……生きて帰ってきて下さいっ！！」

救急車のドアが閉まり、遠ざかっていく。春奈は祈るように己の手を握り締め、見送り続けた。

鬼道だけではない。源田も、佐久間も、愛されて愛されてそこにいる。今生きている。帝国では仲間達が彼らを待っている。自分も、待ち続ける。

どんなに残酷な世界だとしても。それが必ず光になる。パンドラの箱の底には、ひとかけらの希望が残されていたように。

秋が両手で顔を覆い、啜り泣いている。彼女との付き合いは長い円堂だが、こんな風に涙を流す彼女を見るのは――初めてかもしれない。

それだけにやるせない。本当にこんな結末しか無かったのか。本当にこれで良かったのか。

目の前の現実が重すぎて、過ぎてしまった悲劇が苦しくて、円堂は唇を噛み締める。

「…サッカーって、楽しいものな筈よね」

ポツリ、と夏末が呟く。

「誰かを傷つけるとか…壊すとか、苦しめるとか。そういうものじゃ、無い筈なのに」

どうして涙が出るのかしら。空虚なその声に、夏末の顔を見る事ができない。

勝負に負けて悔しい。そんな涙なら当たり前なのだ。いくら流しても構わない。それは次の笑顔に繋がっているから。

でも今の自分達は、違う。同じ無力さでも、何かが違う。負けたわけじゃないのに、二度と戻らない何かを悔やみ、失い、途方に暮れている。

――泣くな、俺。

まだつけたままだったグローブで、ゴシゴシと目元を擦った。顔に土がついたが、どうでも良かった。

「俺はキャプテンなんだ。キャプテンの俺が弱気になったら、チームは終わるんだ。」

自分は必ず最後まで立っている人間にならなくてはならない。どんな場所でも、それがキャプテンとしての責任なのだ。

彼らの前で、涙は見せるな。仲間達を不安がらせるな。言い聞かせ、グラつく心のネジをきつく締める。

「円堂」

さりげなく、一ノ瀬が側に歩いてきた。彼は何もかも分かっているような気がする。

円堂の気持ち弱くなっている事も、それでもどうにか脚を踏ん張ろうと足掻いている事も。

「無理、すんなよ」

その優しさが嬉しくて。

少しだけ、辛くて。

「うん」

なんとなく、理解していた。彼が鬼道の代わりに、皆を精神的に支える立場になるかと頑張っている事を。

自分達はそれだけ鬼道に寄りかかっていて。一ノ瀬もそれに気付いたに違いない。今更空けておくにはあまりに大きな穴なのだと。

「とりあえず全員一度病院、ね」

瞳子が疲れた顔で言う。さっきまで響木に電話していたようだ。相当説教されたと見える。その傍らではレーゼが悲しげな顔で彼女にしがみついている。

「これからの行動はその後で考えましょう。少なくとも染岡君は入院確定でしょうし」

「染岡君……」

俯く吹雪。佐久間、源田とともに染岡は既に病院に搬送されていた。足を骨折しているのは誰が見ても明らかだったからだ。

他のメンバーも満身創痍。照美や吹雪も、しばらく休ませなければマズいかもしれない。一ノ瀬や土門もかなりダメージを負っている筈である。

佐久間達はどうなるのだろう。鬼道の件、彼らは直接殺していないにせよ、リンチに加わったのは確からしい。どちらも十四歳は超えている。怪我が治ったら逮捕という事も考えられるのではないか。

「……救えなかった。あの人を」

ぐったりと聖也に支えられたまま、照美が言う。

あの人――影山零治。多分照美と彼の間には、自分達には推し量れぬものもあつたのだろう。恩人であつたのは確かだろうから。

潜水艦は爆発し、水底に沈んでしまった。何人が死んだだろう。脱出できたのはあの場にいた雷門陣と真帝国メンバーだけだ。何人もいただろう従業員達と影山の生存は、絶望的だろう。

真帝国メンバーはというと、呆然と近くに座り込んでいる。まるで糸の切れたマリオネットのように。キャプテンの不動は錯乱状態だった為、染岡達と共に既に救急車に乗せられていた。

彼らの事も、身元を確認し、処遇を検討しなくてはなるまい。

「照美ちゃんは、精一杯やったよ。あれがあの人なりのケジメのつけ方だったんだ。…今はそう、思うしかない」

声もなく涙を流す照美を抱きしめる聖也。

みんな、悲しい。大好きなサッカーをして、それなのに悲しい。

- - 終わらせなくちゃいけないんだ。

円堂は拳を握りしめる。

大好きなサッカーを護る為に、全ての悪夢を断ち切る。それはきつと自分達にしか出来ないこと。

悲しいだけのゲームはもう、これっきりだ。そうしなければなら
ないのだ。

「……そろそろ、頃合いかもしれないな」

照美を抱きしめたまま、聖也は一つ息を吐く。そこにいたのは普段の楽天家でも、さっきの阿修羅のような少年でもない。真剣な、戦士の顔だった。

「みんなにも、話すよ。鬼道が調べてた事…そして俺が知っている
事の、全てを」

突然目眩に襲われ、デザームは膝をついた。

「だ、大丈夫かい!？」

グランが慌てて駆け寄ってきた。申し訳なく思いながらもその手を借りて立ち上がり、手すりに寄りかかる。

今この廊下には、自分と彼の二人しかない。部下達の前でなくて本当に良かった。

これ以上イプシロンのメンバーに心配をかける訳にはいかないのだ。キャプテンの自分が弱れば、ただでさえ動揺している彼らの士気をさらに下げてしまう事間違いない。

「ごめんね。…今こんな事頼めるのは、君しかいなかったから。俺が出ていけたら良かったんだけど」

「構いません、グラン様。貴方はジェネシスの正当なる継承者。まだ表舞台に出るには早すぎますから」

「まだ正式決定じゃないんだけどね」

グランは謙虚な姿勢を崩さない。しかし、彼の率いるガイアがジェネシスの最有力候補である事は日を見るより明らかだった。

バーンとガゼルも頑張っている。実力だけ見れば互角かもしれない。しかしガイアは他二チームと比べ連携に長け、メンバー全員の忠誠心も高い。

それにいざという時最も冷静で頼りがいのあるキャプテンが誰かと言えば、…グランを置いて他にいないのだ。それに彼のチームには、グランと同等の実力を持つウルビダという優秀な副官もいる。

「…すみません。少し休ませて、下さい」

断りを入れて、デザームは廊下に座り込んだ。正直立っているのも辛い体調。実験の後遺症か、熱がなかなか引いてくれないし目眩

と吐き気も酷い。雷門メンバーの前ではかなり無理をしていたのだ。それでも、グランの命令とはいえ、二ノ宮の命令に背く事を他の誰かにさせるわけにはいかない。自分はとうにあの女に目を付けられているが、仲間達は違うのだ。巻き込むわけにはいかない。それに。

「本当に…レーゼは雷門にいたのですね」

どうしてもこの眼で確かめたかったのだ。自分が追放した彼が無事である事を。

「本当に…何も覚えていないとは」

「デザーム…」

そこそこ付き合いはあったつもりだ。だがレーゼは自分の姿を見ても、まるで反応を示さなかった。まるで初めて会う人間を見るように。

何も知らなかったとはいえ。これが自分のした事の結果だ。彼は記憶を消され、かつて見下していた敵チームに保護されている。これも運命なのだろうか。

「…でも。生きていた」

それでも生きていてくれただけで良かった、なんて。そう思うのは自分のエゴなのだろうか。

「なんか、分かる気がするな」

「何がです？」

「ふふっ」

グランはデザームの隣に座って、言った。

「デザームがイプシロンのメンバーにあんなに慕われてる理由。分かるなあって」

「…貴方にはかないませんよ」

キャプテンとしての在り方を自分に教えてくれたのは、グラン達だ。言葉にはしなくともデザームは、彼を心から尊敬している。自分は実力こそ劣るとしても、気持ちだけでは負けたくない。いつか彼のような心強きリーダーになる為に。

次章予告

復讐の舞台は幕を下ろし。
次なる惨劇の幕が上がる。

「明日も…その大事な人が側にいてくれるだなんて保証は、神様だつてしてくれない」

「生きてて、いいの？」

「あんたを怯えさせる全てのもんから、うちがあんたを護つたる！
」

「ごめんね、染岡君」

決意の雷門く選ばれた勇者達く。

「感謝するぞ。今日まで私の我儘に付き合ってくれた事を」

「人間ナメンじゃねえぞ、魔女」

「貴方達は生まれ変わるのよ。大好きなお父様の為に、ね」

「頑張りましょうよ！強くなったら、きっと陛下もお喜びになります」

覚悟のエイリア＜仕組まれた侵略者達＞。

「お願いっ…デザーム様を死なせないでえっ…！」

誰もが求めたのは、ありきたりな平穩。

誰もが手を伸ばすのは、最期の樂園。

イプシロンは全てを賭け、雷門に勝負を挑む。

「強いでしょうよ。女は恋をして綺麗に、強くなる生き物だからね」

「悪イと思うなら、生きて、ブツ倒れるまで働きやがれ。…帝国でよ」

「一之瀬のサッカーは一之瀬だけのものだ…っ誰かに操られた結果なんかじゃない…！」

「破滅の魔女、グレイシア。ここに」

「また一緒に、風になろうぜ」

「信じてるからよ…治兄ィ」

「でもね、リカ。運命っていうのは、諦めの言葉では無いのですよ」

終わりの鐘を鳴らすのは、傷だらけの細氷。

「…『めんなさい』……」

二次創作、イナズイレブン長編。

《この背中に、白い翼は無いとしても。3》

く第二章・どうか畏れないで、目の前に在る真実を。く
近日公開予定。

「私の手を、いつも引いてくれたのは…貴方、だった」

絶望を知る時、彼らは選択する。

第一章後書き

まずはこの小説を読んで下さった方、全てにお礼申し上げます。初めまして、もしくはこんにちは。煌はじめ（スメラギハジメ）です。毎度無駄に長い長編と無駄にうっとおしい心理描写に定評があります。

今回は真帝国編ということで、旧帝国組と春奈ちゃんにスポットを当てさせていただきました。

前章をお読みいただいた方はご存知と思います。序章ラストでの、鬼道有人の死。そこからいかに雷門を立ち直らせるか、が彼らにとっても私にとっても最初の課題でした。正直、難産だったです。大切な人の死から立ち直って前を向くのは、並大抵の覚悟じゃないですから。

そこで一番辛い筈の塔子に最初に立ち上がってもらうことで、彼女の強さを表現……しようとした痕跡はあるかと。説明しないと誰もわかんのが最大の問題です（ザ・国語力不足）。

また、ゲームではプレイヤーとして使えるマネジの子達を生かしたくて、春奈ちゃんを選手にしてみました。プレイされた方はご存知でしょうが、マネジトリオはなかなか強力な必殺技を覚えてくれるんですよ（ステータスはともかく）。ただ応援だけさせとくのは勿体無いなと（笑）。

さらに今回、ある意味一番書きたかったのが影山の本心と真実。ゲームの3で明らかになる通り、彼はけして根っからの悪人ではないのですよね（もっともこの話を執筆した時は2が発売して間もない頃でしたが）。本当はサッカーが大好きで鬼道の事も本当に父親として愛していて……でも歪むしかなかった悲しい人。少しは皆様にお伝えすることが出来たでしょうか。

この物語ですが、皆様お気づきの通り、まだまだ完結してません。あくまで“第一章”完結というだけです。ここまできてまだ第一章。

本気で長いのはこれからです…（滝汗）少しだけお休みした後、続きを執筆させていただく予定です。今後も悲慘な展開が続きます。次章予告で分かります通りイプシロン虐めがハンパないです。特にデザーム様。ぶっちゃけ3top虐めもハンパないです。

こんなんでも続き読んでやるよ！むしろさつさと書け！という神様のごとき方。感想、切実にお待ちしておりますゆえ、お気軽に足跡残してやって下さい。喜びのあまり逆立ちして屋上ダイブいたします（意味不明だから！！）。

それでは長く語ってしまいましたが、お後がよろしいようで。縁があればまた。

煌はじめ 拝

追記

ご感想、ごアクセス、誠にありがとうございます！作者の煌はじめです。

今回の第一章から、感想の数もあくせ数も増え、本当に驚かされる事ばかりでした。こんな悲惨極まりない駄作でも“続きが気になる”と仰有って下さる方に感動したと仰有って下さる方…。本当に光栄すぎて涙が出そうです。

本当はもっと早くアップしたかったのですが、少々間が空きましたこと心よりお詫び申し上げます。仕事さえ…仕事さえなけりや…！おのれ深夜残業！

本日七月二十四日、この物語の続きである『この背中に、白い翼は無いとしても。』3《第一章》どうか畏れないで、目の前に在る真実を『』をアップいたしました。“同一作者の最新小説”から飛べると思います。何故深夜なのってそりゃ深夜勤明けだからという分かり易い理由です。たかが十二時間労働、されど十二時間労働（涙目）

繰り返しになりますが…相変わらず残念な文章力に加え、救いのない展開が続きますが、最後は必ずハッピーエンドです。何卒新章もお付き合いいただければ幸いです。

煌はじめ 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7475m/>

この背中に、白い翼は無いとしても。 2 《第一章～どうか忘れないで、君が交

2010年10月10日13時35分発行